

堆積土(カマド・煙道部)

土	色	土		性	備	考
10 YR 3/4	暗褐色	シ	ル	F		
10 YR 3/3	暗褐色	シ	ル	٢	炭化物を含む	
10 YR 2/2	黒褐色	٤	ル	٢	炭化物を含む	
10 YR 2/2	黒褐色	シ	ル	٢	炭化物を含む、粘性なし	
10 YR 2/2	黒褐色	シ	ル	٢	炭化物を含む	
10YR 3/2	黒褐色	ż	ル	٢	焼土若干、炭化物を含む	
10 YR 2/1	黒 色	シ	ル	٢	焼土、炭化物を含む	
5 YR 3/4	暗赤褐色	焼		土.	炭化物を含む	
10 YR 4/4	褐 色	焼		土	炭化物を多く含む	
	10 YR 3/4 10 YR 3/3 10 YR 2/2 10 YR 2/2 10 YR 2/2 10 YR 3/2 10 YR 2/1 5 YR 3/4	土 色 10 YR 3/4 暗视色 10 YR 3/3 暗褐色 10 YR 2/2 黑褐色 10 YR 2/2 黑褐色 10 YR 2/2 黑褐色 10 YR 2/2 黑褐色 10 YR 2/1 黑褐色 10 YR 2/1 黑色 5 YR 3/4 暗赤褐色	10 YR 3/4 暗褐色 シ 10 YR 3/3 暗褐色 シ 10 YR 2/2 黒褐色 シ 10 YR 2/2 黒褐色 シ 10 YR 2/2 黒褐色 シ 10 YR 2/2 黒褐色 シ 10 YR 2/1 黒 色 シ 5 YR 3/4 暗赤褐色 焼	10 YR 3/4 暗褐色 シル 10 YR 3/3 暗褐色 シル 10 YR 2/2 黒褐色 シル 10 YR 2/2 黒褐色 シル 10 YR 2/2 黒褐色 シル 10 YR 2/2 黒褐色 シル 10 YR 2/1 黒色 シル 5 YR 3/4 暗赤褐色 焼	10YR 3/4 暗褐色 シルト 10YR 3/3 暗褐色 シルト 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 2/2 黒褐色 シルト 10YR 3/2 黒褐色 シルト 5YR 3/4 暗赤褐色 焼 土	10YR 3/4 暗褐色 シルト 10YR 3/3 暗褐色 シルト 炭化物を含む 10YR 2/2 黒褐色 シルト 炭化物を含む 10YR 2/2 黒褐色 シルト 炭化物を含む、粘性なし 10YR 2/2 黒褐色 シルト 炭化物を含む 10YR 2/2 黒褐色 シルト 炭化物を含む 10YR 3/2 黒褐色 シルト 焼土若干、炭化物を含む 10YR 2/1 黒色 シルト 焼土 茶干、炭化物を含む 5 YR 3/4 暗赤褐色 焼 土 炭化物を含む 炭化物を含む 炭化物を含む 炭化物を含む 炭化物を含む 炭化物を含む 炭化物を含む 炭化物を含む 炭化物を含む 炭化物を含む 大水のののののののののののののののののののののののののののののののののののの

第85-2 図 BF21竪穴住居跡

びている。煙道底面は、中央に向って極く緩かに下がり、中央部分が最も深くなり、そこから煙出部へ緩かに上って行く。煙出部にピットは認められない。なお、煙道部分は砂礫層をくりぬいているため周壁をシルトで固めていたことが特徴である。カマドの軸方向はN-4°-Wで南北壁中点の軸線と一致する。

**〔その他の施設〕** 貯蔵穴状ピット、周溝は認められない。柱穴以外のピットとしては $P_s \sim P_s$  のピットが存在する。 $P_s$ は径50×35cm、深さ約20cm、 $P_s$ は径約70×60cm、深さ9 cm、 $P_r$ は径約90×60cm、深さ約35cmの規模をもつ深皿状、半円状の断面形を呈するピットである。これらのうち、 $P_s$ と $P_s$ は埋土中に焼土と炭化物を多く含んでいるものである。又、 $P_r$ のすぐ脇、住居の南東隅には南北約1.10cm、東西約80cmで、厚いところで10cm内外の堆積を示す焼土があり、その広がりは壁外にも及ぶ。しかしその下には、特に遺構は認められない。ただ、この焼土堆積の西及び北西にあたる床面に良質と思われる青白色の粘土塊が2ヵ所に存在した。

[年代決定資料] 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、北壁沿い、及びカマド周辺の床面や、南壁沿い中央よりの床面等から出土した土師器、須恵器、手捏ね土器、紡錘車等がある。実測したものは、土師器坏8点、高坏1点、饗5点、手捏ね土器4点、須恵器大饗1点、紡錘車3点、鉄製品1点である。

土師器 製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。

坏 (第86図1~8) (1)は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る丸底で、底部との境界に形式的になった軽い段を有するものである。(2・4)は、底部から口縁部にかけて内湾直立気味に立ち上がるもので平底に近い丸底である。底部との境界に形式的になった軽い段を有する。(3)は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段の丸底である。(5~7)は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段平底に近い丸底で、(5)は、口径に比べて器高の深いものである。(8)は、底部よりや、外傾気味に立ち上り体部上半がわずかに内湾する平底である。調整技法をみると外面は、(1)は口縁~底部ヘラミガキ、一部ヘラケズリ(2・4)は、ヘラミガキ、ヘラケズリ、(5)はヨコナデ、ヘラミガキ、(6)はヨコナデ、底部にハケメ痕、(7)は、ヘラミガキ、ヘラケズリ、(8)はヘラミガキ、ヘラケズリと多様である。内面は、いずれもヘラミガキ、黒色処理されている。

小甕 (第86図10・11) (10)は、口縁部が外反し肩部に軽い段を巡るもので、体部最大径が上半に位置するもの、(11)は、口縁部が外反し体部最大径が肩部に位置する無段のものである。調整技法は、いずれも口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケメ後ケズリ、内面は、(10)はナデー部ケズリ、(11・12)はナデである。

中甕 (第86図12) 口縁部が外反し肩部に軽い段を有する。体部最大径は上半にあるものである。調整技法は、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面はケズリ、内面はナデである。

大甕 (第86図13) 口縁部がくの字状に外反し肩部に軽い段の巡る長胴である。体部最大径は上半にあり、底部は、体部から外へ張り出す。調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は、ハケメである。

**手捏ね土器** (第86図15~18) 径が 5 cm前後の底の丸い小型の坏状のものである。指痕やナデがみられる。

#### 須恵器

大甕 (第86図19) 口縁部が外反し、口縁上端がわずかに上方へつまみ出されている肩の張ると思われる甕の上半部分である。体部内外面ともに叩き目が施されている。

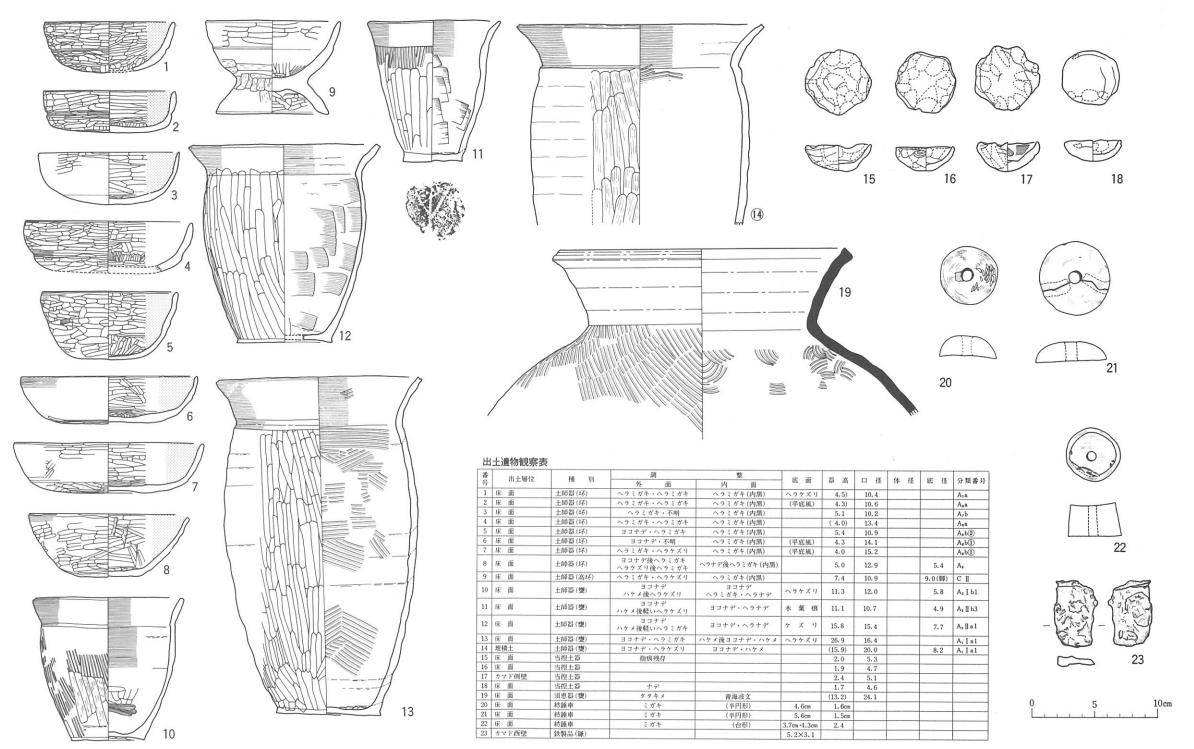
## 土製品

**紡錘車** (第86図20~22) 平面形は径が約3.7cm~5.6cmの円形を呈し、断面形は、高さ約1.5 cm~2.4cmの半円形、台形を呈しているもので、表面はミガキが施されている。

**鉄製品** 長さ5.2cm、幅3.1cmの板状の破片である。鎌の一部とも推定されるものである。その他、鉄滓が20数個出土している。

〔**堆積土出土遺物**〕 別表の如く土師器、須恵器、縄文土器の破片が出土している。

土師器 製作に際しロクロ未使用のものである。



第86図 BF21竪穴住居跡出土遺物

大甕 (第86図14) 口縁部が長く「くの字」状に外反する肩部に軽い段の巡る長胴の上半部分である。調整技法、口縁部内外面はヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面はハケメである。

その他、土師器坏は内黒の破片、須恵器は、タタキメのある大甕の破片がある。

# ①C E 68竪穴住居跡 (第87図-1·2)

〔遺構の確認〕 C調査区の東端附近、CH74竪穴住居跡の北約8mの地点の地山面で検出したものである。

[重複] 南壁の一部がCE71ピットを切って構築されている。

**〔平面形・規模**〕 平面形は方形であり、規模は長軸(東西)約3.5m、短軸(南北)約3.2m である。又、床面積は約11.2mである。南北壁の中点を結ぶ軸線は、 $N-0^\circ-EW$ で磁北とほぼ一致する。

[壁] 地山を掘り込んで壁としているもので、立ち上りも垂直に近くしっかりしている。残存状態の最も良好な北、西壁で約30cmを計る。

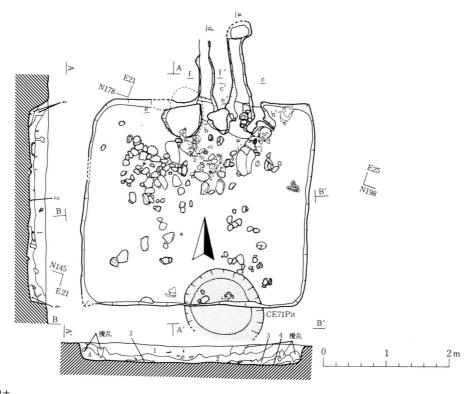
[床] 地山をそのま、床面としており平担で固い。床面直上には径10~50cmほどの川原石が存在し、特に北半に多く、これらは、円形又は、コの字状に配石されているようにもみられるが意図的なのかどうか不明である。

〔**堆積土**〕 4層に分けることができる。1層は、黒褐色腐植土で住居の全体に堆積しているが床面には達していない。2層は、黒褐色腐植土で、土師器片を含み、壁際を除き主に床面に堆積している。3層は、暗褐色シルトで床面に部分的に堆積している。4層は、黄褐色シルトで、主として壁際に堆積している。

〔柱穴〕 認められない。

[カマド] 北壁中央(I)と、や、東寄り(II)の2ヵ所に付設されている。(I)は、煙道のみが残存していたもので、規模は長さ約100cm、径約20cmで煙出部分は既に破壊されて検出できなかった。煙道部底面は(II)に比べて深い位置にあったものである。一方(II)は、燃焼部と煙道より成るもので、両側壁はシルトで構築されている。右側壁の南東隅には、側壁のシルトを押さえるような形で底のない甕が伏せた状態で検出されている。燃焼部内は、熱を受けてレンガ状に固く、煙道口には、カマド本体のシルトを支えるために使用したとみられる川原石が、西側に2個東側に1個、それぞれ据えられていた。煙道部へは、壁近くで約30cm上り、それから壁外へと約100cm延びている。煙出部は半壊されて上部は明かでないが、煙道底面より約20cm下ったピットが存在した。カマドの軸方向はN-7°-Wである。

〔その他の施設〕 カマド(I)の燃焼部のあったと思われるところに、北壁を掘り抜いた形で、 径約65cm、深さ約65cmのフラスコ状に近い断面形を有するピットが存在した。中より土師器の



第87-1図 CE68竪穴住居跡

破片が出土しており、貯蔵穴状ピットといわれるものと思われる。

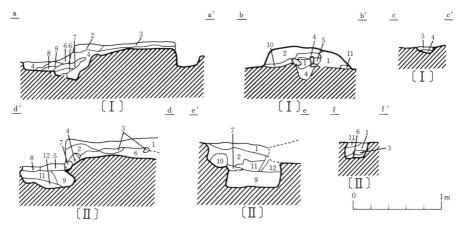
[年代決定資料] 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内、ピット、 床面上から出土の土師器、須恵器及び、床面直上から出土した和同開称(銅銭)がある。実測 したものは、土師器坏2点、高坏1点、甕6点、甑1点、須恵器坏2点である。

**土師器** 製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。

坏 (第88図1・2) 底部より口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段丸底である。調整技法は、口縁部、体部はヨコナデ、ヘラミガキ、底部はヘラケズリ、一部ハケメである。内面はヘラミガキされ黒色処理されている。

高坏(第88図 5) 坏部は、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段のもので脚部に比べて器高の深いものである。脚部は、「八の字」に開き極端に短いものである。

**甑**(第88図7) 口縁部が外傾し、肩部に段を有する無底式のものである。体部の最大径が 肩部にあり、底部に比べて器高が底い長胴である。器面調整は、口縁部内外面はヨコナデ、体 部外面は、ヘラケズリ、内面はヨコナデ、ケズリが一部みられる。



カマド(旧)煙道部堆積土[]]

146	土	色	±		性	備考	
1	10YR 3/2	黒褐色	隙	植	生.	炭化物を若干含む	
2	10YR 2/3	黒褐色	腐	植	土:	シルトブロック状・炭化物を含む	
3	10YR 4/6	褐 色	シ	ル	١	炭化物を若干含む	
4	10YR 4/5	にぶい黄褐色	٤	ル	۲		
5	10YR 5/6	黄褐色	۶	ル	۲	焼土ブロック状、炭化物若干含を	,
6	10YR 2/3	黒褐色	臈	植	土	焼土・炭化物を含む	
7	10YR 2/1	黒 色	腐	植	土:	炭化物を含む	
8	10YR 2/2	黒褐色	腐	植	土	焼土、炭化物、シルト粒状を含む	
9	10YR 2/3	黒褐色	臈	植	土	焼土、炭化物、シルトブロック状含	t
10	10YR 2/3	黒褐色	臈	植	土:	9層に比して焼土、炭化物少ない	
11	10YR 3/3	暗褐色	٤	ル	٢	黒ボクとシルトの混土、炭化物を	干
12	10YR 4/4	褐 色	シ	ル	۲	焼土、炭化物を含む	
13	10YR 4/4	祕 色	٤	ル	٢		

カマド(新)煙道部堆積土[Ⅱ]

//	マ I (利ル)	至1旦可2年1貝	Д(Ц)	
166	土	色	土性	備考
1	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	
2	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト	焼土、炭化物を若干含む
3	10 YR 3/4	暗褐色	腐植土	焼土を含み、シルトブロック状に入る
4	10 YR 3/3	暗褐色	シルト	焼土、炭化物を微量に含む
5	10 YR 3/4	暗褐色	腐植土	炭化物、焼土を微量に含む
6	7.5YR 5/8	明褐色	焼 土	
7	7.5YR 5/6	明褐色	焼 土	6層より黄味強く炭化物を含む
8	7.5YR 6/6	橙 色	焼 土	
9	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	焼 土	炭化物を含む
10	10 YR 2/2	黒褐色	腐植土	
11	5 YR 4/6	赤褐色	焼 土	炭化物を多く含む

第87-2図 CE68竪穴住居跡

大甕 (第88・89図 8~12) いずれも口縁部が「くの字」に長く外反し、肩部に軽い段が巡り体部最大径が胴部上半に位置する長胴(8~12)である。口唇部を上方へつまみ出し内側に稜をもつもの(8~9)・(11~12)と、単純に上方へつまみ出しているもの(10)とがある。底部は木葉底が多く口径に比べて底径の大きいものが多い。器面調整は、口縁部内外面は、ヨコナデ、体部外面はハケメのものがあり、内面はハケメが主である。

#### 須恵器

坏 (第88図3・4) いずれも底部の破片で、切り離し技法は、回転糸切無調整のものである。

## 古銭 (第90図)

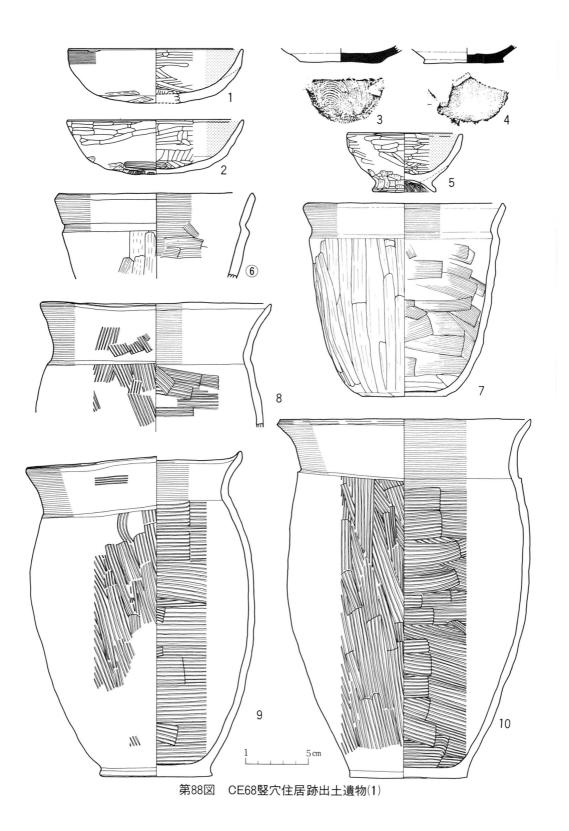
図版-47-11和銅開

珎(銅銭)(初銭年代708年 次期720年)が4枚竪 穴住居内南西床面より出土している。うち完形品及 び完全なるものは各1枚で他は破片である。完形品 は径2.5㎝重さ2.2g である。

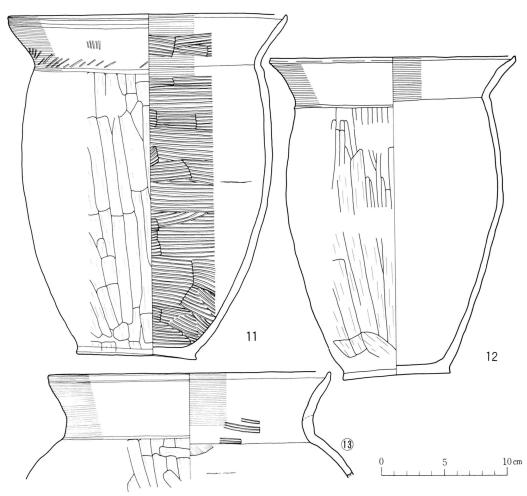




第90図 古銭拓影図



- 172 -



出土遺物観察表

番	出土層位	FID 591	[12]	整	底面	器 高	口径	体径	₩ 1¥	分類番号
号	TO IT WATER	198 79	外 面	内 面	45. IHI	fact [11]	11 1±	17 1±	45. 1±.	7) 33 HF 73
1	ピット内	土師器(坏)	ヨコナデ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラケズリ	4.3	(14.4			A,b
2	床 面	土師器(坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラケズリ	4.3	14.1			A,b
3	床 面	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ槙	回転糸切り				( 6.2)	C, I
4	床 面	須惠器(环)	ロクロ根	ロクロ痕	回転糸切り				( 5.8)	C, [
5	ピット内	土師器(高坏)	ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ(内黒)		4.7	9.2		5.1	CI
6	堆積土	土師器(變)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ		( 6.5)	(15.8)			A,bl
7	床 面	土師器(骶)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	15.3	16.1		6.6	ВП
8	床 面	土師器(變)	ハケメ後ヨコナデ ハケメ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ		( 9.8)	(18.4)			A <sub>1</sub> a3
9	床 面	土師器(變)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ		25.5	17.2		9.0	A <sub>1</sub> a2
10	床 面	土師器(變)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	木 葉 痕	28.6	20.1		9.4	A <sub>1</sub> a3
11	床 面	土師器(變)	ハケメ後ヨコナデ ヘラケズリ	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ	木 葉 痕	27.2	22. 1		9.5	A <sub>1</sub> a2
12	床 面	土師器(變)	ヨコナデ ミガキに近いヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ(磨滅)	木 葉 痕	25.3	19.6		8.6	A <sub>1</sub> a2
13	堆積土	土師器(變)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ		(8.3)	22.5			A <sub>1</sub> a3

第89図 CE68竪穴住居跡出土遺物(2)

[**堆積土出土遺物**] 別表の如く、土師器、須恵器、赤焼の土器の破片が出土している。実測したものは甕の口縁部上半のもの2点である。

中甕 (第88図 6) 口縁部が外傾し肩部に段の巡るものである。口縁部の形態からみると(7) の甑と類似しており、或はそれと同様のものと考えられる。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面はナデである。

大甕 (第89図 13) 口縁部が長く「くの字」に外反し、口唇部分が上方につまみ出され内側に稜をもつ球胴形の甕と思われるもの、上半である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は一部にハケメ、ナデ痕がみられる。

その他、坏の破片は内外面ミガキ黒色処理された口縁部の破片、甕は、外反する口縁部及び 長胴とみられるもの、破片でハケメ、ケズリのものが主である。須恵器は、坏の口縁部、赤焼 き土器は坏の小破片である。

# ①CF24竪穴住居跡(第91図)

〔遺構の確認〕 C調査区の西端近くCH30竪穴状遺構の北東約5.4 m、CG12竪穴状遺構の 北西約6.4 mの地点の地山面で検出されたものである。

[重複] CF24ピットが北西床面下に存在し、北側の溝状の張り出し部分の先端にCF21ピットがある。又、南東隅はCG21ピットと接している。

[平面形・規模] 平面形は、北壁中央に溝状の張り出し部分が存在するかそれを除けばほぼ 方形である。規模は、長軸(南北)約3.2 m、短軸(東西)約3.1 mであり、床面積は約9.6㎡ である。なお南北壁の中点を結ぶ軸線はN-4°-Wである。

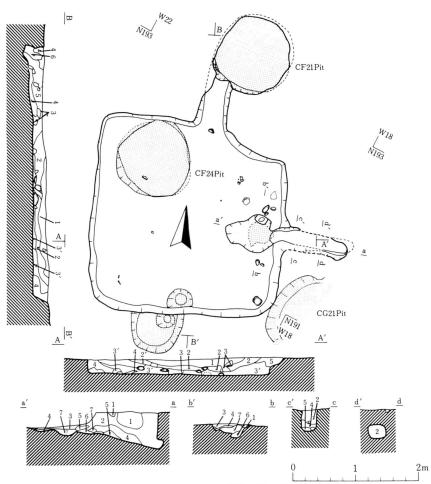
[**壁**] 地山をそのま、壁としているもので、垂直に近い立ち上りを呈している。北壁中央には、北に走る幅約55cm、長さ75cmの溝が外方のCF21ピットに続いているため切れている。

[床] 地山を床面とし平担で固い。床面ほぼ中央には径約90×90cmの範囲に人頭大の川原石が存在した。特に、埋設されているものではない。

**【堆積土**】 細かく分けると8層に分けられるがⅣ層に大別できる。 I 層は、黒褐色の腐植土で、住居のほぼ中央にレンズ状に堆積し、床面には達していない。 II 層も、やはり黒褐色の腐植土で、 I 層より壁に近いところより中央に向ってレンズ状に堆積し床面には達していない。 III 層は、黒色のシルトで主に床面に薄く堆積している。 IV 層は、黒褐色のシルトで壁際より中央に向って床面に堆積している。

〔柱穴〕 認められない。

[カマド] 東壁中央に付設されている。燃焼部と長さ約120cmの煙道部より成る。両側壁は既になく、皿状に落ちこみ熱で固くなった底面と焼土の堆積が認められたのみである。煙道は東壁がトンネル状に住居の床面と同じレベルで少し壁外にのび、その後、緩い傾斜をもって煙



堆積十

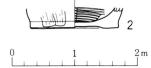
<b>上比1</b> 男	1				
大别	層	土	色	土性	備考
I	1	10YR 2/2	黒褐色	腐植土	炭化物、縄文土器片、木根を含む
П	2	10YR 2/2	黒褐色	腐植土	炭化物、縄文土器片、焼土を若干含む
П	2'	10YR 2/2	黒褐色	腐植土	炭化物を含む
	3	10YR 2/2	黒褐色	シルト	炭化物、焼土を若干含む
Ш	3′	10YR 2/2	黒褐色	シルト	炭化物、地山の土がブロックで入る
	4	10YR 2/2	黒 色	シルト	
TV.	5	10YR 2/1	黒 色	シルト	
IV	6	10YR 2/2	黒褐色	シルト	

# 堆積土(カマド・煙道部)

屦	土	色	土		性	備考
1	10YR 3/4	にぶい黄褐色	シ	ル	۲	
2	7.5YR 2/1	黒 色	腐	植	土	
3	10YR 2/2	黒褐色	ب	ル	۲	炭化物若干含む
4	10YR 3/3	暗褐色	シ	ル	۲	炭化物若干含む
5	10YR 2/2	黒褐色	シ	ル	۲	
6	10 YR 4/4	褐 色	シ	ル	۲	比較的多く炭化物を含む
7	5 YR 3/6	暗赤褐色	シ	ル	۲	焼土

# 第91図 CF24竪穴住居跡







# 出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調 外 面	整 整 内 面	底 面	器高	口径	体 径	底 径	分類番号
1	床 面	土師器(坏)	ハケメ後ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラケズリ	( 2.8)				A,b
2	床 面	土師器(甕)	ヘラケズリ	ハケメ	ヘラケズリ	( 1.8)			7.0	
3	床 面	鉄製品	(刃子)5.5×1.6×0.2	(cm)						

第92図 CF24竪穴住居跡出土遺物

出部へ下り煙出部分が一番深くなっている。煙出部奥壁に抉れが認められるが特にピットは存在しないでほぼ垂直に地上へ出る。

〔その他の施設〕 床面南壁際にはP、が存在するが皿状の浅いものである。その他貯蔵穴状ピット、周溝等は存在しない。なお、既述した北壁中央より外方に延びる溝は、緩い傾斜でCF21ピットへと落ちこんでおり、排水のための施設として使用されたことも考えられる。

〔年代決定資料〕 住居の使用及び構築の年代等を決定する資料としては、床面出土の土師器 や鉄製品の一部があるが、完形品等もなく、いずれも破片のみで、しかも個体数が非常に少な い。土師器坏1点、小型甕の底部1点、鉄製品1点が実測できたすべてである。

土師器 製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。

坏 (第92図1) 口縁部が欠失しているが底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段 丸底と思われるものである。調整技法は、外面は、ハケメ後へラミガキ、内面は、ヘラミガキ、 黒色処理されている。

小甕 (第92図2) 底部のみのものであるが残存破片や底径から小型甕の底部とみられるものである。外面は、ヘラケズリ、内面は、ハケメであり、底面はヘラケズリされている。

**鉄製品**(第92図3) 刀子の一部と思われるもので長さ5.5 cm、幅1.6 cm、厚さ0.2 cm の鉄 片である。

〔**堆積土出土遺物**〕 別表の如く、土師器(坏、甕)、縄文土器の破片が出土しているが実測できるものはない。坏は、内黒の破片で内外ミガキ、無段丸底のものと思われるものである。 甕、縄文土器片は摩滅の著しいものである。

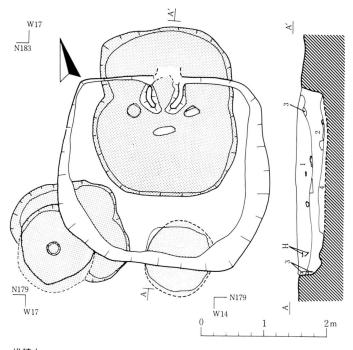
#### (2)C J 18竪穴住居跡(第93図)

〔遺構の確認〕 C調査区の南西附近DA24竪穴住居跡の北東約3mの地山面で検出したものであるが煙道部分は縄文時代とみられるピットを既に精査していたために確認できなかったものである。

〔**重複**〕 この住居跡はCI 18ピット、CJ 18複合ピット、CJ 15ピットと多数の縄文時代に属するとみられるピット群上に構築されているもので、北壁、南壁は、それぞれのピットをわずかに切っている。

「**堆積土**〕 2層に分けることができる。1層は、黒褐色の腐植土で、壁際を除き中央附近を中心に皿状に堆積し床面には達していない。2層は、やはり黒褐色腐植土で壁際より中央にかけて住居全域に堆積し床面にも達している。その下に貼床した層3層が認められる。

**〔平面形・規模**〕 平面形は隅の丸味が強く中央部分もや、胴張りの隅丸方形である。規模は長軸(東西)約 $3.4 \,\mathrm{m}$ 、短軸(南北)約 $3.0 \,\mathrm{m}$  であり床面積は $10.1 \,\mathrm{m}$  である。南北壁を結ぶ中軸線は $N-10 \,\mathrm{m}$  である。



〔壁	地山面をそのま、
壁と	しているもので立ち上
りは	比較的鋭いものであり、
壁面	も保存状況が良好であ
る。	最も良好な北壁で約40
cmを	計る。

「床」 床面は地山の上に シルトを貼った貼床である。 一面に焼土の散布が認められ、特に、北西隅には焼土 が厚く堆積しており、その 中より多くの土師器片が出 土している。

〔**柱穴**〕 床面より柱穴と みられるピットは確認され なかった。

堆積土

柯	土	色	土.	11:		前	考	
1	10YR 2/2 黒	褐色	腐	植	±.	土師器片を含む		
2	10YR 2/2 黒	褐色	ISF	植	士:	焼土、炭化物を含む		
3	10YR 2/6 明	黄褐色	シ	ル	٢	貼床部分		

# 第93図 CJ18竪穴住居跡

[カマド] 北壁中央に付設されていたものである。両側壁はシルトで構築され、左側壁には 芯材として土師器の甕が伏せた形で使用されていた。燃焼部は、焚口部分が狭く、中央部分が 広いきんちゃく状を呈している。煙道部は、北壁をくりぬいて住居外へ延びていることは確認 されたが、大部分は、既述の如く確認できなかったものである。カマドの軸線に対する方向は  $N-20^{\circ}-E$ である。

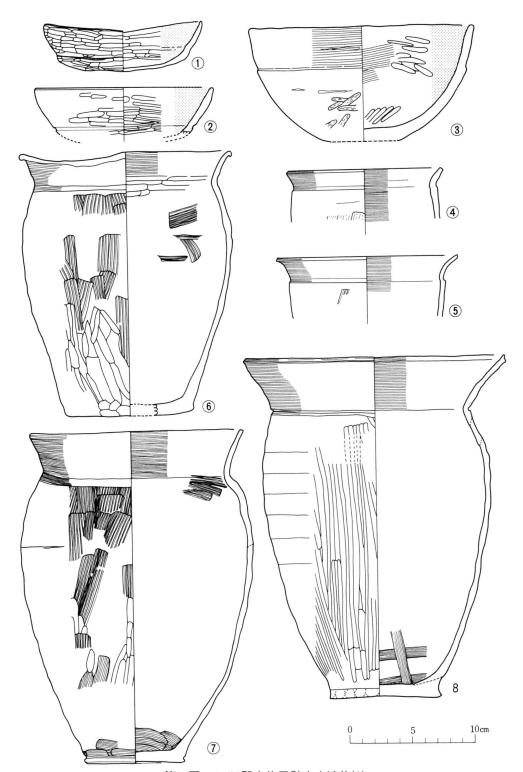
〔その他の施設〕 認められない。

[年代決定資料] 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内、煙道部より出土の土師器がある。

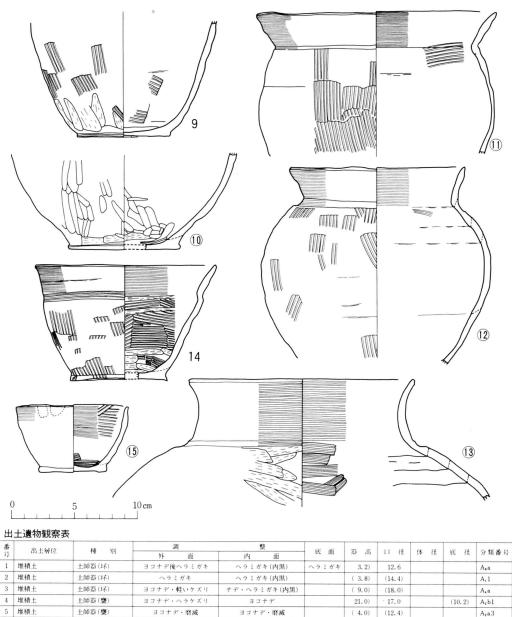
土師器 製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。

大甕(第94図8・9) (8)は口縁部が外反し、口唇部がわずかに上方に引き出され内側に稜を有するもので、体部最大径が肩部近くにある長胴である。(9)は、長胴の下半部である。調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は(8)はヘラケズリ、(9)はハケメ後ヘラケズリ、内面は、(8)はナデ、(9)はハケメである。

小甕 (第95図14) 口径が器高より大きくしかも口径に比べて底径の大きいもので底部より



第94図 CJ18竪穴住居跡出土遺物(1)



番	出土粉位	極勢	,02	整	底面	23 .05		11. 19		
55	III II. WIV.	198 79	外 面	内 面	14. III	23 /5	[] 径	体 径	底 径	分類番号
1	堆積土	土師器(坏)	ヨコナデ後ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)	ヘラミガキ	3.2)	12.6			A,a
2	堆積土	土師器(坏)	ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)		( 3.8)	(14.4)			A, 1
3	堆積土	土師器(坏)	ヨコナデ・軽いケズリ	ナデ・ヘラミガキ(内黒)		( 9.0)	(18.0)			A,a
4	堆積土	土師器(菱)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ		21.0)	17.0		(10.2)	A,b1
5	堆積土	土師器(賽)	ヨコナデ・磨滅	ヨコナデ・磨滅		(4.0)	(12.4)			A <sub>2</sub> a3
6	堆積土	土師器(變)	ヨコナデ ハケメ後へラミガキ	ハケメ・ヘラミガキ ハケメ		(4.8)	(14.6)			A, [] b1
7	堆積土	土師器(變)	ヨコナデハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ		26.5	17.1		8.0	А, [] Ы1
8	煙道部	土師器(變)	ヨコナデ・軽いヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	木 葉 痕	27.0	21.0		8.9	A, I a3
9	カマド内	土師器(變)	ハケメ・ヘラケズリ	ハケメ		(8.2)			7.5	ΑΙ
10	堆積土	土師器(變)	ヘラミガキ	ヘラミガキ		(7.8)			( 9.0)	ΑΙ
11	堆積土	土師器(變)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ(部分)		(10.5)	19.2			А, Шь3
12	堆積土	土師器(變)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ(?)		(15.2)	14.0			А₁ Ш ЬЗ
13	堆積土	土師器(變)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ		( 9.5)	(18.0)			A, [] a l
14	カマド内	土師器(變)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ ハケメ後ヘラケズリ	ヘラケズリ	9.0	14.5		7.8	А, [ ы1
15	堆積土	土師器(鉢)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ		5.3	9.0		5.5	

第95図 CJ18竪穴住居跡出土遺物(2)

外傾気味に開く小型の甕である。調整技法は、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケメ、一部 ケズリである。器形的には鉢としてもいいものかもしれない。

[**堆積土出土遺物**] 堆積土中より坏をはじめとして多数の土師器が出土している。実測した ものは、坏2点、甕7点、鉢1点である。

土師器 製作に際し、いずれもロクロ未使用のものである。

坏(第94図 $1\sim3$ ) いずれも体部外面に段を有するものであるが、(1)は、対応する内面にもくびれが認められ、段から上はや、内湾気味に立ち上る丸底である。(2)は、底部は不明であるが外傾気味に立ち上るもの、(3)は、段より上は直立気味に立ち上る器高の高い平底風の底部を有するものと推定される。調整技法は、( $1\cdot2$ )は外面をみると段より上はヘラミガキされ、(1)の底部は部分的にヘラケズリが認められる。(3)は、段より上はヨコナデ、一部ミガキ、下はヘラケズリである。内面は、いずれもがヘラミガキされ黒色処理されている。

大甕 (第94·95図6~7·10~13) (6・7)は、口縁部が単純に長く「くの字」状に外反し体部最大径が肩部近くにある長胴である。 (10~13)は、口縁部が「くの字」状に外反し、最大径が中央附近に位置すると思われる球胴である。 (12・13)は、肩部に段を有する。調整技法は、いずれも口縁部内外面はヨコナデであるのに対して、体部外面は、ハケメ一部ケズリ、ハケメだけのもの、ヘラケズリされたものと多様である。内面は、ナデが大部分で一部ハケメのものもある。

中甕(第94図4・5) 肩部に段を有し口縁部が短く外反する(4)、長く「くの字」状に外反する(5)口縁部の破片で、口径より中型甕と推定されるものである。調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、外面は磨滅しているが、一部にハケメ、ヘラケズリ痕が認められる。

**鉢**(第95図15) 底部より口縁部にかけて内湾気味に立ち上る小鉢状のものである。底部は中央部がや、くぼみわずかに上底状を呈している。調整技法は、外面は、ヨコナデ、ナデ、内面は、ヨコナデ、が主で一部ハケメが施されている。

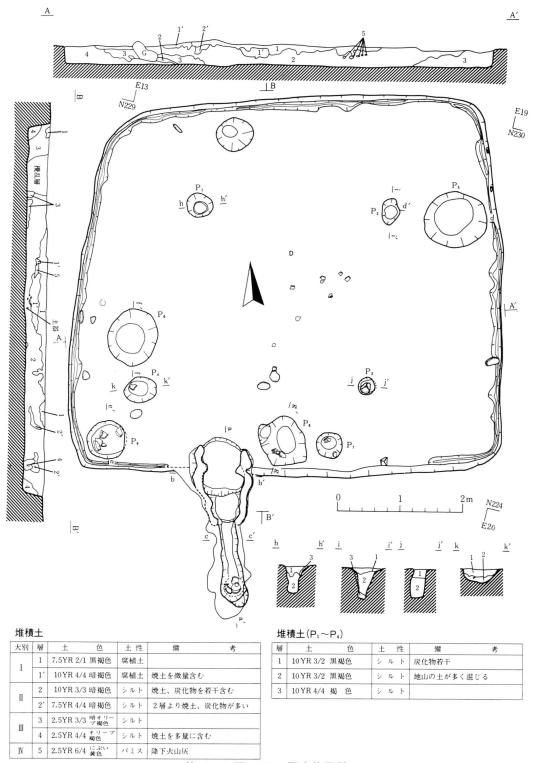
# ①BD62竪穴住居跡 (第96図-1·2)

〔遺構の確認〕 B調査区の北西側、BG59竪穴住居跡の北1mの地山面で検出したもので、 発見された住居跡としては最も北に位置するものである。

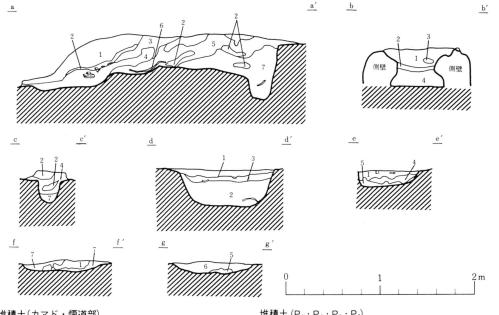
〔重複〕 認められない。

〔**平面形・規模**〕 隅がや、丸味をおびた方形で、南壁に比べて北壁がや、短く、そのため、少しゆがみのある方形である。規模は、長軸(東西)約6.8m 短軸(南北)約6.0m であり、床面積は約3.7m である。南、北壁の中点を結ぶ軸線はN-5  $^{\circ}$  -E である。

**[堆積土]** 細かく観察すると7層に分けられるが、Ⅳ層に大別できる。 I 層は黒褐色の腐植 土が主で、主として、住居内の中央附近に堆積し、床面には達していない。 II 層は、暗褐色の



第96-1図 BD62竪穴住居跡



堆積土(カマド・煙道部)

146	土	色	土	性	備	考
1	7.5YR 4/2	褐 色	儲	植土	焼土のブロック	若干含まれる
2	2.5YR 4/4	にぶい赤褐色	シ	ルト		
3	5 YR 3/4	暗赤褐色	焼	±.		
4	7.5YR 4/6	褐 色	焼	土	炭化物多く含ま	hる
5	5 YR 4/6	赤褐色	焼	土		
6	7.5YR 3/2	暗赤褐色	シ	ルト	炭化物、焼土多	く含まれる
7	5 YR 3/2	暗赤褐色	腐	植土	炭化物、焼土若	干含まれる

堆積土(Ps·Ps·Ps)

146	土	色	土		性	filli	考
1	7.5YR 2/1	黒 色	鵩	植	土	焼土のブロック若干	含まれる
2	2.5YR 7/6	暗黄褐色	٤	ル	٢	固くしまっている	
3	7.5YR 3/3	暗褐色	牒	植	土	土師器、炭化物、焼土	プロック多し
4	7.5YR 3/2	黒褐色	٤	ル	۲	炭化物若干含まれる	5
5	10 YR 4/6	祕 色	٤	ル	۲		
6	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	٤	ル	١	焼土、炭化物多量!	含まれる
7	5 YR 3/3	暗赤褐色	シ	ル	۲	焼土、炭化物微量(	含まれる

第96-2図 BD62竪穴住居跡

シルトで、壁際を除き、ほぼ床面全域に堆積している。Ⅲ層は、焼土を多量に含む褐色のシル トで壁際に堆積している。Ⅳ層は、所々にブロック状に含まれている粉状パミス(火山灰)で ある。

地山をそのま、壁としているもので、残存状態も良好であり、いずれも30cm以上の壁 〔壁〕 高を示し、床面よりの立ち上りも、ほぼ垂直に近いものである。

床面は、ほぼ平担で固くしまり貼り床はみられない。 [床]

[柱穴] 床面上より9個のピットが検出されている。そのうちR~Rのピットについてみる と位置的には、壁より等間隔に対角線上に位置するものではなく、南壁に平行する P3~P4は、 や、西に寄り、北壁に平行するB、P。は逆にわずかに東寄りと、それぞれ菱形の頂点に位置す るような配列をなしている。床面からの深さは、P、は約20cmと浅く多少無理とも思われるが、 他は50cm前後であり、径は、約30~50cmで、柱痕は認められないが、配置からみてそれに該当 するものと思われる。

[カマド] 南壁中央よりやや西寄りに付設されており燃焼部と煙道部よりなるものである。 燃焼部は、壁を掘り抜き舌状に壁外に出ており、従って、壁の一部をも側壁としているもので 他に比べて長い側壁を構築している。側壁は、シルトのみで構築されており、特に芯材として 土器、川原石等は使用していない。燃焼部の形態は、他のカマドのそれと異なり、カマド本体 の燃焼部の後方に更に南に傾斜した掘り込みを入れてその上をシルトでおおって煙道としてい る。従って煙道へは、燃焼部より二段の段差をもって上っているもので、これは炎の溜めとし て熱効率を考えたものと考えられる。

煙道の規模は、長さ150cm、幅45cmの溝状を呈している。煙出部には、径約25cm、深さ約20 cmのピットが存在する。カマドの軸方向は $N-180^\circ$ —Eである。

**〔その他の施設**〕  $P_s \sim P_{10}$ の 6 個のピットが床面より検出されている。 $P_s$ は、径約100 cm深さ約40 cm で、断面形は深鉢状を呈している。

堆積土は、3層よりなり、最下層より土師器の坏(第97図2)が出土している。このピットの堆積土は、ほとんど焼土よりなり、カマド内の不用物を廃棄し、その後、その上を意図的にシルトで覆ったものと考えられるものである。

P<sub>5</sub>もピットの上面に焼土が小高く残っていたものである。規模は、径が約70cm、深さ約20cm の深皿状を呈している。

堆積土は、3層よりなり、1層中および底面からロクロ使用の土師器の甕の破片が出土している。なお、2層中には炭化物と焼土が若干混入しているがP₅ピットのように特に多くない。P₅、P₅のいずれのピットも底面には熱を受けた様子が認められない。

その他、 $P_6 \sim P_8$ 、 $P_{10}$ のピットは、いずれも深さが $10 \sim 20$ cm内外の断面形が深皿状のピットである。

堆積土は、ほとんど黒褐色のシルト一層で、炭化物がわずかに混じっている程度である。

これらのピットは、いずれも、何か貯蔵していたという形跡が認められないものであるがP。 ピットは、位置的にみた場合カマド脇にあり、貯蔵穴状ピットといわれるものに該当するもの とも考えられる。

周溝は、南壁に付設されているカマドの東側、約3mの範囲には認められないが、その他の 壁面下には、床面より約10cm内外掘り下げた幅10~20cmの周溝がめぐっている。

〔**炭化材**〕 床面に少量の炭化材が散乱していたが、これらの一部を年代測定の資料として日本アイソトープ協会に依頼した。その結果、後葉にある如く、1140±55YB.P.(1110±50YB.P.)の資料を得た。これは、当住居の年代を推定する上での一つの資料として有効なものとなり得るだろう。

〔炭化米出土状況〕 カマドの煙出中より伏せた形で出土した小型の土師器甕 (第98図21)の中より出土したもので、炭化米は、主として、底面より出土し、体部中半までは土がつまっていたものである。

〔**年代決定資料**〕 住居の構築及び使用の年代を決定する資料としては、カマド内、煙道部煙出内、床面、ピット等より出土した土師器、須恵器等がある。

#### 十師器

坏(第97図  $1 \sim 4$ ) (1)は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾し器高の割に底径の大きいもの、(2)は、体部は丸味をもち口縁部にかけて直線的に外傾するもの(3)(4)は、体部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に外傾し、(3)は、口縁部がわずかに外反するものである。いずれも器高の高いものである。調整技法は、(1)・(3)は底部周辺、底面は手持ちヘラケズリされているもの、(2)・(4)は一部回転ヘラケズリされている。内面はいずれもヘラミガキ黒色処理されている。製作に際しロクロ使用のものである。

中甕(第98図20・21・30) ②0は口縁部が外反し、体部最大径が肩部にある無段の甕である。 調整技法は、外面、口縁部はハケメ後ヨコナデ、内面ヨコナデ、体部内外面はハケメである。 底面は、ヘラケズリされている。製作に際しロクロ未使用のものである。

(21)は、製作に際しロクロ使用のもので口縁部が短かく「くの字」に外反し、口縁部と、位の体部最大径がほぼ中央に位置あるものである。体部外面にタタキメ痕、下半はヘラケズリ、内面は、底部近くにヘラケズリが施されている。底面はヘラケズリされている。

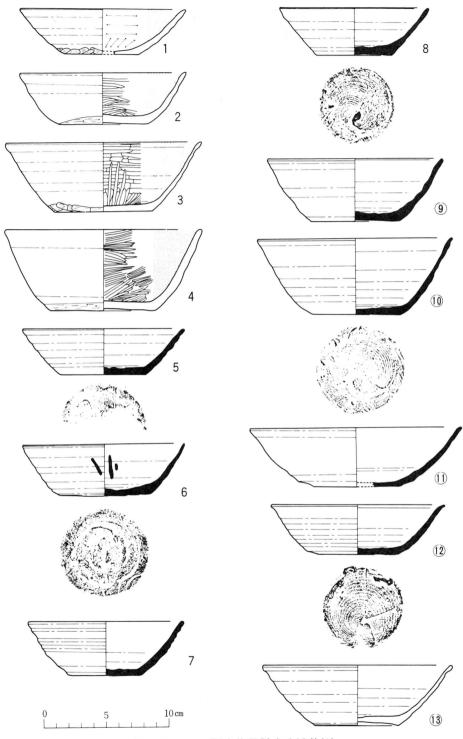
大甕 (第98·99図22·26) (22)口縁部が単純に「くの字」状に外反し下半がや、ふくれると推定されるもの、(26)は、「くの字」状に外傾するものである。調整技法は(22)は口縁部内外面、ロクロナデ、体部外面下半はヘラケズリ、内面はハケメ状ナデである。(26)は内外面ともにロクロナデのみである。

**鉢**(第99図32) 製作に際しロクロを使用し、口縁部が「くの字」状に外反し、口唇部がわずかに上方へ引き上げられているものである。

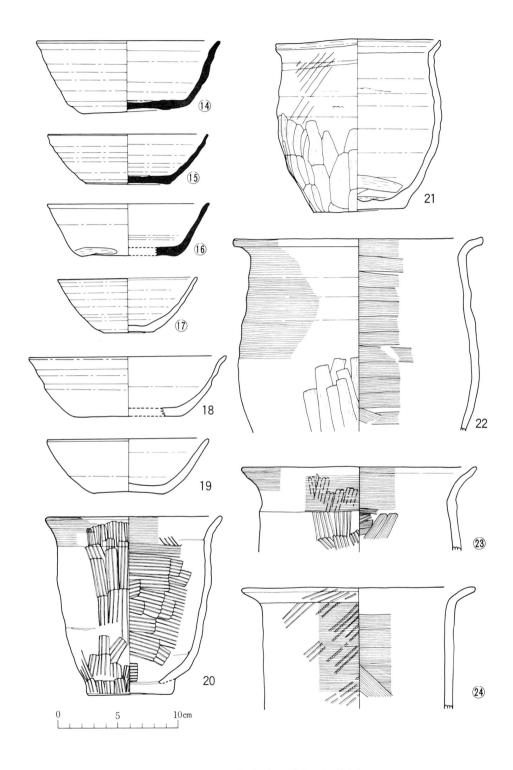
#### 須恵器

坏(第97図  $5 \sim 8$ ) (7)はや、内湾気味であるが他はいずれも体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するもので器高に比べて底径の大きいものである。(6)は、体部に字体は不明であるが墨書痕が認められる。底部の切り離しは、 $(5 \sim 7)$ は回転へラケズリ、(5)はその後手持ちヘラケズリ、(8)は、回転糸切り無調整である。

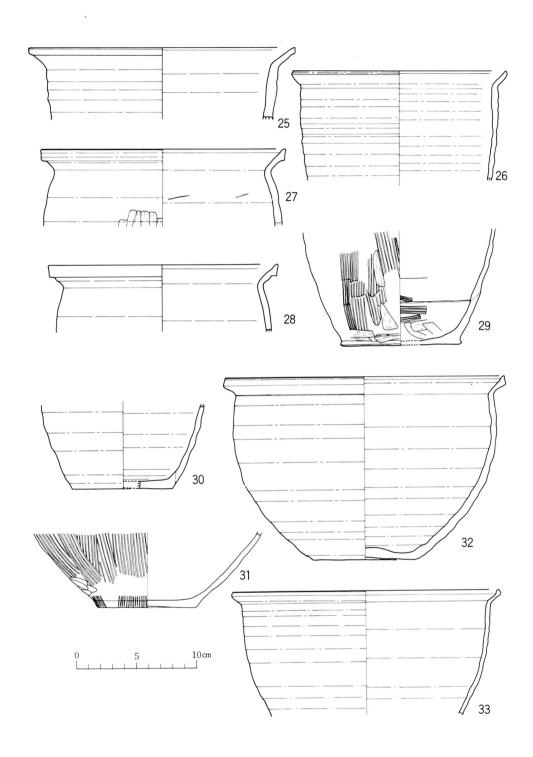
**甕**(第100図34) 口縁部がや、長く外反し、口唇部が上下に引き出されているもので、最大 径が体部のほぼ中央に位置するものである。調整技法は、体部外面は、タタキメで下半部はそ の後ヘラケズリされている。内面は、底面近くがナデによって調整されている。



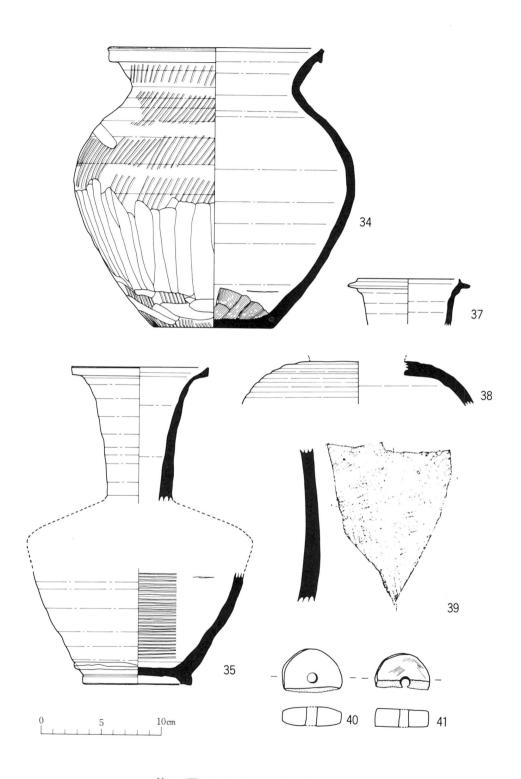
第97図 BD62竪穴住居跡出土遺物(1)



第98図 BD62竪穴住居跡出土遺物(2)



第99図 BD62竪穴住居跡出土遺物(3)



第100図 BD62竪穴住居跡出土遺物(4)

# 出土遺物観察表

番号		種別	調問	整	底面	器高	口径	体 径	底 径	分類番号
	出土層位		外 面 ロクロナデ・	内	手持ヘラケズリ	3. 6	13. 3	IF II	(5.9)	B <sub>1</sub> I a
1	カマド内	土師器(坏)	手持ヘラケズリ ロクロナデ・		日 転糸切り	4. 1	(13. 2)		7.0	B <sub>1</sub> Ia
2	P, ピット	土師器(坏)	回転ヘラケズリ ロクロナデ・	ヘラミガキ(内黒)	部分ヘラケズリ回転糸切り				7. 8	B₁∐a
3	床 面	土師器(坏)	手持ヘラケズリ ロクロナデ・	ヘラミガキ(内黒)	部分ヘラケズリ	5.5	15. 7			
4	P, ピット	土師器(坏)	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ(内黒)	回転ヘラケズリ	6.5	(15. 8)		8. 2	B,∭a
. 5	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	手持ヘラケズリ	3.6	12. 9		6.8	C, Ia
6	床 面	須恵器(坏)	ロクロ痕(千)墨書	ロクロ痕	回転ヘラ切り	4.1	12. 9		7.1	C,∏a
7	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラ切り	4.3	(12.5)		( 6.5)	С,Іь
8	床 直 上	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	左回転糸切り	4.8	12.0		6.0	C, Ia
9	堆 積 土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	左回転糸切り	5. 0	13. 9		7.1	С,Іь
10	堆 積 土	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	左回転糸切り	6.0	15. 7		7.0	C, I a
11	堆 積 土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	4.7	(16.2)		( 6.7)	С, Іь
12	堆 積 土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	4.5	13. 9		6. 2	C, I c
13	堆 積 土	赤 焼 き	ロクロ痕	ロクロ痕	左回転糸切り	4.8	15. 1		6.7	В,
14	堆 積 土	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	5. 9	15. 3		8. 4	С, Іс
15	堆 積 土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	4. 1	13. 4		7.0	C, I a
16	堆 積 土	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	3, 3	(13.4)		8. 2	С, I а
17	堆 積 土	赤 焼 き	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	4.5	11.7		4.0	Въ
18	カマド・ピット	赤 焼 き(?)	ロクロ痕	ロクロ痕	不 明	5.0	(16.0)		( 9.0)	Bs
19	Ps ピット	赤 焼 き(?)	ロクロ痕	ロクロ痕	不 明	5. 0	13. 7		6.0	Bs
20	煙出中	土師器(甕)	ヘラケズリ後ヨコナデ ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ヘラケズリ	14. 9	14. 6		7.2	A, [al
21	煙出中	土師器(甕)	タタキメ後ロクロ・ ヘラケズリ	ロクロナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	14. 4	13. 9		7.5	В, [] а
22	ピット中	土師器(甕)	ナデ・ヘラケズリ	ナデ		16.5	(20.8)			B₁ [[ d
23	堆 積 土	土師器(養)	ハケメ後ヨコナデ・ ハ ケ メ	ヨコナデ・ハケメ後ナデ		(7.5)	(19.6)			B, I d
24	堆 積 土	土 師 器(變)	タタキメ後ナデ	ナデ		( 8.0)	(19.2)			B₁∏d
25	堆 積 土	土 師 器(變)	ロクロ痕	ロクロ痕		(5,8)	(22.6)			B₁∭d
26	カマド中	土 師 器(變)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 9.2)	17. 9			B₁∭d
27	堆 積 土	土 師 器(甕)	ロクロ痕・ヘラケズリ	ロクロ痕		(6.4)	20.3			I
28	堆 積 土	土師器(甕)	ロクロ痕	ロクロ痕		(5.5)	(19.2)			
29	煙出中	土師器(甕)	ハケメ	ハケメ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	( 9.5)			(10.0)	
30	ピット中	土師器(甕)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	(7.0)			(8.4)	B 2
31	堆 積 土	土師器(甕)	ハケメ後ヘラミガキ	磨滅	ヘラケズリ	( 6.2)			8.3	
32	ピット中	土師器(鉢)	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラケズリ	15. 2	23. 3		8.5	
33	堆 積 土	土 師 器(鉢)	ロクロ痕	ロクロ痕		(10.4)	18.0			
34	ピット中	須恵器(饗)	タタキメ後ロクロナデ ・ヘラケズリ	ロクロナデ・ナデ		(23.2)	18.0	23. 3	9.8	C 2
35	堆 積 土	須恵器(壺)	ロクロ痕	ロクロ痕						
36	堆 積 土	須恵器(壺)	ロクロ痕	ロクロナデ						
37	堆 積 土	須恵器(壺)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 4, 8)	(10, 2)			
38	堆 積 土	須恵器(壺)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 4.8)	(8.0)			
39	堆 積 土	須恵器(養)	タタキメ	拓 本						
40	堆 積 土	紡 錘 車(石)	径 4.9cm	厚さ 1.6cm		淡緑色紅	田粒凝灰岩			
41		紡 錘 車(石)	径 4.6cm	厚さ 1.5cm			"			

#### 赤焼き土器

坏 (第98図19) 体部がや、丸味をもち口縁にかけて外傾気味に立ち上るものである。調整 技法は、回転糸切り無調整で内外ともに摩滅が著しい。

[**堆積土出土遺物**] 別表の如く、土師器、須恵器ともに多量の破片が出土している。そのうち実測したものは、須恵器坏7点、長頸壺3点、赤焼き土器2点、土師器甕5点、鉢1点である。

# 須恵器

坏(第97・98図 9~12・14~16) (9・10・15) は、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するもの、(11)は、内湾気味に外傾するもの、(12)は、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上り、口唇部分がわずかに外傾するもの、(14・16)は、体部がわずかに丸味をもち口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するものである。(16)の底部附近にケズリがみられる他は、いずれも回転糸切り無調整である。

壺(第100図35-38) (35・36)は、口縁部が強く外反し、口唇部が上方に引き出されている。 長頸壺の口縁から頸部であり外面に自然釉が認められる。(36)は、その体部の下半部と推定される高台付の体部である。内面にハケメ状ロクロナデが施されている。(37)は、口唇部が外方及び上方へ引き出されている長頸壺の口縁と推定されるもの、又、(38)は、それの肩部部分と推定される破片である。

**甕**(第100図39) (39)は、外面にタタキメ文のみられる大甕の破片である。

#### 土師器

大甕 (第99図23~28・31) 33は、口縁部が長く「くの字」状に外反するロクロ未使用のもので調整技法は口縁部内外面はヨコナデ体部内外面はハケメ、ナデである。

**鉢**(第99図33) 口縁部が短く「くの字」状に外反し、口唇部が斜め上方へ引き出され、内側に稜のあるものである。調整技法はロクロナデのみである。

赤焼土器(第97·98図13·19) (13)は体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に外傾するもの(19)は、 内湾気味に外傾する底径の非常に小さいものである。

#### 石製品

**紡錘車** (第100図40·41) 石材は淡緑色細粒凝灰岩で径が約4.9cm、4.6cm、厚さ1.6cm、1.5cmの表面が研磨されたもので、いずれも約1/2が欠失している。

その他、他の住居跡に比べて非常に多量の土師器片・須恵器片が出土しているのが特色である。そのうち須恵器の破片は大甕の破片が多い。

# (4)BH56竪穴住居跡(第101図)

[遺構の確認] B調査区の中央付近、BF50竪穴住居跡の南東約4mの地点の地山面でBG59竪穴住居跡と北東隅で切り合う形で検出したものである。

〔重複〕 北壁にあるカマドの東側がBG59竪穴住居跡によって切られ、西壁中央部分は焼土 状遺構を切って構築している。又、東壁中央寄りから南壁中央寄りにかけての部分は縄文の切り合い遺構の上に構築されている。

**〔平面形・規模〕** 北壁の中央付近がや、北に張り出しているがほぼ方形といってもよいのである。規模は、一辺が約5.2m である。床面積は約27㎡である。南北壁の中点を結ぶ軸線はN−20°−Eである。

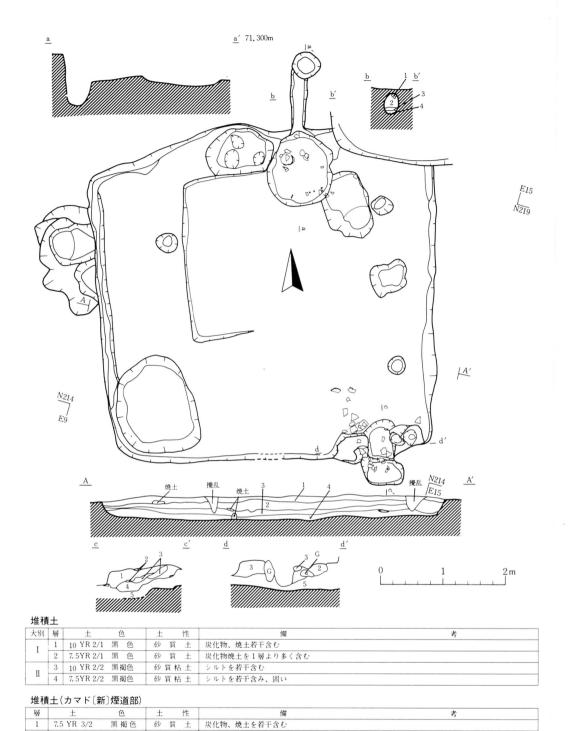
**〔堆積土**〕 細かくみると4層に分けることができるが Ⅱ層に大別することができる。 Ⅰ層は 黒色の粘土質砂土で主に床面を除く住居全体に堆積し、 Ⅱ層は、黒褐色のわずかにシルトを含 むもので床面に堆積しているものである。

[壁] 地山をそのま、壁としているもので、北壁がや、北に張り出している以外あまり出入りもなく直線的で比較的良好な残存状態を呈し、立ち上りも垂直に近いものである。最も良好な東、西壁で約30cmを計る。

**「床**〕 地山を掘りこみ床としているものであるが、3枚(3期)の貼床が認められた。いずれも床面は水平な重なりを呈し、特に掘り返した痕跡は認められない。新しい方から貼床1は東南隅のカマドに伴うものであり、それと同じ床面に共うPのが存在する。貼床2は、北壁煙道に伴うものでそれに伴うPのが存在する。又、最下部のものは一辺が約2.6 cmの西壁の一部が確認できた。これは方形のプランとなるものと推定されるものである。これに伴うピットとしてはPのが存在する。これらの状況から推測すると当住居跡は、当初、一辺が約2.6 mの小さな住居が構築され、その後、拡張し検出時の規模のものとして使用し、カマドを移動させた後床を貼りかえて用いたということが推定される。

〔**柱穴**〕 柱穴とみられるピットは、最も新しい東南隅カマドに伴って存在したとみられるピットP<sub>4</sub>~P<sub>6</sub>で径が約30cm、深さは25~30cmの規模をもつ。これらは対角線上に位置するものであるが全体としてや、南東寄りである。これらからは、柱痕は認められなかったが位置、配置等からそれと考えてよいものであろう。

[カマド] 南壁東隅(新)および北壁中央や、東寄り(旧)の2ヵ所に付設されている。前者は、 黒ボクの貼床の上に焼土とシルトそれに小石を混ぜて固められた側壁から成り、それぞれに立 石1個づつが使用されている。このカマドは燃焼部は皿状に凹んでおり、奥壁際で立ち上り煙 道部は約50cm舌状に張り出しているのみで煙出し部は認められない。一方、北壁の方は煙道部 がや、下り勾配で、約1m住居外にトンネル状に延び煙出部には煙道底部より約40cm低いピッ



#### ± 10 YR 4/6 黒褐色 Ħ ± 4 2.5 YR 4/6 黒褐色 焼 ±. 7.5 YR 1.7/1 黒 色 腐 植 土

砂 質

砂

10 YR 4/3

3

黒褐色

	쪽101回 PUEC图中华	
	小石が多い	
_	3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	
	シルト、焼土の混土	

第101図 BH56竪穴住居跡

トが存在する。両側壁は既になく貼床下より側壁の補強として用いられたとみられる川原石が 煙道をはさんで左右に一対見つかっている。又、燃焼部とみられるところには径 130 cmの深皿 状のピットが存在し土師器片が出土している。

〔その他の施設〕 既述の如くそれぞれ新~旧の貼床に伴うピットが1個づつ検出されている。 P. は径 160×130 cm深さ約30cmの深鉢状のピットである。 P. は、径 110×80cm、深さ約30cmの深鉢状のピットである。 P. は、北東隅近くの最も深い位置で検出したもので径約120×80深さ約10cmの深皿状のピットである。堆積土は、P. は黒土を主体にシルトが若干混じる。 P. は下部のシルト、上部は焼土とシルトの混土、P. は焼土を主体としシルトと黒色土の混土である。これらは位置、形状等から貯蔵穴状ピットといわれるものに類似するものと思われる。その他、周溝は認められない。

**〔年代決定資料**〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、床面、カマド内ピット中より出土した土師器、須恵器等がある。

### 土師器

坏 (第 102 図 1) 内面がヘラミガキされ、黒色処理を施しているもので、底部の切り離しは回転糸切り無調整のものである。

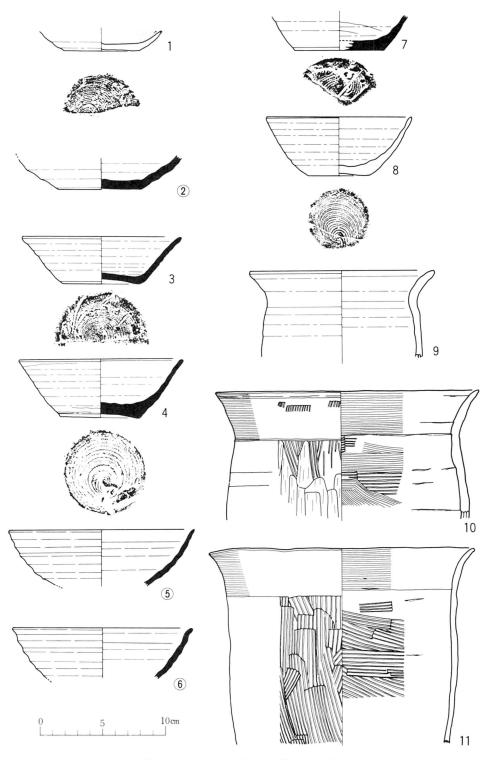
小甕(第 102 図 9) 口縁部が単純に「くの字」状に外反するロクロ使用の小型甕と推定されるものである。

中・大甕 (第102・103図10~13・17・18) (10~12) は、ロクロ未使用の甕で、口縁部が長く「くの字」 状に外反し、肩部に段のないもので (12)は、特に強く外反しているのが特色である。調整技法は、口縁部内外面はいずれもヨコナデ、体部外面は、(10)はハケメ後ヘラケズリ、(11)・(12)はハケメであり、内面は、いずれもハケメである。(13)は、ロクロ使用の甕で口縁部がや、短く「くの字」状に外反し口唇部が上方へつまみ出され内側に稜を有するものである。調整技法は、体部外面にタタキメがみられる。(16)は、口縁部が短く外反し、口唇部がや、長く上方へ引き出されているもの、(17)は、口縁部が欠失しているが、口径に比べて器高が比較的高いと推定される長胴であり、体部外面の上半にタタキメ、下半にヘラケズリのあるもの、(18)は、やはり口縁部が欠失しているもので肩部に軽い段が巡り、口径に比べて器高の底い甕である。口縁部はヨコナデ、体部外面には、ヘラケズリ、タタキメ、内面にナデの施されているものである。

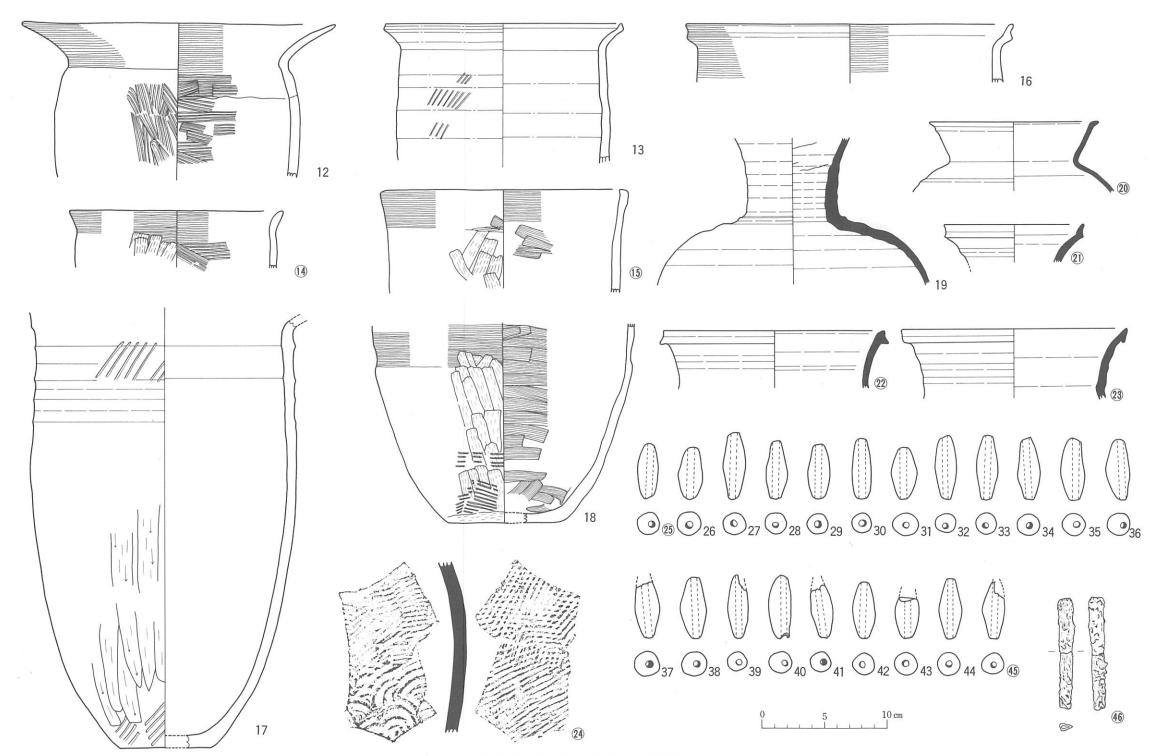
赤焼き土器 (第 102 図 8 ) 体部から口縁にかけて内湾気味に立ち上るもので、器高に比べて底径の小さいものである。底部の切り離しは、回転糸切り無調整である。

#### 須恵器

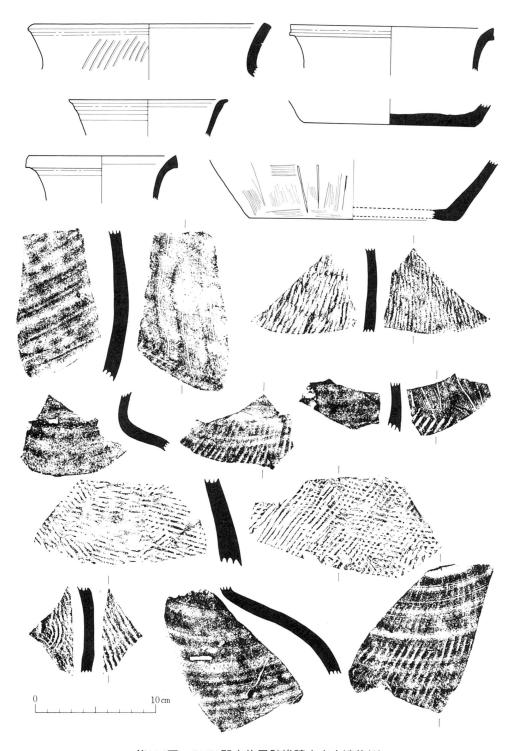
坏 (第  $102 \boxtimes 3 \cdot 4 \cdot 7$ ) ( $3 \cdot 4$ )は、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するものである。(7)は、底部近くの破片である。底部の切り離しは、回転糸切り無調整である。



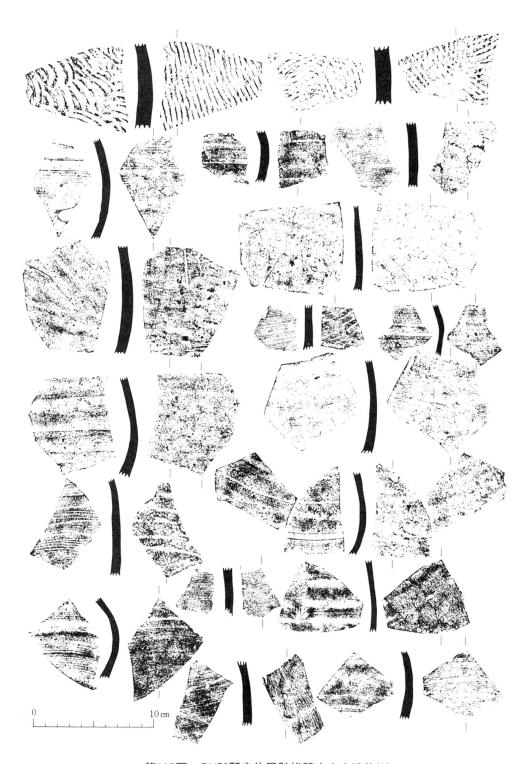
第102図 BH56竪穴住居跡出土遺物(1)



第103図 BH56竪穴住居跡出土遺物(2)



第104図 BH56竪穴住居跡堆積土出土遺物(1)



第105図 BH56竪穴住居跡堆積土出土遺物(2)

# 出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	\$(B)	整	底 面	器高	口径	体 径	底 径	分類番号
号 1			外 面 ロクロ痕	内 面		-	H IE	1# 1±	-	
2	床 面 直 上 堆 積 土	土 師 器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)	右回転糸切り	( 2.5)			5. 9	B <sub>1</sub>
3		須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	4.8	12. 8		5. 9	C,
4	ホカマド煙出床 面	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	左回転糸切り	4.6	13. 1		6.0	C, I a
5	堆積土	須恵器(饗)	ロクロ痕	ロクロ痕	在回報/N 90 7	(4.3)	(15, 0)		6.3	C, I a
6	堆積土	須恵器(變)	ロクロ痕	ロクロ痕		(4.1)	(14.6)			
7	床面	須恵器(變)	ロクロ痕	ロクロ痕	左回転糸切り	(2.7)	(14.0)		(7.2)	C, I
8	北カマド	土師器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	江西4471907	4.7	11.6		4.8	В,
9	床面	土師器(變)	ロクロ痕	ロクロ痕		(6.7)	14. 8		1.0	B, [] d
10	北カマド煙出	土師器(養)	ハケメ後ヨコナデ・ ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ後ナデ		(10.1)	21. 0			A <sub>1</sub> I a3
11	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ		(15.6)	(21.0)			A, [] b3
12	北カマド煙出	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ		(12.0)	(25, 2)			A <sub>1</sub> I a3
13	北カマド煙出	土師器(甕)	ロクロナデ・タタキメ	ロクロ痕		(10.9)	19. 3			B₁ [[ a
14	堆 積 土	土師器(甕)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ		( 4.5)	(17.6)			A <sub>2</sub> [[ b1
15	堆 積 土	土師器(甕)	ロクロ痕	ロクロ痕		(4.5)	(26, 2)			
16	堆 積 土	土師器(養)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ		( 8.0)	(20.0)			В, ∏ Ь
17	床 面	土師器(甕)	タタキメ・ヘテケズリ	磨滅		(34.1)			(7.2)	B <sub>1</sub>
18	床 面	土師器(甕)	ヨコナデ・タタキメ・ ヘラケズリ	ナデ		(16.8)			( 9.0)	
19	床 面	須恵器(壺)	ロクロ痕	ロクロ痕		(11.3)				С
20	堆 積 土	須恵器(饗)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 5.5)	(13.6)			С
21	堆 積 土	須恵器(壺)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 2.8)	(10.6)			С
22	堆 積 土	須恵器(饗)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 4.0)	(17.8)			С
23	堆 積 土	須恵器(甕)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 5.5)	(18.0)			С
24	堆 積 土	須恵器(甕)	タタキメ	タタキメ(拓本)						С
25	堆 積 土	土 錘	長さ 4.5cm	最大径 1.9cm						
26	堆 積 土	土 錘	長さ 4.2cm	最大径 2.0cm						
27	堆 積 土	土 錘	長さ 5.2cm	最大径 1.9cm						
28	堆 積 土	土 錘	長さ 4.2cm	最大径 2.0cm						
29	堆 積 土	土 錘	長さ 4.4cm	最大径 1.8cm						
30	堆 積 土	土 錘	長さ 4.8cm	最大径 1.7cm						
31	堆 積 土	土 錘	長さ 4.1cm	最大径 2.1cm						
32	堆 積 土	土 錘	長さ 5.1cm	最大径 1.7cm						
33	堆 積 土	土 錘	長さ 5.2cm	最大径 1.7cm						
34	堆 積 土	土 錘	長さ 5.0cm	最大径 1.9cm						
35	堆積土	土 錘	長さ 5.0cm	最大径 1.9cm						
36	堆 積 土	土 錘	長さ 4.8cm	最大径 1.9cm						
37	堆積土	土 錘	長さ (4.4cm)	最大径 2.1cm						
38	堆 積 土	土 錘	長さ 4.9cm	最大径 2.1cm						
39	堆積土	土 錘	長さ 5.1cm	最大径 1.6cm						
40	堆積土	土 錘	長さ 5.0cm	最大径 1.8cm						
41	堆積土	土 錘	長さ (4.2cm)	最大径 1.7cm						
42	堆積土	土 錘	長さ 4.5cm 長さ (5.2cm)	最大径 1.8cm						
43	堆 積 土	土 錘	長さ 4.8cm	最大径 1.9cm 最大径 1.9cm						
45	堆積土	土 錘	長さ (4.6cm)	最大径 1.8cm						
46	堆積土	鉄製品(刃子)	長さ8.8cm、幅1.1cm							
40	*此 T具 上	*X*Kuu(NT)	IX C O. OCH , MHI I. IC							

壺(第 103 図19) 口唇部分、体部下半を欠失しているが、肩の張る体部を有すると推定される長頸壺の一部である。

[**堆積土出土遺物**] 別表の如く、堆積土中より多量の土師器、須恵器、赤焼土器の破片と土 錘が出土している。

**甕**(第103図14・15) 口縁部がわずかに外反しているもの(14)と平縁状のもの(15)とがある。 いずれもロクロ未使用のものと推定される。調整技法は、口縁の内外面はヨコナデ、体部の外面はヘラケズリ、内面はナデである。(15)は筒形土器の一部とも思われる。

# 須恵器

**坏** (第 102 図 2 · 5 · 6 ) (5 · 6 )は、内湾気味に立ち上る口縁部、(2)は回転糸切りの底部である。

**甕** (第 103 図20・22・23・24) 口唇部が外方、下方、にそれぞれつまみ出されている甕の口縁部分の破片である。(24)は大甕の体部破片である。

壺(第 103 図21) 口縁部が外反し、口唇部が強く上方に引き出され、内側に稜を有する壺の口縁部と推定されるものである。

## [その他の遺物]

**土錘** (第103 図25~45) 最大長5.2~4.1cm、最大径約2.1~1.7cmのもので中央に径約0.4cm、前後の貫通孔が穿がわかれているものである。

鉄製品 (第 103 図46) 長さ8.8cm、幅1.1cmの刀子の一部とみられる鉄製品である。

その他、堆積土中より他の住居に比べて多量の土師器、須恵器等の破片が出土しているのが目につく。第104 図、105 図は、須恵器の甕、壺等の一部と推定される破片の拓本である。

## ① C F 56竪穴住居跡 (第 106 図)

〔遺構の確認〕 C調査区の中央付近、CI53竪穴住居跡の北約6m、CE68竪穴住居跡の西12mの地点の地山面で検出したものである。

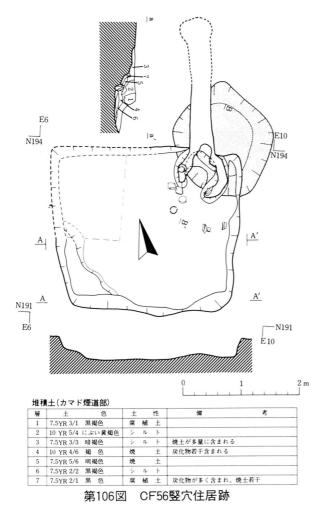
**〔重複**〕 カマドの燃焼部から煙道部にかけて、縄文時代のピットとみられるCF09ピットの上に構築されている。又、北西隅部分は調査当初の深掘りのため破壊されている。

**〔平面形・規模**〕 平面形は、や、北壁が長いがほぼ方形である。長軸(東西)約 $3.1\,\mathrm{m}$ 、短軸(南北)約 $2.9\,\mathrm{m}$ であり、床面積は、約 $9.0\,\mathrm{m}$ である。なお、南北壁の中央を結ぶ軸線はN $-17^\circ$ ーEである。

〔**壁**〕 地山をそのま、壁面としているものであるが既述の如く北南隅部分は調査前の深掘りで破壊されている。残存壁は比較的良好で特に東壁に鋭い立ち上りを呈しその壁高は約40cmである。

[床] 特に貼床は認められず、床面に人頭大の石が多数散在しているのが認められた。

〔**柱穴**〕 床面より柱穴とみられるピットは検出されなかった。



[カマド] 北壁東隅に付設されているものである。 両側壁はシルトで構築されているが燃焼部は北壁に対して少し東に振れる形で構築されている。煙道部分は奥壁際でや、上り、それより北へ延びているものであるが広面部分が一部確認できなかったものである。

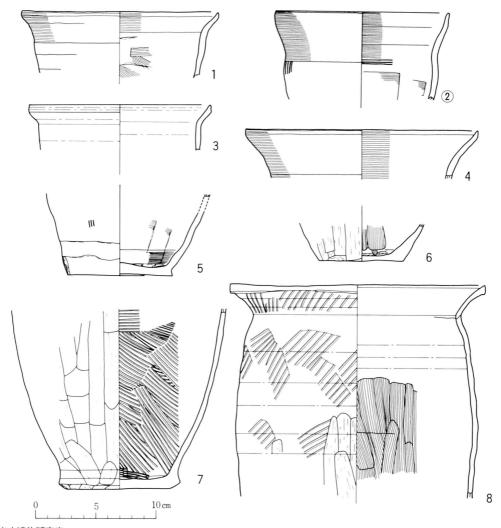
〔その他の施設〕 床面上 よりピット周溝等は検出さ れなかった。

[年代決定資料] 住居の構築及び使用の年代等を決定する資料としてはカマド内、床面より 出土の土師器甕がある。いずれも完形品はなく、口縁部上半、体部下半のものや破片からの復 元実測したものである。

#### 土師器

中・小甕(第 107 図1・3・5~7) (1)は、口縁部が短く「くの字」状に外反し口唇部が上方へつまみ出されているものでロクロ未使用のもの、(3)は、口縁部が短く外反し、口唇部が上下につまみ出されているものでロクロ使用のものである。(5~7)は、いずれも体部下半のもので(5)・(6)は外面にヘラケズリ、内面にはハケメ、ナデ等が施されているものである。

大甕 (第 107 図 4 · 8) (4)は、口縁部が長く外反し、口唇部が単純に上方へつまみ出されているもの、(8)は、口縁部が短く「くの字」状に外反し、口唇部が上下にわずかにつまみ出されているものであり、体部最大径が上半に位置すると思われるものである。(8)はロクロ使用で



出土遺物観察表

番	th 4- bx /*	種 別	[12]	整	- 底面	器高	口径	体径	底径	分類番号
号	出土層位		外 面	内 面						
1	カマド埋土	土師器(賽)	ヨコナデ・不明	ヨコナデー部ナデ		( 5.0)	(16.4)			A, [] b2
2	堆積土	土師器(變)	ヨコナデ・ハケメ(?)	ヨコナデ・ヘラナデ		( 7.2)	(14.5)			A <sub>2</sub> [] b1
3	カマド埋土	土師器(變)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 3.8)	(15.0)			B <sub>2</sub> [] a
4	床面直上	土師器(賽)	ヨコナデ(ロクロ?)	ヨコナデ(ロクロ?)		( 4.0)	(19.3)			
5	カマド前	土師器(變)	群滅	ヘラナデ		( 6.8)			8.8	
6	カマド埋土	土師器(變)	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	( 3.2)			7.0	
7	カマド前	土師器(變)	ヘラケズリ	ハケメ	ヘラケズリ	(15.4)			10.1	
8	カマド埋土	土師器(饗)	タタキメ後ロクロナデ タタキメ後 ロクロナデ後ヘラケズリ	ロクロナデ・ヘラナデ(1)		(17.7)	21.1			Ві Іь

第107図 CF56竪穴住居跡出土遺物

あるが(4)ははっきりしない。調整技法は(4)は、口縁部内外面ともにヨコナデ、(8)は、タタキメ後ロクロナデ、体部外面はタタキ後ロクロナデでその後ヘラケズリを下半に施されている。内面は中~下半にかけてヘラナデされている。

[**堆積土出土遺物**] 別表の如く、堆積土中より、土師器の破片の他多量の縄文土器片や、石 匙(1)(第53図)、打製石斧(1)(第55図)、磨石(1)(第55図)が出土している。

# 土師器

中甕(第 107 図 2) 口縁部がわずかに外傾し、口唇部近くで直立する頸部に段のない甕の口縁部で口径より類堆して中型の甕と思われるものである。調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面をわずかにハケメ痕がみわれる。内面はナデである。

その他、多くの甕の破片にまじってロクロ使用の坏で内黒処理された破片が1片出土している。

# ①CI 53竪穴住居跡 (第 108 図)

〔遺構の確認〕 C調査区のほぼ中央、CJ50住居跡の北約2mの地点の地山面で検出したものである。

**[重複]** CI53、CI56、CI50、CJ59の各ピットを切って構築しているもので、床面のほぼ2/3は、それに該当する。

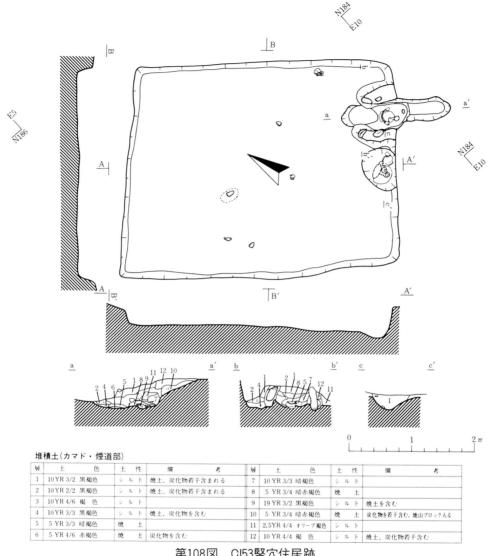
[平面形] 平面形は長方形を呈しており、規模は、長軸(南北)約4.3m、短軸(東西)約3.4m である。なお、床面積は約14.6m である。又、南北壁の中点を結ぶ軸線は $N-28^\circ-W$ である。

[**堆積土**] 断面のみで堆積の様子はわからないが、現説資料によると、中央西寄りに粉状パミス(火山灰)がレンズ状に多量に入っており、一部床面にも存在したことが述べられている。

[**壁**] 地山をそのま、壁としているもの立ち上りも垂直に近く残存状態も北壁を除き良好である。壁高はそれぞれ23~33cmである。

[床] 既述の如く縄文時代のピットの上に構築されているが特に貼床した様子は認められない。 [柱穴] 検出されていない。

[カマド] 南壁、東寄りのコーナー近くに付設されている。燃焼部と煙道部より成る。両側壁は、芯材として左右それぞれに3個の川原石を並列させてその上をシルトで固めて構築していたものである。又、燃焼部中央には、焚口面に対して土師器の甕の口縁部を二重にめぐらした高さ約8mの円筒状のシルトが存在した。シルト面が厚さ5cmにわたり固く焼けており、これは、石や土器の支脚のかわりにシルトで支脚を作り使用したものと思われるもので前面の土師器は火力からシルトを保護するためのものであったと考えられる。煙道は、壁際でほぼ垂直に立ち上り、その後、ゆるやかに上昇して舌状(約3.5cm)に切れており、これが本来の姿かどうか不明である。



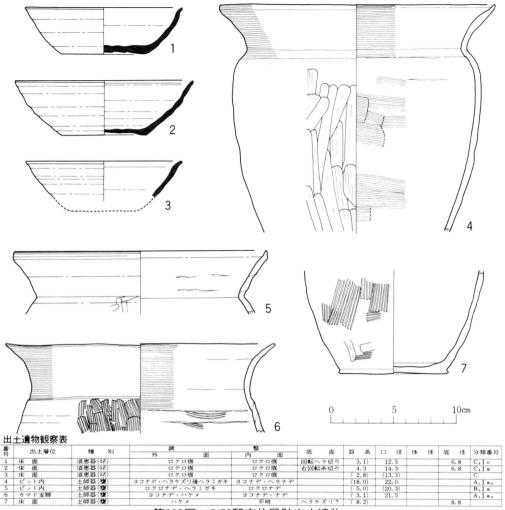
第108図 CI53竪穴住居跡

〔その他の施設〕 カマド西側に径約70×60cm、最大の深さが約30cmの擂鉢状のピットがあり 底面より土師器の甕が出土している。これが貯蔵穴状ピットに該当するものと考えられる。 その他、周溝等は認められない。

[年代決定資料] 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、床面、カマド内、 及び貯蔵穴状ピット内から出土した土師器甕、須恵器坏等がある。

土師器 いずれも製作に際しロクロ未使用のものとロクロ使用とがあり、完形品はなく、い ずれも口縁部や体部上半部分が主である。

大甕 (第 109 図 4 ~ 7 ) (4 · 5 )は、口縁部が単純に「くの字」に長く外反し、口唇部を



第109図 CI53竪穴住居跡出土遺物

上方へつまみ出しており、肩部に軽い段が巡り、体部最大径が肩部に位置するもの、上半部である。(5)は、ロクロ使用のものと思われる。(6)は、口縁部が単純に「くの字」状に長く外反しやはり軽い段が巡るものである。又、調整技法は、口縁部内外面ヨコナデのもの、体部外面へラケズリのもの、ハケメのものがあり、内面についてもハケメヨコナデ等が施されている。

# 須恵器

坏(第  $109 \, \boxtimes \, 1 \sim 3$ ) (1)は、体部は丸味をもって立ち上り、口縁部でわずかに外反するもので底部はヘラ切りである。(2)は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上るもので、底部の切り離しは回転糸切りである。(3)は、口縁部が外反するもの、破片である。

〔**堆積土出土遺物**〕 別表の如く土師器甕、須恵器坏、縄文土器甕の破片が出土しているが実 測できるものはない。

# ①CE12竪穴住居跡 (第 110 図 1 · 2 )

[遺構の確認] C調査区のや、西寄り、縄文時代に属するCA12竪穴住居跡の南約4m、CG12竪穴状遺構の北約3m地点の地山面で検出したものである。

〔重複〕 縄文時代に属すると思われる北西隅のCD12ピット、北東隅のCD09ピット、カマド前のCE09ピットの上に構築されているものである。これらのピットは径が約1.5m、床面よりの深さは約1mである。

**〔平面形・規模**〕 平面形は隅丸方形であり、規模は、長軸(東西)約5.5 m 、短軸(南北) 約4.5 m で、床面積は約24.8 m である。南北壁の中点を結ぶ軸線はN−18°−E である。

**「堆積土**〕 細別すると8層観察できるがⅣ層に大別することができる。 I 層は黒色の腐植土で住居内のほぼ全域に分布し床面には達していない。 II 層は、黒褐色の黒ボクで、I 層の下方に堆積し、主として、中央附近は床面に堆積し、壁際には堆積していない。 III 層は、黒褐色のシルトで、壁際より中央に向って堆積している。 IV としたのは、 II 層にサンドイッチ状に入りこんでいる粉状パミス(火山灰)である。

[**壁**] 地山をそのま、壁としており、立ち上りはほぼ垂直に近いもので残存状態は良好である。最も良好な西壁で約50cmを計る。

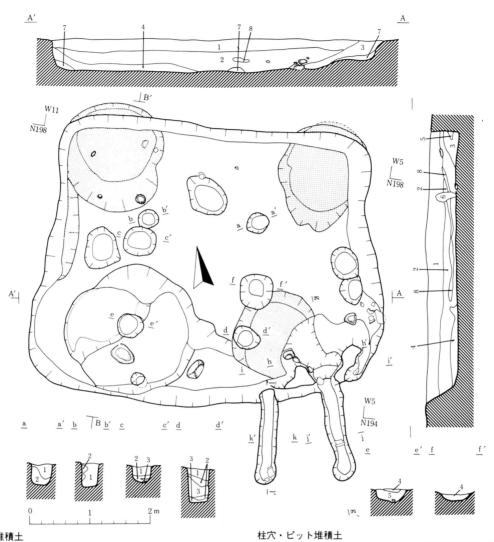
**〔床**〕 ほぼ平担で固い。カマド前のピット上面は貼り床されており、又、南東隅床面下も掘り下げた後カマド前のピットと溝でつながっており、上面は貼り床状になっていた。排水のため行われたものと考えられる。

〔柱穴〕 床面上より大小10個のピットが検出されている。そのうち、住居内の対角線上に位置するP、P、が、深さ、配置等からそれに該当するものと考えられる。但し、この4個のピットは各壁より、等距離というより、全体的にや、南西に寄った位置にある。

[カマド] 南壁東寄りに煙道のみのものが存在し、そのすぐ東隅には燃焼部と煙道より成るカマドが付設されている。前者は、廃棄されたものでトンネル状にくりぬいていた南壁はシルトで埋めて叩いてあった。後者は、両側壁が、壁の一部と利用しシルトで構築されていたもので、カマドの下面は貼り床されている。又、燃焼部側壁ともにその一部が厚い焼土層を形成しており、かなり熱を受けたことを示している。煙道は、奥壁で一段高くなりそれがや、下へ傾斜してくり抜かれており煙出部分に若干の掘り込みが認められた。

〔その他の施設〕 床面上にはP₅~P₀まで6個のピットが存在するがP₅は深さ約26cmとや、深いが他は比較的浅い皿状のピットである。特に、貯蔵穴状のピットと思われるものは存在しない。

[年代決定資料] 住居の使用及び構築等の年代を決定する資料としては、床面、カマド内、 ピット内、及び煙出部より出土の土師器、須恵器等がある。実測したものは土師器坏2点、甕

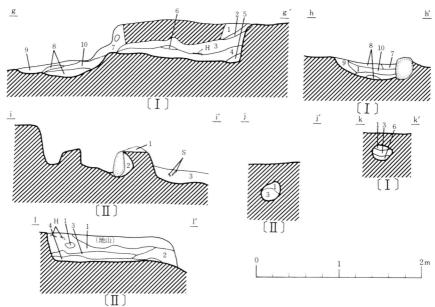


堆積土

大別	桜	土	色	土性	備	考
Ι	1	10 YR 2/1 5	黒 色	腐植土	小礫、木根含む	ŗ
II	2	10 YR 2/2 5	黒褐色	腐植質土	木根を含む	
	3	10 YR 3/2 5	黒褐色	腐植質土	焼土を若干含む	ŗ
	4	10 YR 2/2 5	黒褐色	腐植質土	:	
$\coprod$	5	10 YR 2/1	黒 色			
	6	10 YR 2/1 #	黒 色			
	7	10 YR 3/3 B	暗褐色			
IV	8	2.5YR 6/4	オリーブ 褐色	パミス	降下火山灰	

層	土	色	土	性	備	考
1	10 YR 2/3	黒褐色	腐植	土		
2	10 YR 5/4	黄褐色	ું <b>ગ</b>	· ト		
3	10 YR 2/2	黒褐色	腐植	土		
4	10 YR 2/2	黒褐色	> л	, F		
5	10 YR 4/4	褐 色	> л	<i>-</i> -	炭化物、焼土多量	

第110-1図 CE12竪穴住居跡



堆積土(カマド・煙道部)[I]

146	土 色	土 性	備	考
1	7.5YR 3/2 黒褐色	腐植土	炭化物、木根を含む	
2	10 YR 4/6 褐 色	シルト	炭化物・木根を含む	
3	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	炭化物を含む	
4	5 YR 3/4 暗赤褐色	シルト	焼土、炭化物を含む	
5	5 YR 3/4 暗赤褐色	シルト	4層に比してサラサラしている	
6	10 YR 5/6 黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む	
7	5 YR 3/3 暗赤褐色	シルト	焼土、炭化物、黒色土を含む	
8	5 YR 4/8 赤褐色	焼 土		
9	10 YR 6/6 明黄褐色	シルト	炭化物を若干含む	
10	7.5YR 5/8 明褐色	シルト	焼土を若干含む	

堆積土(カマド・煙道部)〔Ⅱ〕

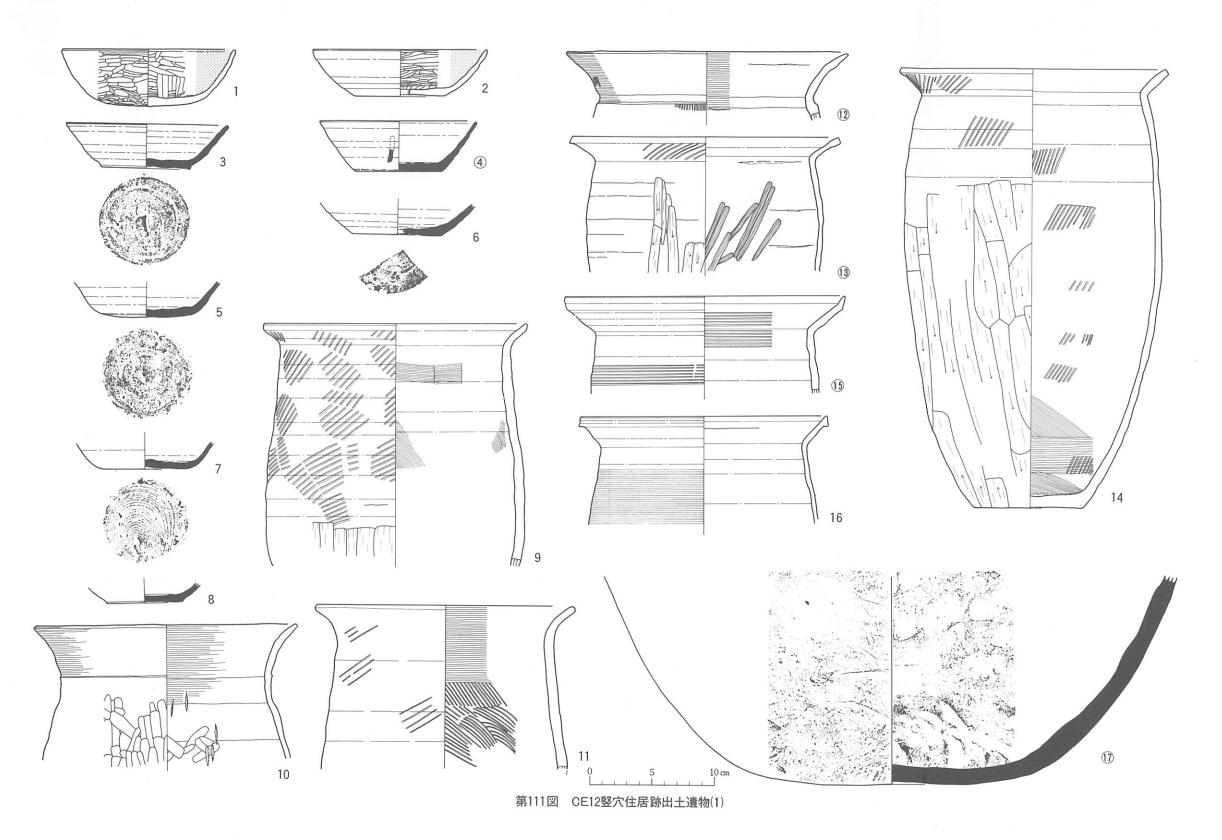
106	土 色	土		性	備考	
1	10 YR 2/3 黒褐色	シ	ル	F	焼土、炭化物を若干含む	
2	2.5 YR 4/4 オリーブ褐色	٤	ル	ŀ	焼土若干、煙道を埋めたもの	
3	2.5 YR 3/2 黒褐色	٤	ル	٢	焼土と黒色土の混土	
4	10 YR 3/2 黒褐色	ي ا	ル	۲	ブロック状に焼土が入る	

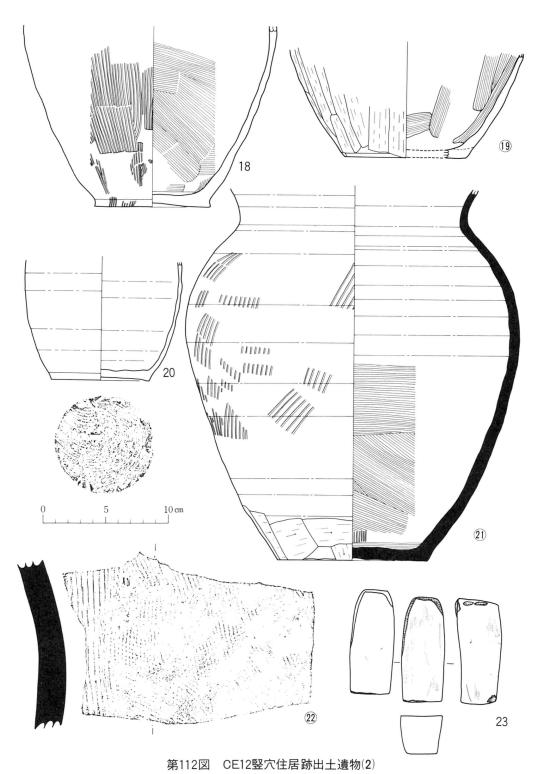
第110-2図 CE12竪穴住居跡

8点、須恵器坏2点、砥石1点である。

土師器 製作に際しロクロ未使用のもの、ロクロ使用のものと両者が存在する。

坏(第 111 図  $1\cdot 2$ ) (1)は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段の丸底風のロクロ未使用坏である。調整技法は、内外面ともヘラミガキ、内面は黒色処理されている。(2)は、底部から口縁部にかけて直線的に外傾するロクロ使用の坏である。内面はヘラミガキ、黒





# 出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調	整	底 面	器高	口径	体 径	底 径	分類番号
号	111 77 78 157	138 777	外 面	内 面	AS IHI	tar (n)	口 注	I'F IE	45 II	77 75K III 17
1	カマド前	土 師 器(坏)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)		4.6	13. 9			А, ь
2	煙道立上部	土 師 器(坏)	ロクロ痕・回転へラケズリ	ヘラミガキ(内黒)	糸切り後ヘラケズリ	3.7	13. 9		(7.0)	B <sub>2</sub> I a
3	床 面	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラ切り	3.6	13.0		7.1	C, Ia
4	堆 積 土	須惠器(坏)	ロクロ痕(墨書)	ロクロ痕	ヘラ切り	4.0	12.6		7.1	C, Ia
5	堆 積 土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラ切り	( 3.0)			7.0	C 2 [[
6	ピット内	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラ切り	( 2.4)			(7.1)	C, Ia
7	堆 積 土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	( 2.0)			6.8	C, [[
8	堆 積 土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	(1.4)			6.0	C, I
9	煙道立上部	土 師 器(甕)	タタキメ後ロクロナデ	ハケメナデ		(20, 4)	21.1			B₁ [[a
10	煙道立上部	土 師 器(甕)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ナデ・ナデツケ		(10.7)	21.0			A <sub>1</sub> I a 3
11	カマド内	土師器(甕)	タタキメ後ロクロナデ	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ		(13.5)	(20.5)			B <sub>1</sub> I d
12	堆 積 土	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・不明		(5.3)	22. 5			A, I a 3
13	堆 積 土	土師器(甕)	ロクロナデ・ ロクロ後ヘラケズリ	ロクロナデ後ナデツケ		(10.2)	21.4			B <sub>1</sub> I d
14	カマド前ピット内	土 師 器(甕)	タタキメ後ロクロナデ ・ヘラケズリ	タタキメ・ハケメ		34. 5	21.5		8.8	B₁∏d
15	煙道立上り	土 師 器(變)	ロクロナデ・ハケメナデ	ハケメナデ・ロクロ		(7.8)	22.5			B, I a
16	ピット内	土 師 器(甕)	ロクロナデ・ハケメ状ロクロ	ロクロナデ		( 8.5)	20.5			ВіІь
17	堆 積 土	須恵器(甕)	タタキメ	タタキメ・シボリ?						С
18	カマド前	土 師 器(甕)	ハケメ	ヘラナデ・ヘラケズリ	木 葉 痕	(14.4)			9. 2	В
19	堆 積 土	土師器(甕)	ヘラケズリ	ナデツケ	ヘラケズリ	( 8.4)			( 9.8)	В
20	カマド内	土 師 器(甕)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	( 9.5)			7.7	В
21	堆 積 土	須恵器(甕)	タタキメ後ロクロナデ ・ヘラケズリ	ロクロナデ・ナデツケ	ヘラケズリ	(29.5)		26. 5	12.0	С
22	堆 積 土	須恵器(甕)	タタキメ	(拓本)						С
23	煙道部	砥 石	8.5×30×3.4cm	(石質細粒凝灰岩)						

色処理されている。底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。

大甕(第111·112図9~11·14~16·18~20) (9·11·14)は、口縁部が短かく外反し、体部最大径が体部中位~下半にあるもの、又は、中央附近にある長胴である。調整技法は口縁~上半は外面がタタキメ後ロクロナデ、下半がヘラケズリされており、内面はロクロナデ、ハケメ等が施されている。(10)は口縁部が長く「くの字」状に外反するもので、口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面はヘラミガキ、ロクロ未使用のもので(15·16)は、口縁部が短かく外反し、口唇部が上方又は、下方につまみ出されているもの長胴の上半である。内外面ともにハケメ状のロクロナデである。(18)は、木葉底のものである。

小甕 (第 112 図20) ロクロ使用の小型甕の体部下半である。底部は、回転糸切り無調整である。

**砥石**(第 112 図23) 石材が石質細粒凝灰岩で、平面形は先方がや、丸味をおびた舟型で断面形は方形を呈し、上下 2 面が特に使用され、特に上面は湾曲している。又、側面には、多くの擦痕が認められる。

[**堆積土出土遺物**] 別表の如く、土師器、須恵器、縄文土器等の破片が多く出土している。 実測したものは、須恵器坏4点、大型饗2点、土師器、大型饕3点である。

# 須恵器

坏(第 111 図  $4 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 8$ ) (4)は、口縁部が直線的に外傾し、体部に墨書の一部が認められるもの(8)は底部破片でいずれも、回転糸切り無調整のものである。 $(5 \cdot 7)$ は、いずれも丸味の強い底部で、(5)は回転ヘラキリ、(7)は、回転糸切りものである。

大甕(第 111 図17・21) (17)は、底部が丸底風の大甕の下半部で外面にタタキメ文、内面は当て具痕が認められるもので残存部の体径が約 46 cmあるものである。(21)は、口縁部が欠失しいるが、最大径が体部上半にある甕である。外面はタタキメ、下半底部はヘラケズリ、内面下半はナデが施されている。(22)は、表面に平行タタキメ文を有する大型甕の破片である。

# 土師器

大甕 (第 111 図12・13) (12)は、口縁部が長く「くの字」状に外反するロクロ未使用のもの(13)は、口縁部が短かく外傾するロクロ使用の甕で、外面口縁部にはタタキメがみられ、体部にヘラケズリ、内面は、ロクロナデである。(19)は、底部下半が外面ヘラケズリ、内面ナデ、底部はヘラケズリされているものである。

縄文土器片は、撚糸文の破片が数片ある他は、いずれも地文が縄文で摩滅しているものがほとんどである。

18BF 50竪穴住居跡 (第 113 図 1 · 2 )

[遺構の確認] B調査区のほぼ中央、BH12竪穴住居跡の東約9m、BF53掘立柱建物跡の西約0.5mの地点の地山面で煙出部と北西隅の柱穴跡と接するような形で検出されたものである。

〔**重複**〕 南壁西側は、住居跡より新しいと推定されるBG50ピットによって切られている。

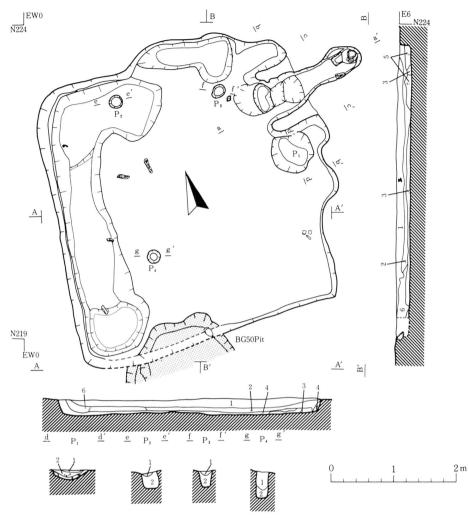
**[平面形・規模**] 平面形は、方形である。規模は、長軸(南北)約4.7m、短軸(東西)約5.5mであり、床面積は、約2.2mである。なお、南北壁の中点を結ぶ軸線は、N-6°ーEである。

**「堆積土**」 細かくは6層に分けられるが、Ⅳ層に大別できる。 I 層は、黒褐色の粘土質砂土で、壁際を除く中央附近にレンズ状に堆積し、床面には達していない。 II 層は、黒褐色の砂質粘土で南東側の壁近くから中央に向って床面に堆積しているが、北東側ではみられない。 II 層は、主に、黒褐色の砂質粘土で、床面の中央附近に堆積している。 IV 層は、暗褐色の粘土質砂土で、北西、南西側の壁近くから中央に向って堆積している。

〔**壁**〕 地山をそのま、壁としているものである。残存状態は、いずれも20cm内外とあまり良好といえないが床面からの立ち上りは比較的急である。なお、即述の如く、南西側は、ピットにより破壊されている。

〔床〕 比較的平担で固く、貼床は認められない。

[カマド] 東壁北隅近くに附設されており、燃焼部と煙道部より成る。西側壁は、シルトで 構築されそれぞれ舌状に残っている。燃焼部は、皿状にくぼんだ床面を有し、左右の最大幅は



# 堆積土

_					
λγί	土	<u>(ń</u>	土、性	ffili	考
1	10 YR 2/2	黑褐色	粘土質砂土	土師器片、炭化物若干混じる	
2	10 YR 3/2	黑褐色	砂質粘土	土師器片多量に出土、炭化物、焼土若干	
3	10 YR 3/1	黑视色	砂質粘土	炭化物若干混じる	
4	10 YR 4/4	枞 色	砂質粘土		
5	10 YR 3/1	黑褐色	砂質粘土	炭化物若干、焼土多量混じる	
6	10 YR 3/3	暗褐色	粘土質砂土	地山の土が小ブロック状態に混じる	
	1 2 3 4 5	## ± 1 10 YR 2/2 2 10 YR 3/2 3 10 YR 3/1 4 10 YR 4/4 5 10 YR 3/1	財     土     色       1     10 YR 2/2 無褐色       2     10 YR 3/2 無褐色       3     10 YR 3/1 無褐色       4     10 YR 4/4 褐色       5     10 YR 3/1 無褐色	財     土     色     土     性       1     10 YR 2/2 黑褐色     粘土質砂土       2     10 YR 3/2 黑褐色     砂質粘土       3     10 YR 3/1 黑褐色     砂質粘土       4     10 YR 4/4 褐色     砂質粘土       5     10 YR 3/1 黒褐色     砂質粘土	層     土     色     土     惟       1     10YR 2/2 黒褐色     枯土質砂土     土師器片、炭化物若干混じる       2     10YR 3/2 黒褐色     砂質枯土     土師器片多量に出土、炭化物、焼土若干       3     10YR 3/1 黒褐色     砂質枯土     炭化物若干混じる       4     10YR 4/4 褐色     砂質枯土     炭化物若干、焼土多量混じる       5     10YR 3/1 黒褐色     砂質枯土     炭化物若干、焼土多量混じる

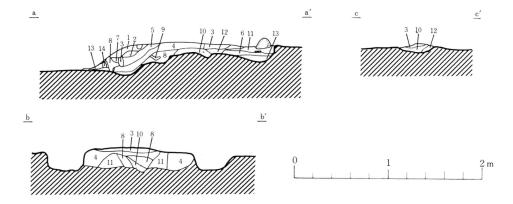
# 堆積土(柱穴)

ký	土	色	土		丝		fill	考
1	10 YR 2/3	黒褐色	٤	ル	۲			
2	10 YR 2/2	黒褐色混土	٤	ル	۲	混	±:	

# 堆積土(P1)

W	土 色	土性	fill	考
1	10 YR 2/2 黒褐色	シルト		
2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土、炭化物	
3	10 YR 2/3 暗褐色	シルト		

第113-1図 BF50竪穴住居跡



**堆積土(カマド・煙道部)** 

( <del></del>	王/旦印/			
土	色	土 性	備	考
10 YR 2/2 黒	褐色	粘土質砂土	焼土、炭化物若干含む	
10 YR 3/1 黒	褐色	粘土質砂土	焼土、炭化物若干、地山小ブロック	
10 YR 2/2 黒	色	粘土質砂土	焼土、炭化物若干含む	
10 YR 2/1 黒	色	粘土質砂土	焼土、多量に含む	
5 YR 3/3 暗	赤褐色	焼 土		
5 YR 4/4 (1)	ぶい赤褐色	焼 土		
10 YR 4/4 祝	色	粘土質砂土		
10 YR 3/2 黒	褐色	粘土質砂土		
10 YR 2/2 黒	褐色	粘土質砂土		
10 YR 4/4	色	粘土質砂土		
10 YR 2/2 黒	褐色	粘土質砂土	焼土若干含む	
10 YR 2/1 黒	色	粘土質砂土	炭化物を多量に含む	
10 YR 3/2 黒神	褐色	粘土質砂土	地山の土が若干混入	
10 YR 7/1 黒	色	粘土質砂土	焼土、地山の土が混じる	
	+ 10YR 2/2 黒 10YR 3/1 黒 10YR 2/2 黒 10YR 2/1 黒 5 YR 3/3 時 5 YR 4/4 は 10YR 3/2 黒 10YR 2/2 黒 10YR 2/2 黒 10YR 2/1 黒 10YR 2/1 黒 10YR 3/2 黒 10YR 2/1 黒 10YR 3/2 黒 10YR 3/1 L   L   L   L   L   L   L   L   L   L	10 YR 2/2 黒褐色 10 YR 3/1 黒褐色 10 YR 2/2 黒 色 10 YR 2/1 黒 色 5 YR 3/3 暗赤褐色 5 YR 4/4 に忠小赤褐色 10 YR 4/4 褐 色 10 YR 3/2 黒褐色 10 YR 2/2 黒褐色 10 YR 2/2 黒褐色 10 YR 2/2 黒褐色 10 YR 2/1 黒 色 10 YR 2/1 黒 色	土         色         土         性           10 YR 2/2         黑褐色         粘土質砂土           10 YR 3/1         黒褐色         粘土質砂土           10 YR 2/2         黒色         粘土質砂土           10 YR 2/1         黒色         粘土質砂土           5 YR 3/3         暗赤褐色         焼土           5 YR 4/4         にお赤褐色         焼土           10 YR 4/4         樹色         枯土質砂土           10 YR 3/2         黒褐色         粘土質砂土           10 YR 2/2         黒褐色         粘土質砂土           10 YR 2/2         黒褐色         粘土質砂土           10 YR 2/1         黒色         粘土質砂土           10 YR 3/2         黒褐色         粘土質砂土           10 YR 3/2         黒褐色         粘土質砂土	土       色       土 性       備         10YR 2/2 黒褐色       粘土質砂土       焼土、炭化物若干含む         10YR 2/2 黒色       粘土質砂土       焼土、炭化物若干含む         10YR 2/1 黒色       粘土質砂土       焼土、多量に含む         5 YR 3/3 暗赤褐色       焼土       カード・カード・カード・カード・カード・カード・カード・カード・カード・カード・

第113-2 図 BF50竪穴住居跡

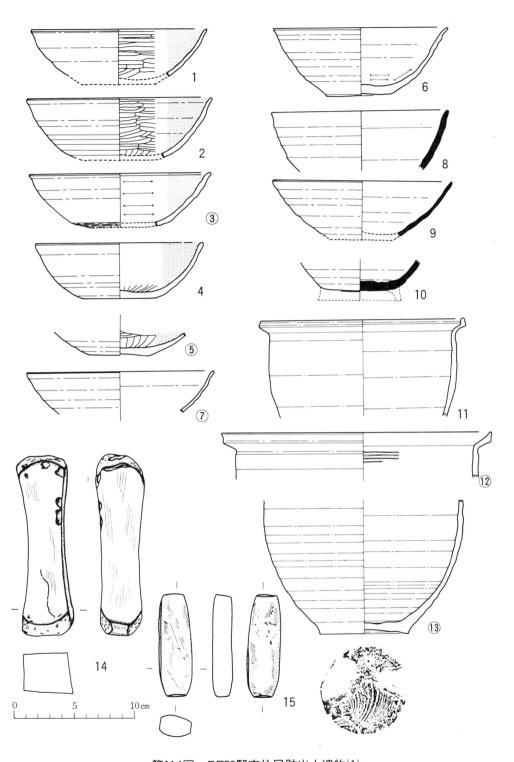
約50cmである。燃焼部奥壁は約10cmの段をもって上り更に約10cm上り二段の段差でもって長さ約110cmの煙道部へ連なる。煙道部底面は、中半より先端の煙出部にかけてや、下り傾斜になっている。特に煙出部にピットはない。

〔その他の施設〕 カマド右側壁に径約75cm、深さ約20cmの深皿状のピットが存在する。焼土炭化物の混った堆積土であるが遺物は出土していない。又、西壁から北壁にかけての床面下に幅約80cm、深さ4~10cmの床面に皿状の溝がカギ状に存在し、更に、北壁に沿って長さ140cm、幅約40cm、深さ約6cmの溝が存在する。これらは、排水を意図したものと考えられる。

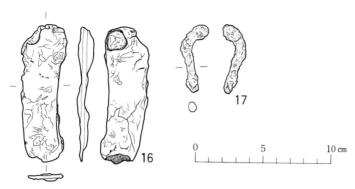
[年代決定資料] 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内、及び、カマド周辺の床面より出土した土師器、須恵器、砥石、鉄製品等がある。

土師器 いずれも製作に際しロクロ使用のものである。

坏 (第114図1・3・4) (1・3・4)は、体部は丸味をもって立ち上り、口縁部でわ



第114図 BF50竪穴住居跡出土遺物(1)



# 出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	(t) (t)	整		nn 4.				
号	山工机工	性 が	外 面	外 面	底 面	器高	口径	体 径	底 径	分類番号
1	カマド周辺	土 師 器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)	回転ヘラケズリ	(4.6)	14.6			В,
2	堆 積 土	土 師 器(坏)	ロクロ痕・回転へラケズリ	ヘラミガキ(内黒)		(4.9)	15.6			В
3	カマド内	土 師 器(坏)	ロクロ痕・回転へラケズリ	ヘラミガキ(横)(内黒)	回転ヘラケズリ(?)	(4.5)	15.0			В,
4	カマド周辺	土師器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)	磨 滅	4.6	14.0		6.0	В.Іь
5	堆 積 土	土 師 器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)	右回転糸切り	(1.8)			5. 2	В,Іь
6	カマド周辺	土 師 器(坏)	ロクロ痕	ロクロナデ・ヘラミガキ	右回転糸切り	5.6	14.5		5. 2	В,
7	堆 積 土	赤 焼 き(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 3.5)	(15.6)			Въ
8	カマド内	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕		(5.0)	(14.2)			С
9	ピット1中	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕		(4.5)	14. 9			С
10	カマド周辺	須惠器(高坏)?	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラキリ	( 2.5)			(7.0)	
11	カマド周辺	土 師 器(鉢)	ロクロ痕	ロクロ痕		(8.0)	16. 9			
12	堆 積 土	土師器(甕)	ロクロ痕	ロクロ痕・ハケメ?		( 3.8)	(22.2)			B₁ [] a
13	堆 積 土	土 師 器(鉢)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	(11.2)			7.4	
14	床 面	砥 石	15×3, 3×4, 2(cm)							
15	床 面	砥 石	8.6×2.6×1.8(cm)							
16	床 面	鉄製品(鎌)?	10.1×2.6×0.3(cm)							
17	床 面	鉄製品(釘)?	5,3×0,6×0,8(cm)							

### 第115図 BF50竪穴住居跡出土遺物(2)

ずかに外反するもので、内面はミガキ、内黒処理されているもの $(3\cdot 4)$ と、内面中ごろから底面にかけて $^{\land}$ ラミガキが施されているもので内面は褐色を呈しているが内黒がとんだものと思われる(6)がある。

**鉢**(第 114 図11) 口縁部が短く、強く、外反し口唇部が上方へ内傾気味に引き出されているものであり、底部は欠失している。内外ともにロクロ整形である。

#### 須恵器

坏(第 114 図  $8\cdot 9$ ) 体部から口縁部にかけて外傾するとみられるもの、破片である。色 調は灰白色で軟質である。

高台付坏 (第 114 図10) 底部のみであり底面に回転へラキリ痕がある。中央に厚さ約 1 mm の粘土を貼付した痕が残っているもので、高台の周囲を内側から押えた跡と推定されるものである。

**砥石** (第 114 図14・15) (14)は、石材が斜長石流紋岩で平面形は中央部が細長いつづみ状、 断面形は台形に近い棒状のもので、四面とも使用痕が認められる。(15)は、断面形が楕円に近い 棒状のもので石材は淡緑色細粒凝灰岩である。上下二面が特に使用されている他側面にも擦痕が認められる。更に、両端にも明確な使用痕のあるものである。

鉄製品 (第 115 図 $16 \cdot 17$ ) (16)は、残存部分が幅 2.6 cm、長さ10.1 cmのや、湾曲した長方形状のものであり鎌の一部と推定されるものであり、(17)は、長さ5.3 cm、径 $0.6 \times 0.8$  cmの楕円を呈し「くの字」状に曲った棒状であり、釘の一部とも推定される。

[堆積土出土遺物] 別表の如く土師器、須恵器、赤焼き土器、縄文土器の破片が出土しているが、実測したものは、土師器坏2点、甕1点、鉢1点、赤焼き土器坏1点である。

# 土師器

坏(第 114 図 2 · 5) (2)は、体部が丸味を持って立ち上り口縁部でわずかに外傾するもので、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。(5)は、回転糸切りの底部で、内面にはヘラミガキ、黒色処理されている。

大甕 (第 114 図12) 口縁部が「くの字」に短く外反し口唇部が上方へ引き出されているももの、口縁破片である。内面にハケメ状のロクロナデ痕がある。

**鉢**(第 114 図13) 底面が回転糸切りによって切り離れている鉢型の土器と思われるもの、 下半部である。内外面ともにロクロ整形である。

## 赤焼き土器

**坏**(第114図7) 体部から口縁部にかけて丸味を持って立ち上り、口唇部がわずかに外傾するものと思われるもの、体部破片である。

その他、破片は、ヘラミガキされた内黒の坏、甕は、比較的薄手の砂の目立つ体部破片、須 恵器は、灰白色、灰色の硬質の坏の破片である。その他、床面下の掘り込みから出土した坏の 破片は、灰白色、橙色で薄手の体部破片が多い。

## (19CB03竪穴住居跡(第116図)

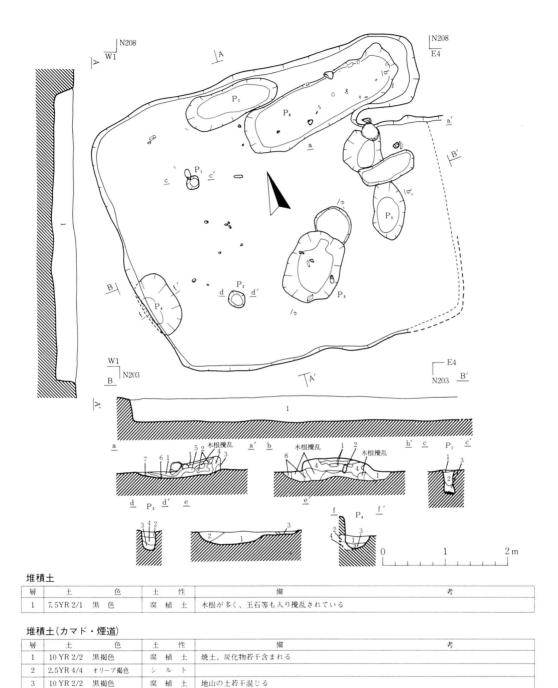
[遺構の確認] C調査区のほぼ中央附近、CA12竪穴住居跡(縄文)の東約5m、BH56竪 穴住居跡の南西約8mの地点の地山面で検出したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は、東壁が攪乱によりほとんど破壊されており不明であるが、東西がや、長い隅丸方形と推定される。規模は、長軸(東西)約5.5 m、短軸(南北)約4.65mであり、床面積は、約24.4㎡である。又、南北壁の中点を結ぶ軸線はN-0°-EWである。

[**堆積土**] 黒色の腐植土1層のみである。木根、玉石等が多く含まれ攪乱されている部分が 多い。

[壁] 地山をそのま、壁としているもので、東壁から南東隅にかけて攪乱のため破壊されているが他は残存壁高が20~30cmと比較的良好で立ち上りもしっかりしているところが多い。



第116図 CB03竪穴住居跡

焼土多量に含まれる

5 YR 2/3

5 YR 4/8

7.5YR 4/3

黒褐色

赤褐色

褐 色

2.5YR 4/3 オリーブ褐色2.5YR 4/4 オリーブ褐色

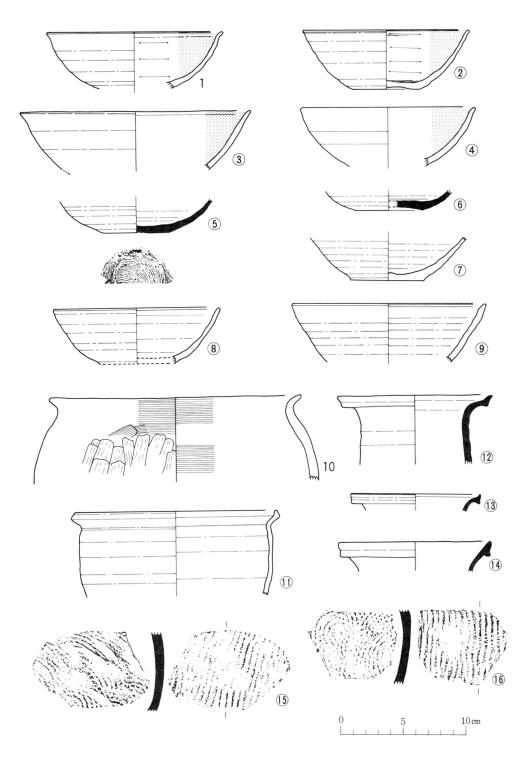
腐植

焼

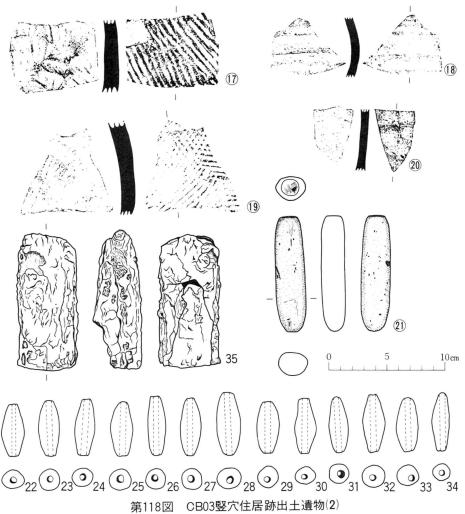
土

ル

ルト



第117図 CB03竪穴住居跡出土遺物(1)



# 出土遺物観察表

番号		D. T. ES.	4	種別	i[E]	整	底 面	器高	口径	体 径	底 径	分類番号
号	i	出土層位	У.	種 別	外 面	内 面	15 田	रिले (च)	口 1至	1年 1王	悠 1至	万规备万
1	カ	マド	内	土 師 器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)?		(4.5)	(14.1)			В
2	堆	積	土	土 師 器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)		4.7	13. 4		5.4	В,∏ь
3	堆	積	土	土 師 器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)		(4.8)	(18.4)			В
4	堆	積	土	土 師 器(坏)	ロクロ痕	磨 滅(内黒)?		(5.2)	(14.0)			В
5	堆	積	土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	( 2.6)			5. 2	С,∐Ь
6	堆	積	±.	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	(1.5)			(5.4)	С
7	床		面	赤 焼 き	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	( 3.4)			(5.9)	Bs
8	堆	積	土	赤 焼 き	ロクロ痕	ロクロ痕		( 4.8)	(15.6)			Bs
9	堆	積	土	赤 焼 き	ロクロ痕	ロクロ痕		(4.4)	(13.4)			Въ
10	ピ	.7	1	土 師 器(鉢)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ		( 6.4)	(20.0)			
11	堆	積	土	土 師 器(鉢)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 6.8)	(16.7)			
12	床		面	須恵器(壺)	ロクロ痕	ロクロ痕		(5.5)	(12.4)			
13	堆	積	±	須恵器(變)	ロクロ痕	ロクロ痕		(1.4)	(10.5)			
14	堆	積	±:	須恵器(甕)	ロクロ痕	ロクロ痕		(1.2)	(12.2)			
15	堆	積	±.	須恵器(甕)		(拓本)						
16	堆	積	±	須恵器(饗)		(拓本)						

17	堆	積	土	須!	惠 器(	甕)			(拓本)			
18	堆	積	土:	須!	惠 器(	甕)			(拓本)			
19	堆	積	土:	須!	惠 器(	甕)			(拓本)			
20	堆	積	土	須!	惠 器(	要)			(拓本)			
21	堆	積	土:	須!	惠 器(	甕)			(拓本)			
22	ピ	.7	۲	土		錘	長さ	4.4cm	最大径 1.9cm			_
23	F,	.7	۲	土		錘	長さ	4.7cm	最大径 1.8cm			
24	床		面	土		錘	長さ	4.7cm	最大径 1.8cm			
25	床		面	土		錘	長さ	4.7cm	最大径 2.0cm			
26	床		面	土		錘	長さ	4.1cm	最大径 1.6cm			
27	床		面	土		錘	長さ	5.0cm	最大径 1.8cm			
28	床		面	土		錘	長さ	5.4cm	最大径 2.1cm			
29	床		面	±.		錘	長さ	4.3cm	最大径 1.9cm			
30	床		面	土		錘	長さ	4.7cm	最大径 1.9cm			
31	床		面	土		錘	長さ	4.8cm	最大径 1.7cm			
32	床		面	土		錘	長さ	5.0cm	最大径 2.0cm			
33	床		面	±.		錘	長さ	4.7cm	最大径 1.9cm			
34	床		面	±		錘	長さ	4.9cm	最大径 1.5cm			
35	床		面	鉄		斧	長さ	11.7cm	幅5.0cm、最大高4.2cm			
36	P,	ピッ	۲	砥	石	状	長さ	10.0cm	径 2.5cm			

[床] 地山を床としているもので本来は平担な床面であったと推定されるが、床全体に杉の根が入りこんでおり、検出された床面は凹凸の多い床面となっている。

〔**柱穴**〕 床面上よりP₁~P₅の大小5個のピットが検出されているが、そのうち、西壁の内側約1.4mの位置に南北に並ぶP₁、P₂のピットが深さ、配置等からみてそれに該当するものと思われる。なお、これに対応するものは床面の攪乱が著るしいこともあり確認されなかった。

〔カマド〕 東壁や、北寄りに付設されていたものと思われる。燃焼部は左側壁が舌状に残存 し、右側壁は、燃焼部の奥壁から煙道部にかけて完全に破壊されているため島状に残っている のみである。燃焼部内には皿状の浅い落ち込みが存在する。

〔その他の施設〕 カマド右脇に径約60×34cmの平面形が楕円状で深さ約20cm断面が深皿状のピット P₅ が攪乱部分の下より検出されており貯蔵穴状ピットに該当するものと推定されるものである。その他、P₃、P₄とそれぞれ深さが最大20cm前後の深皿状のピットが西壁際及び中央や、南壁寄りの床面に存在した。それから、カマド北脇、北壁沿いの床面下には、幅約70cm、深さ約10cmの長楕円状、幅約50cm、深さ約10cmの楕円状の掘り込みが認められた。位置的に見て排水の機能をもったものと推定される。

[年代決定資料] 住居の使用年代及び構築等と決める資料としては、カマド内やピット内及び床面上より出土の土師器、須恵器、赤焼き土器、鉄製品、土製品等がある。

土師器 製作に際しいずれもロクロ使用のものである。

坏 (117 図1) 体部が丸味をもって立ち上り口縁部が外反するもので底部は欠失している。調整技法は外面ロクロ痕、内面へラミガキ、内黒処理されている。

**鉢**(第 117 図10) 口縁部が単純に短く外反し最大径が体部に位置すると推定される口縁部 破片である。調整技法は、外面口縁部ヨコナデ、体部へラケズリ、内面はナデである。

# 須恵器

壺(第 117 図12) 口縁部が強く短く外反し、口唇部が外方に強く引き出されている長頸壺と推定かれるもの、頸部の破片である。

# 赤焼き土器

坏 (第 117 図 7) 底部の切り離しが回転糸切りで、底部より体部にかけて外傾する赤褐色の軟質の坏である。

# [その他の出土品]

土錘 (第 118 図22~34) いずれも床面やP<sub>6</sub>の堆積土中よりの出土である。最大長5.4~4.0 cm、最大径2.1~1.5cmで、長軸に沿って中央部には、径約0.4cmの貫通孔が穿たれている。

鉄斧 (第 118 図35) 長さ11.7cm、幅 5.0cmのもので、柄を差しこんだと推定されるところは内側に鉄板をまげてある。銹化は進んでいるが残存状態は良好である。

砥石 (第118 図36) 石材は濃緑色凝灰岩製で、長さ10cm、径2.5cm、断面が円形の棒状を呈し、その一方の先端部のみを扁平に使用しているものである。

[**堆積土出土遺物**] 別表の如く多量の土師器、須恵器、赤焼き土器、縄文土器等の破片が出土している。

土師器 製作に際しロクロ使用のものである。

坏 (第 117 図 2 ~ 4 ) 体部から底部にかけてや、丸味をもって立ち上り、口縁部でわずかに外反するものである。(2)は、底面の切り離し技法は回転糸切り無調整である。調整技法はいずれも内面はヘラミガキ、内黒処理されたものである。

**鉢**(第117図1) 口縁部が「くの字」に外反し、口唇部が上方へ強く引き出されているものであり内外面ともにロクロ痕のものである。

#### 須恵器

坏 (第  $118 \boxtimes 5 \sim 6$ ) いずれも、ゆるやかに内湾気味に立ち上ると推定されるもの、底部である。底部の切り離しは回転糸切り無調整である。

**甕**(第117・118図13~20) (13は口縁部が強く外反し口唇部が上下に引き出されている灰釉のみられる口縁部片、(14)は、口縁部が外反し、口唇部が下方へ引き出されているもの、口縁部片である。(15~20)は、外面がタタキメ文、内面青海波文、ヘラ状の当て具痕のあるもの、内外面ともにナデ痕のみられるもの、破片である。

# 赤焼き土器

坏 (第 117 図 8 ・ 9 ) 体部から口縁部にかけて直線的に外反するもの(8)と、丸味をもって口縁部まで立ち上るもの(9)がある。

その他、打製石斧(第54図)、石鏃(第53図)等が出土している。

# 20DA24竪穴住居跡 (第 119 図)

〔遺構の確認〕 段丘の南縁近く、D調査区の南西端G18竪穴住居跡の南西約3mの地山面で確認したものである。

〔**重複**〕 床面下、北東隅にはDA21(No.1)ピットが、南西隅にはDB24ピット(No.1)が存在し、西、南壁によって切られた形になっている。これらのピットは、いずれも縄文時代に属するとみられるピットである。

**〔平面形、規模**〕 平面形はほぼ正方形に近い形を呈し、(一部、東壁が確定せず推定線ではあるが)一辺がいずれも約 $3.6\,\mathrm{m}$ である。又、床面積は約 $13.0\,\mathrm{m}$ である。なお、南北壁の中点を結ぶ軸線は $N-22^\circ-E$ である。

**「堆積土**」 炭化物、焼土、地山のシルト等の含まれ具合によって細かくは8層に分けられるが、本質的にはいずれも黒褐色のシルト質の土であり、大別するとⅢ層に分けられる。 Ⅰ層は、壁際を除く中央附近に堆積しているもので大部分が床面に達していない層であり、Ⅲ層は、主として壁際より中央に向って堆積しているもの、Ⅲ層は床面に堆積している焼土である。

〔**壁**〕 地山をそのまま壁としているものであるが、縄文時代のピットと重複関係にある北東、南東隅は壁が明確でない。壁の立ち上りは全般的に緩かであり、壁高は最も良好な南壁部分で約24cmである。

**〔床**〕 地山のシルトを堀り下げ直接床としているもので、縄文時代のピット上に特に貼床を施した様子は認められない。

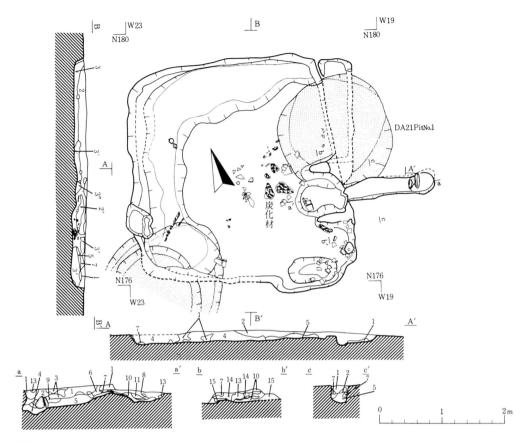
〔**炭化米の出土状況**〕 カマド前及び北西隅床面には炭化材が散在しており、そのうちカマド前に散在していた炭化材(ナラ)の下より炭化米の塊りが出土している。

〔**柱穴**〕 床面上から柱穴とみられるピットは発見されなかった。

[カマド] 東壁中央よりやや南に付設されていたものである。本体は天井部分が既になく、西側壁も削平され舌状に残っていたものである。燃焼部は床面より僅かに堀りくぼめられ皿状を呈している。燃焼部底面から煙道部へは、奥壁に向って一旦緩い傾斜で上り、その後更に緩い傾斜で下り煙出部へ至る。煙出部には特にピットは認められない。煙道と煙出部の境目には楕円状の川原石が2個煙道を防ぐ形で発見されている。カマドの長軸方向はN−115℃Eである。

〔その他の施設〕 カマドの右側、住居の南東隅に東西に長い楕円状の深さ7~10cmのピットが発見されており底面より土師器の坏、甕の破片が出土している。その他西壁北東寄りにも皿状の浅いピットが認められている。又、北壁、西壁沿いに幅約60cm、深さ10cm内外の皿状の溝が床面下にまわっており排水的な機能をもたせたものと考えられる。

[年代決定資料] 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内や煙道部内及び、床面等より出土した土師器、須恵器等がある。



堆積土

大別	166	土	色	土		性	filt	考
	1	10 YR 2/2	黒褐色	掷	植	±.	土師器片を若干含む	
I	2	10 YR 2/2	黒褐色	175E	植	土.	炭化物、焼土を若干含む	
	2'	10 YR 2/2	黒褐色	<b>/森</b>	植	土	2層より焼土を多く含む	
	3	10 YR 2/2	黑褐色	172fg	植	土	炭化物、焼土地山のシルトブロックを含む	
п	3′	10 YR 2/3	黑褐色	1/Ar	植	<b>±</b> .	3層より炭化物、焼土の混じりが多い	
ш	3"	10 YR 2/3	黒褐色	175E	植	±:	3層より地山のシルトのブロックが多い	
	4	10 YR 4/4	视色	シ	ル	٢		
Ш	5	5 YR 4/6	赤褐色	焼		±.		

堆積土(カマド・煙道部)

144	土	色	土		性	備	考
1	10 YR 3/2	黒褐色	1,50g	植	土	焼土、炭化物を若干含む	
2	10 YR 3/2	黒褐色	腐	植	土	1層より柔かい	
3	7.5 YR 4/4	褐 色	シ	ル	۲		
4	10 YR 2/2	黑褐色	シ	ル	۲	焼土若干含まれる	
5	10 YR 3/2	黒褐色	シ	ル	٢	炭化物若干含まれる	
6	2.5 YR 4/6	オリーブ褐色	シ	ル	٢	焼土若干含まれる	
7	10 YR 2/2	黒褐色	シ	ル	٢		
8	7.5 YR 3/4	暗褐色		ル	٢		
9	5 YR 3/3	暗赤褐色	焼		土		
10	5 YR 4/8	赤褐色	焼		土	炭化物を含む	
11	5 YR 3/6	暗赤褐色	焼		±.		
12	5 YR 5/8	明赤褐色	焼		土		
13	5 YR 3/4	暗赤褐色	焼		土		
14	5 YR 3/4	暗赤褐色	焼		土	炭化物を含む	
15	10 YR 2/2	黒褐色	シ	ル	۲		
16	10 YR 4/3	にぶい黄褐色	シ	ル	F	焼土、炭化物を含む	
17	10 YR 4/2	灰黄褐色	シ	ル	1	焼土を若干含む	

第119図 DA24竪穴住居跡

**土師器** 製作に際しいずれもロクロ使用のものである。

坏(第 120 図  $1 \sim 3$ )  $(1 \cdot 2)$ は、体部は丸味をもって立ち上り口縁部が直線的なものであり、(3)は、同じく口縁部がわずかに外反するものである。調整技法は外面 (1)は、底部周辺にヘラケズリが認められるが他は、ロクロ痕のみである。内面は、いずれもヘラミガキ、黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りである。

# 赤焼き土器

**坏**(第120図9) 体部から口縁部にかけて直線的に外傾すると推定されるものの破片である。 赤褐色を呈し軟質である。

**甕** (第 120 図11~13) (11・10)は、口縁部が単純に短く「く」の字状に外反し、口唇部は軽く上下につまみ出しているもの、(12)は、口縁部が短く「く」の字に外反し、口唇部が強く下方へつまみ出されているもの、(13)は、口縁部が極端に短く「く」の字に外反するものである。(11・13)は、体部外面にヘラケズリが施されている。

土堝 (第 120 図18・19) 体部から口縁部にかけて丸味をもち口縁部がわずかに外反し、口唇部が上下につまみ出されているものである。外面下半にナデ、ヘラケズリ、内面にはナデが施されているものである。

〔**堆積土出土遺物**〕 別表の如く多くの土師器、須恵器、赤焼き土器の破片及び石匙、打製石 斧等の石器が出土している。

土師器 製作に際しいずれもロクロ使用のものである。

坏 (第  $120 \boxtimes 4 \sim 7$ ) いずれも体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上るもので (4・5)は口縁部にかけて直線的になるのに対して(6)は、口縁部がわずかに外反するものである。調整技法は外面は(5)の底部にヘラケズリが施されている。内面は、いずれもヘラミガキ、黒色処理されている。底部の切り離しは、(5)がヘラキリの他は、回転糸切り無調整である。

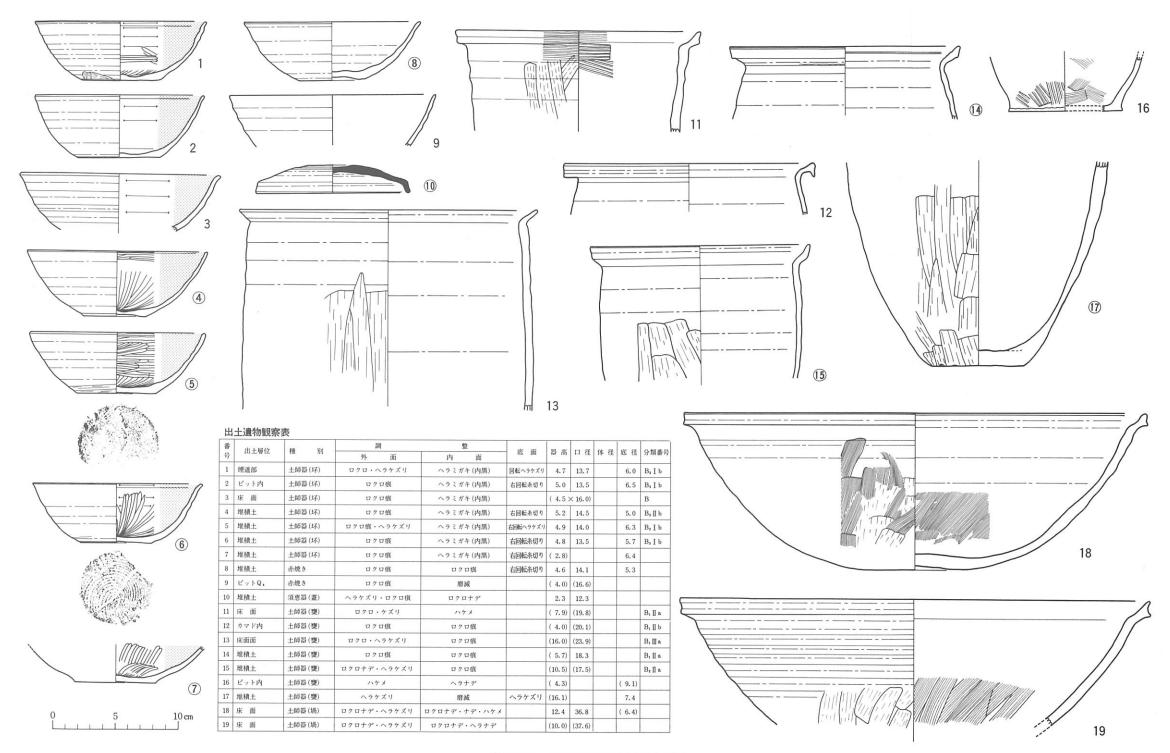
**赤焼き土器** (第 120 図 8 ) 体部から口縁部にかけてやや丸味をもって直線的に立ち上るものである。赤褐色を呈し軟質である。

**甕** (第 120 図15~17) (15)は、口縁部が「く」の字に外反し、口唇部が上方へつまみ出されているもの(16)は、やはり口縁部が「く」の字に外反し、口唇部が上方へ長く引き出されているものである。(15)の体部外面にヘラケズリが施されている。(17)は、体部外面にヘラケズリの施されている下半部である。

#### 須恵器

**蓋**(第 120 図10) つまみ部が欠失しているもので、天井部は、ヘラケズリがなされているが、内面はロクロナデのみである。

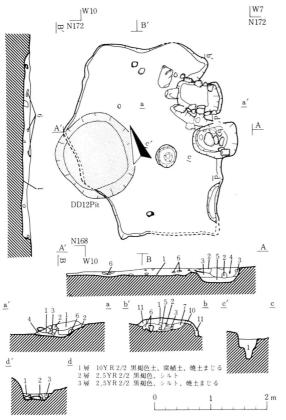
石匙(第53図)打製石斧(第54図)の他、縄文土器、赤焼き土器等の破片が多く出土している。



第120回 DA24竪穴住居跡出土遺物

# ②DC12竪穴住居跡(第121図)

〔遺構の確認〕 D調査区底位段丘上の最南端に位置するものでDB09竪穴住居跡の南約2m、DD15竪穴状遺構(縄文)と隣接した地点の地山面で検出したものである。



堆積土

層	土 ₩	土 性	備考
1	10 Y R 2/1 黒 色	腐植土	粉状パミスブロック状に、焼土、炭化物若干
2	10 Y R 2/2 黒褐色	腐植土	須恵器片、焼土、炭化物若干含む
3	10 Y R 3/2 黒褐色	腐植土	
4	10 Y R 7/1 黒色	腐植土	
5	10 Y R 2/2 黒 色	砂質粘土	焼土、炭化物若干含む
6	2.5YR7/6 明黄褐色	パミス	降下火山灰

#### 堆積土(カマド部)

褥	土	色	土		性	f衛	考
1	7.5YR4/3	褐 色	シ	ル	<b>-</b>	土師器片、焼土炭化物含まれ	る
2	5 YR 4/6	赤褐色	シ	ル	1	焼土ブロック状に土師器片、	炭化物
3	5 YR 3/2	暗赤褐色	シ	ル	1	焼土炭化物若干含まれる	
4	7.5YR 3/1	黒褐色	シ	ル	1	焼土若干含まれる	
5	10 Y R 4/4	褐 色	シ	ル	1		
6	10 Y R 4/3	にぶい黄褐色	シ	ル	1	攪乱されている焼土	
7	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	シ	ル	1	焼土、炭化物若干含まれる	
8	7.5YR 2/1	黒 色	IGF Table	植	±:		
9	2.5YR7/6	明黄褐色	15	3	ス	降下火山灰	
10	10 Y R 5/3	にぶい黄褐色	1	ル	1	炭化物若干含まれる	
11	10 Y R 3/2	黒褐色	3	ル	1	焼土、炭化物若干含まれる	

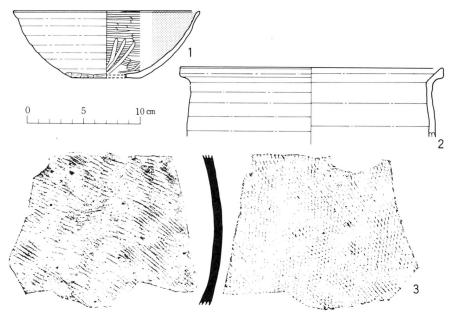
第121図 DC12竪穴住居跡

〔**重複**〕 DD12ピットが 西側床下に存在し西壁の一 部が切り合い関係にある。

「平面形・規模」 平面形は南壁の一部が直線的であるが他は出入りが多く一定しない不整形である。規模は、長軸(南北)約3.3 m、短軸(東西)約2.2 mで床面積は約9.2 ㎡である。南北壁が一定していないので正確さに欠けるが中点の軸線はN−20°−Eといえよう。

〔**堆積土**〕 大略は、黒褐色の腐植土1層であり、粉状パミス(火山灰)や地山の黄褐色シルトが小ブロック状に入り込んでいる。

〔壁〕 地山をそのま、壁としているが、南壁の一部が残存状態がや、良く約20cmを計る他はいずれも皿状の立ち上りを呈している。又、壁面は直線的なところが少く緩かに蛇行しており明確でないところが多い。



出土遺物観察表

番	出土層位	種別	部	整	·* *	80 -44	(1			
号	III. W IV.	138 79	外 面	内 面	底 面	器高	口径	体 径	底 径	分類番号
1	カマド内	土師器(坏)	ロクロ痕・手持ヘラケズリ	ヘラミガキ (内黒)	ヘラケズリ	5. 9	16.6		( 6.2)	В₁ШЬ
2	カマド内	土師器(變)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 6.3)	(23. 4)			В, ∏ь
3	堆積土	須恵器(變)	タタキメ	タタキメ (拓本)						

第122図 DC12竪穴住居跡出土遺物

**〔床**〕 地山をそのま、床面とし比較的平担で固い。ピットの上面を特に貼り床した様子は認められない。

〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 東壁北寄りに西側壁が多小残存しており、幅約50cm、長さ約80cm、深さ約15cmの一部が住居外に延びる舌状の燃焼部が存在した。燃焼部の周辺には、人頭大の川原石が一見、並べたような形で多数存在した。煙道は認められない。

[その他の施設] カマドの右側に径約80×60cm、深さが最大20cm前後の平面形が舌状のピットが存在し、その中に、カマド周辺に並んでいたと同様の川原石が入っていた。又、中央よりや、南寄りの床面には、上場の径約40cm、下場径約12cm、上方よりの深さ約40cmの断面形が独楽状のピットが存在した。これは、その形態からロクロピットといわれているものに類似したものである。

[年代決定資料] 住居の構築及使用等の年代を決定する資料としては、カマド内出土の土師器がある。カマド内出土の甕片は、いずれも二次加熱を受けたもろいものが多い。

土師器 いずれも製作に際しロクロ使用のものである。

坏 (第 122 図1) 体部から口縁部にかけて丸味を持って立ち上るもので、外面底部近くは手持ヘラケズリされている。内面はヘラミガキ、内黒処理されている。

**甕**(第 122 図 2) 口縁部が短く「くの字」に外反し、口唇部が上下にわずかにつまみ出されているものである。

[**堆積土出土遺物**] 別表の如く土師器、須恵器の坏、甕、赤焼き土器の坏の破片が出土している。(第122図3)は、内外面にタタキメのある大甕と推定されるもの、破片である。

# ②BG59竪穴住居跡 (第 123 図)

〔遺構の確認〕 B調査区の東、BD62竪穴住居跡の南約1m、BF56掘立柱建物跡のすぐ東側、BH56竪穴住居跡を南壁の一部が切る形で検出されたものである。

〔**重複**〕 南壁の一部がBH56竪穴住居跡の北壁の一部を切っている。

**〔堆積土**〕 細かく観察すると6層に分けられるがⅣ層に大別される。 I 層は、黒褐色の腐植 土で住居の中央附近の上面に堆積し床面には達していない。 II 層は、 I 層と類似のものでやは り一部の壁際を除き住居全域を覆っているが床面には達していない。 III 層は、黒褐色のシルト で住居全体の床面に堆積している。 IV 層は、部分的に壁際・床面に堆積しているものである。

〔**壁**〕 地山をそのま、壁としているもので、残存状態も良好である。最も良好な西壁で約50 cmを計る。

**〔床〕** 一部粗掘時の掘りすぎがあり南西隅は明確でないが、西南壁沿いに幅 $60\sim70$ cmの範囲にわたって $5\sim10$ cmの貼床部分が存在した。他には認められない。

〔柱穴〕 認められない。

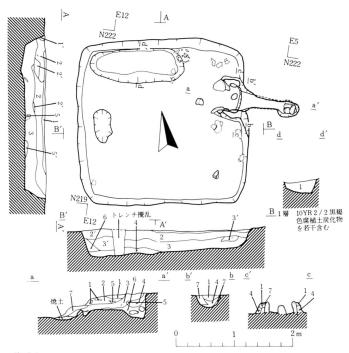
[カマド] 東壁や、北寄りに付設されている。両側壁内、左側は少し乱れているが内側に川原石を一列に並べ立ててシルトの側壁をおさえたもののようである。又、燃焼部奥壁中央附近には径約20cmの支脚石と思われる川原石が埋められていた。燃焼部の底面は熱をうけて固い。煙道部は長さ約120 cm、幅約20cmの溝状で奥壁で約10cm上り、傾斜もなく煙出部へとのびている。煙出部には、煙道底面より約10cm下った径約26cmのピットが存在する。検出面からの深さは約40cmである。なお、煙出部には、人頭大の川原石が3個埋まっていた。

〔その他の施設〕 北壁沿いの床面下に径約160×60 cmで深さが約20cmの楕円状のピットが存在した。

[年代決定資料] 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、床面上より出土した土師器、須恵器等がある。

土師器 いずれも製作に際しロクロ使用のものである。

坏(第124 図1~3) いずれも体部は丸味をもち口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上るも



4		
Ŧ		

大别	模	±.	色	土		性	f衛	考
T	1	10Y R 2/2	黒褐色	IST.	植	±.		
1	1'	10Y R 2/2	黒褐色	牒	植	±.	1層より少し柔らかい	
П	2	10YR 3/2	黒褐色	シ	ル	1		
п	2'	10YR 2/3	黒褐色	シ	ル	1	2層より少し柔らかい	
Ш	3	10YR 2/2	黒褐色	シ	ル	+	土師器、須恵器片を含む	
Ш	3'	10Y R 2/2	黒褐色	シ	ル	1		
	4	10YR 4/4	褐 色	シ	ル	۲		
IV	5	5 Y R 5/8	明赤褐色	焼		±.		
	6	10Y R 2/1	黒 色	牒	植	±		

## カマド・煙道堆積土

146	土	色	土		性	filt	考
1	10Y R 4/3	にぶい黄褐色	į.	ル	۲		
1′	10Y R 4/2	灰黄褐色	シ	ル	ŀ		
2	10Y R 2/3	黒褐色	ż	ル	h		
3	10Y R 3/3	暗褐色	シ	ル	ŀ	焼土を含む	
4	10Y R 2/2	黒褐色	ż	ル	۲		
5	10Y R 4/3	黒褐色	٤	ル	ŀ		
6	10Y R 4/3	に黄い黄褐色	シ	ル	۲	黒色腐植土混じる	
7	10Y R 4/3	に黄い黄褐色	ż	ル	h	焼土を含む	

第123図 BG59竪穴住居跡

[堆積土出土遺物] 別表の如く、少量の土師器、須恵器の破片、土錘が出土している。

#### 須恵器

坏 (第124図6・7) 底部切り離しが回転糸切り無調整のものである。

土錘(第 124 図 9 ~11) 堆積土の I 層から出土したもので長さ 4.5 ~4.9 cm、最大径 1.6 ~ 1.7 cmで中央に径約0.4 cmの貫通孔を穿っているものである。

のである。内面は、ヘラミガキ、黒色処理されているが(2)は、二次的火をうけてそれがとんだものと思われるものである。底部の切り離しはいずれも回転糸切り無調整である。

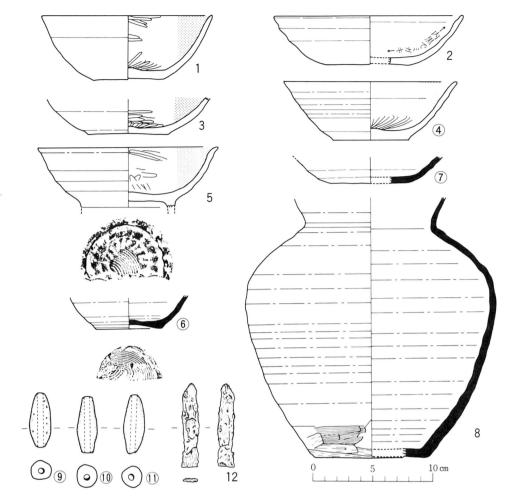
高台付坏 (第 124 図 5 )

体部が丸味をもち口縁部でわずかに外反するもので、底部に高台部の欠落痕の残っているものである。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。 底面は回転糸切りによって切り離し後、高台付着の際菊花状に調整したことが伺われる。

## 須恵器

**甕**(第124図8) 口唇部は欠失しているが、口縁部が外反し肩部に最大径を有するものである。体部外面下端にナデ、ヘラケズリが施されている。底面はヘラケズリされている。

鉄製品 (第 124 図12) 長 さ6.8cm、幅1.3cmの刀子の一 部と推定されるものである。



# 出土遺物観察表

番	di Lawas	£6 (h)	,[[8]	整						
号	出土層位	種別	外 面	内 面	底 面	器高	口径	体 径	底 径	分類番号
1	床 面	土師器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)	回転糸切り	5.3	13.9		5.7	В, Шь
2	床 面	土師器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ? 二次加熱(内黒)?	回転糸切り	4.0	15.5		7.4	В, Іь
3	床 面	土師器(坏)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)	回転糸切り	( 3.0)			6.7	Във
4	堆積土	土師器(坏)	ロクロ痕	ロクロ・ヘラミガキ(内黒)	回転糸切り	4.9	14.4		6.2	B, I a
5	床 面	土師器(高台付)	ロクロ痕	ヘラミガキ(二次加熱)	糸 切り後 菊 花 状	5.0	(15.0)		7.8	
6	堆積土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	( 2.7)			( 5.5)	С
7	堆積土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ復	回転糸切り	( 2.0)			( 5.8)	
8	床 面	須惠器(變)	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ復	ヘラケズリ?	(21.4)	(12.5)	20.3	( 9.6)	
9	堆積土	土 錘	長さ 4.5cm	最大径 1.6cm						
10	堆積土	土 錘	長さ 4.7cm	最大径 1.6cm						
11	堆積土	土 錘	長さ 4.9cm	最大径 1.7cm						
12	床 面	刀 子 ?	長さ 6.8cm	幅 1.3cm 厚き 0.1cm						

第124図 BG59竪穴住居跡出土遺物

# ②BH12竪穴住居跡 (第 125 図)

[遺構の確認] B調査区のほぼ中央付近、BF21竪穴住居跡の南東約2.2 m、CA12竪穴住居跡(縄文)の北約5 mの地山面で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

**[平面形、規模**] 平面形は、方形である。規模は、長軸(南北)約 $4.6 \,\mathrm{m}$  、短軸(東西)約 $4.2 \,\mathrm{m}$  であり、床面積は、約 $19.3 \,\mathrm{m}$  である。南北壁の中点の軸線は、 $N-4 \,\mathrm{^c-W}$  である。

【**堆積土**】 4層に細別される。1層は、黒色の腐植土で壁際を除く住居の中央付近にレンズ 状に堆積し、床面には達していない。粉状パミス(火山灰)が小ブロックで混じる。2層は、 黒褐色のシルトで壁際を除く住居全体の床面に堆積している。3・4層は、黒色、暗褐色のシ ルトで壁際から中央に向って床面に堆積している。

[**壁**] 地山をそのまま壁としており直線的であり、立ち上りも比較的急である。最も良好な東・西壁は、壁高約40cmを計る。

[**床面**] ほぼ平坦である。人頭大の川原石が南半にかけての床面に散在していた。

〔柱穴〕 認められない。

「カマド」 東壁北寄りに付設されている。両側壁は、ほとんど残存しておらず、燃焼部と思われるところに径約  $130 \times 70 \text{cm}$  の楕円状で深さ約20 cmの深皿状のピットが存在したのみである。煙道は、燃焼部奥壁で約20 cmの段差をもって上り、それから緩かな下り傾斜をもって煙出部へ至る。煙出部には煙道底面より約10 cm低い径約30 cmのピットが存在した。なお、煙道の長さは約170 cm で幅約40 cmの溝状のものである。カマドの軸線はN-93 --Eである。

〔その他の施設〕 床面の中央西寄り及び中央南寄りに径約100×90 cm、径約90×80 cmの深皿 状のピットが存在する。少量の炭化物、焼土の混じった堆積土である。

**〔年代決定次資**〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内出土の饗の破片があるのみである。

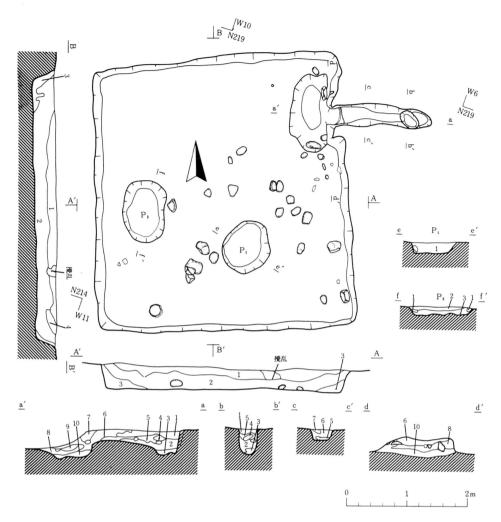
土師器 いずれも製作に際しロクロ使用のものである。

**甕** (第 126 図 6 ・ 7 ) (6)は口縁部が短く外反し、口唇部が少し長くつまみ出されているもの、(7)は口縁部が短く外反し、口唇部が短く上下につまみ出されているものである。

〔**堆積土出土遺物**〕 別表の如く、土師器、須恵器、縄文土器片がかなりの数出土している。 須恵器

坏 (第 126 図  $1 \sim 4$ )  $(1\cdot 3)$ は、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するものであり、  $(2\cdot 4)$  は、体部から口縁部にかけて丸味をもち内湾気味に立ち上るもの或はそれと推定されるものである。 (2)は体部に「天」の墨書がある。 底部の切り離しは、いずれも回転糸切り無調整である。

甕(第 126 図8・9) (8)は、甕の口縁部の破片で口縁部が外反し、口唇部が下方へ引き出



# 堆積土

層	土	色	土		性	f前	考
1	7.5YR 2/1 🖟	! 色	臈	植	土	粉状パミスがブロ 焼土	ック状に入る
2	10 YR 2/2 #	楊色	٤	ル	٢	炭化物、焼土若干	含まれる
3	7.5YR 2/1 #	色	٤	ル	٢	炭化物、焼土若干	含まれる
4	7.5YR 3/3 时	音褐色	シ	ル	٢		

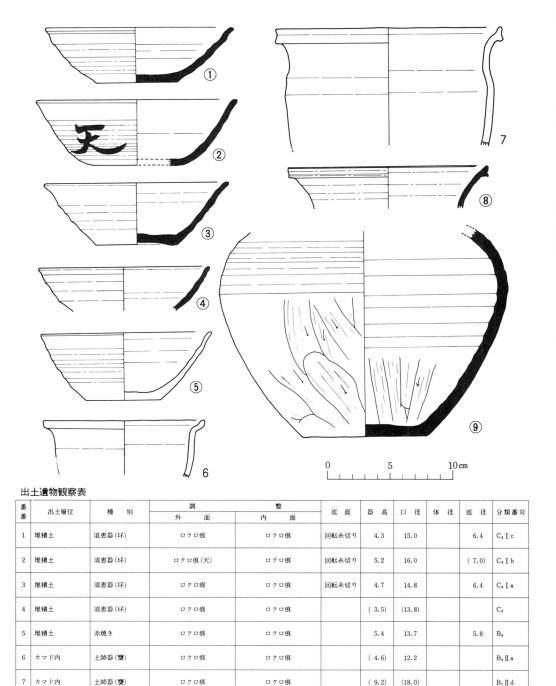
# 堆積土(P₁~P₂)

層	土	色	土	性	備考
1	7.5YR 3/4	暗褐色	シ	ルト	縄文土器片、炭化物焼土を含む
2	10 YR 2/2	黒褐色	٤	ルト	焼土、炭化物若干含む
3	7.5YR 3/4	暗褐色	シ	ルト	須恵器片を含む

# 堆積土(カマド・煙道部)

層	土	色	土		性	備	考
1	10 YR 2/2 #	基褐色	٤	ル	۲	炭化物が多量に 焼土若干	含まれる
2	10 YR 2/1 #	1 色	٤	ル	۲		
3	7.5 YR 3/2 県	褐色	ż	ル	۲	地山の土がブロ	ックで混じる
4	10 YR 4/6 ₹	1 色	۶	ル	٢		
5	7.5 YR 3/2 景	具褐色	٤	ル	٢	焼土若干含まれ	ō
6	7.5 YR 3/3 H	<b></b> 福色	٤	ル	۲	炭化物、焼土が	若干含まれる
7	7.5 YR 4/3 ₹	色色	٤	ル	٢	炭化物若干含ま	れる
8	5 YR 4/8 赤	- 褐色	焼		土:		
9	10 YR 4/6 ₹	6 色	シ	ル	۲		
10	7.5 YR 3/3 時	音褐色	٤	ル	1	炭化物、焼土が	含まれる

# 第125図 BH12竪穴住居跡



第126図 BH12竪穴住居跡出土遺物

ロクロ痕

ロクロ・ケズリ

(3.4)

(16.5)

(16.0)

23.0

С

10.0 C

ロクロ痕

ロクロ・ケズリ・ナデ

堆積土

堆積土

須恵器(變)

須惠器(變)

8

されているもの、(9)は、体部上半に体部の最大径を有する肩の張る感じのものである。体部内 外面の下半にいずれもヘラケズリが施されている。

## 赤焼き土器

坏 (第 126 図 5) 体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するもので器高に比して底径の小さめの坏である。底部切り離しは、回転糸切り無調整である。

その他、磨製石斧(第54図) 2点が出土している。

# ②DB09竪穴住居跡 (第127図)

[遺構の確認] 段丘の南端近く、DC12竪穴住居跡の北約2m、CJ50竪穴住居跡の西約5mの地山面で検出したものである。

〔**重複**〕 カマド前の床面下にDB09ピットが、そして、北東隅にはDA09ピットが存在し、 西壁中央下にはピットがあり、いずれもそれらを切って構築されている。

[**平面形・規模**] 平面形は、方形である。規模は、長軸(東西)約3.9 m、短軸(南北)約3.7 m、であり、床面積は、約14.2 mである。南北壁の中点を結ぶ軸線はN-50°-Wである。

[堆積土] 住居の中央部分が削平され、堆積土の状況は明確でないが、南東隅の比較的残存 状態の良好なところで観察すると5層に分けられる。1層は黒褐色の腐植土であり、2~5層 は黒褐色或いは黒色の砂質粘土である。3層には、焼土、炭化物が含まれている。いずれも壁 際より中央に向って流れ込むような形で堆積している。

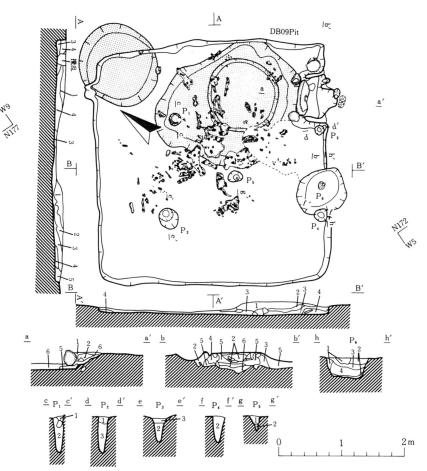
〔壁〕 地山をそのま、壁として利用しており、ピットとの切り合い関係にある部分でも特に補修している様子は認められない。残存状態は不良で最も良好な東壁で約10cmであるが立ち上りは比較的鋭い。

**〔床**〕 全般的に平担で固く、ピット上に貼床した様子は認められない。中央附近より北寄りにかけての床面に炭化材が散在していた。

**[柱穴**] 床面上よりR~P。の6個のピットが検出されている。そのうち、カマド右脇及びP。 ピットの脇で、しかも、南壁に接した形で検出されたPュ、Pュピットと、それに対の位置で北側 に検出されたP、Pュピットが位置的には南に片寄るが配置、深さ等からみて、それに該当する ものと思われるもので、又、中央に存在するPュピットも補助的なものと推定してもよいもので あろう。規模は約径20cm内外床面上よりの深さ約45cm内外である。

〔カマド〕 南壁や、東寄りに付設されている。燃焼部は舌状にわずかに住居外にのびており、煙道は削平されたものか、当初よりなかったものか判然としない。両側壁はシルトで構築され、先端にはそれぞれ川原石が存在し、かけ口に使用されたとみられる径約 $30\,\mathrm{cm}$ 、長さ約 $60\,\mathrm{cm}$ の楕円形の川原石が燃焼部内に横に倒れていた。燃焼部内には焼土が堆積していたが底面には掘り込みは認められなかった。カマドの軸方向は $N-140^\circ-E$ である。





堆積土

層	土	色	土性	備	考
1	10 YR 2/2	黒褐色	腐植土		
2	10 YR 3/2	黒褐色	砂質粘土		
3	10 YR 2/1	黒 色	砂質粘土	焼土、炭化物を含	t
4	10 YR 1.7/1	黒 色	砂質粘土		
5	10 YR 2/1	黒 色	砂質粘土	地山の土がブロッ	ク状に入る

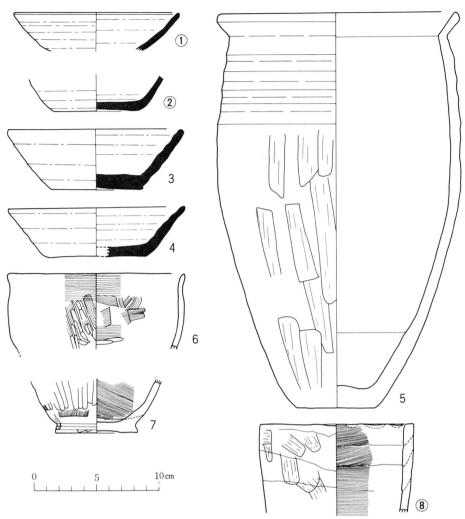
堆積土(P₁∼P₀)

層	土	色	土性	備考
1	10 YR 2/1	黒 色	シルト	炭化物微量含む
2	10 YR 3/2	黒褐色	シルト	攪 乱
3	10 YR 2/2	黒褐色	シルト	炭化物微量含む
4	10 YR 2/1	黒 色	シルト	土師器片、炭化物を含む

カマド・煙道部堆積土

層	土	色	土		性	備	考
1	10 YR 3/2	黒褐色	シ	ル	۲	焼土、炭化物を	皆干含む
2	10 YR 4/3	にぶい黄褐色	シ	ル	٢		
3	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	シ	ル	٢		
4	10 YR 4/3	にぶい黄褐色	シ	ル	٢	炭化物を含む	
5	10 YR 2/2	黒褐色	シ	n	٢	焼土、炭化物を含	含む
6	2.5YR 4/6	赤褐色	焼		土		

# 第127図 DB09竪穴住居跡



# 出土遺物観察表

出土遺物観祭表											
番号	出土層位	FM 59	(19)	整	底面	器高	口径	体 径	底 往	分類番号	
			外 面	内 面	as ini						
1	堆積土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕		( 3.1)	13. 2)			С,	
2	堆積土	須惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	( 2.6)			6.8	С,	
3	ピット	土惠器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	4.9	14.2		7.2	C, I a	
4	ピット	須恵器(坏)	ロクロ痕	ロクロ痕	回転糸切り	4. 9	14.6		( 7.8)	C, I a	
5	床 面	土師器(變)	ロクロ痕・ケズリ	ロクロ痕		31.2	19. 4		6.3	B, [] a	
6	カマド下	土師器(變)	ヨコナデ・ナデ後ミガキ	ヨコナデ・ナデ・ミガキ		( 6.8)	(14.0)		6	A, [] b1	
7	カマド内	土師器(變)	ヘラミガキ	ナデツケ		( 4.2)			6.6		
8	堆積土	土師器	ヘラケズリ	ヨコナデ		(7.1)	12.3				

第128図 DB09竪穴住居跡出土遺物

〔その他の施設〕 東壁中央に一部が住居外に出る形で径約80cm、深さ約30cmの深鉢状のピットが存在する。炭化物と須恵器が出土している。

**〔年代決定資料**〕 住居の構築及び年代を決定する資料としては、カマド内及び床面ピット等から出土した土師器、須恵器等がある。

## 土師器

大甕(第 128 図 5) 口縁部が短く「くの字」に外反しているもので、体部最大径が体部上半にあり、器高に比べて底径の小さい長胴である。調整技法は口縁部の内外はロクロ痕、体部外面下半はヘラケズリ、内面はロクロ痕である。ロクロ使用のものである。

小甕(第 128 図 6 ・ 7) 口縁部が短くわずかに外反している薄手の小型甕と推定されるもの、口縁部及び底部である。ロクロ未使用のものである。口縁部附近は、内外ともに、ヨコナデ体部の外面は、ナデ及び部分的なミガキ、内面は主にナデである。二次的加熱をうけピンク色を呈しているところが多い。

### 須恵器

坏 (第 128 図 3 · 4 ) 体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するもの(3)と底部近くがや、丸味をもちや、外反気味に口縁部に立ち上るもの(4)とがある。いずれも器高に比べて底径の比較的大きいものである。胎土の色調は、いずれも浅黄橙色である。これは灰白色のものが二次加熱を受けた結果変化したもの、ようである。底部の切り離しは、回転糸切り無調整である。

[堆積土出土遺物] 別表の如く、堆積土からは、土師器、須恵器の破片が出土している。

## 土師器

筒形土器(第128図8) 口縁部に指で押圧して成形した痕跡のみられる平縁で、円筒状に近い特殊な甕と推定されるものである。内外面はかなり磨滅しているが、外面にヘラミガキ、内面にナデの調整痕が認められる。製作に際してはロクロ未使用のものである。

坏(第 128 図 1 · 2) (1)は、口縁部がや、内湾気味に立ち上るもの、(2)は、底部がや、丸味をもって立ち上るもので、色調は灰白色のや、軟質のものである。

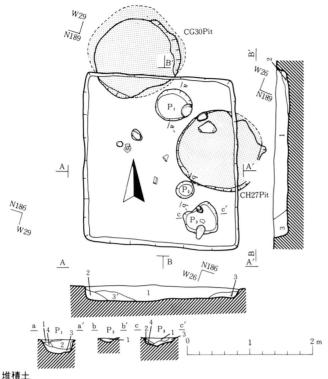
#### (2) 竪穴状遺構とその出土遺物

### ②CH30竪穴状遺構 (第 129 図)

〔遺構の確認〕 C調査区の最西端、CF24竪穴住居跡の南西約5m、DA24竪穴住居跡の北西約7mの地山面で検出したものである。

〔**重複**〕 北壁がCG30ピット、東壁がCH27ピットと重複関係にありそれを切って構築されている。

[平面形] 平面形は、長方形である。規模は、長軸(南北)約2.7m、短軸(東西)約2.5mであり床面積は約6.8mである。南北壁の中点を結ぶ軸線はN-2°-Wである。



- III 134							
146	±.	色	土		性	備	考
1	10Y R 2/2	黒褐土	腐	植	土	土師器片、炭化物を含む	
2	10Y R 2/2	黒褐土	腐	植	土	炭化物を若干含み地山がブ	ロックで入る
3	10YR 3/2	黒褐土	腐	植	土		
2'	10V P 2/2	FE 201 -1-	ISE	£杏	+	岸化物 柚+た今む	

堆積+(P,∼P。)

梅	土	色	土		性	f輔	考	
1	10YR 2/1	黒 色	腐	植	±.	炭化物を含む		
2	10YR 2/2	黒褐色	シ	ル	1	地山のブロック入る		
3	10YR 2/2	黒褐色	シ	ル	1	地山のブロック多量に入る		
4	10YR 3/2	黒褐色	シ	ル	ŀ	炭化物微量含む		

第129図 CH30竪穴状遺構

は、いずれも深さ10~20cmの深皿状を呈しているものである。

〔**年代決定資料**〕 遺構の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、床面出土の須恵器がある。

#### 須恵器

坏(第 130 図  $2\sim4$ ) (2)は、体部が丸味をもって立ち上り口縁部がわずかに外反するもの  $(3\cdot4)$ は、体部がほぼ直線的に外傾するもので底部の切り離しは(3)が回転ヘラキリであり、他は、回転糸切り無調整である。

[**堆積土出土遺物**] 別表の如く土師器の甕の破片が多量に出土した他、須恵器の坏、土師器の坏、縄文土器片が少量出土した。

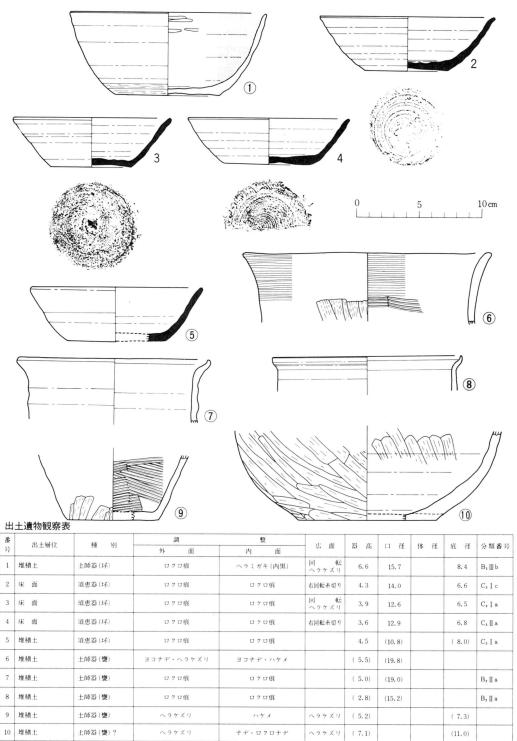
土師器 製作に際しロクロ使用のものである。

〔堆積土〕 3層に分けることができる。1層は、黒褐色の腐植土で住居全体に堆積し、壁際を除く床面に堆積している。又、3層は、壁際に堆積している。

〔壁〕 地山をそのま、壁と しているもので立ち上りも急 である。残存状態は、いずれ も約20cmである。

(床) 床面は、平担で固く、特に、ピットの上面に貼床は認められない。床面に人頭大の川原石が5個散在していた。 [柱穴・カマド] 認められない。

〔その他の施設〕 中央北壁 近くに径約50cm、深さ約44cm の深鉢状の $P_1$ ピットが存在す る。炭化物が上部にわずかに 含まれる以外特に出土物はな い。その他、 $P_2$ 、 $P_3$ のピット



第130図 CH30竪穴状遺構

坏 (第 130 図 1) 体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上り、他に比べて器高が高く径も大きいものである。外面底部近くはヘラケズリされているもので切り離しは回転糸切りである。

**甕** (第 130 図 6  $\sim$ 10) (6)は、口縁部の外反するもの、 $(7 \cdot 8)$ は、口縁部がわずかに外反し口唇部が上につまみだされているものである。(10)は、内外にケズリの施された**甕**或は壺の体部下半がある。

**須恵器**(第 130 図 5) 体部がや、丸味を持って立ち上る底部の切り離しが回転糸切り無調整のものである。

その他、石鏃(第53図)が1点出土している。

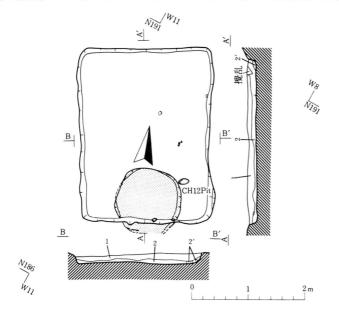
## 26CG12竪穴状遺構 (第 131 図)

〔遺構の確認〕 C調査区の西側、CE12竪穴住居跡の南約3m、CJ18竪穴住居跡の北東約5.5mの地点の地山面で検出したものである。

[重複] 南壁の中央附近がCH12ピット(No.2)の上にかかり、重複関係にある。

**〔平面形・規模**〕 平面形は、長方形であり、長軸は(南北)約3.0 m 、短軸(東西)約2.3 m である。床面積は、約6.9 m である。南北壁の中点を結ぶ軸線はN−10°−Wである。

[堆積土] 2層に分けることができる。1層は、黒褐色の腐植土で、住居内全域に堆積し、



堆積土

層	土	色	土		性	储	考
1	10Y R 2/2	黒褐色	腐	植	土	土師器、須恵器片を含む	
2	10Y R 2/1	黒褐色	腐	植	土	炭化物、土師器、須惠器片	<b>片を含む</b>
2'	10Y R 2/1	黒褐色	腐	植	土	地山のシルトを多く含む	

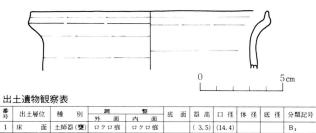
第131図 CG12竪穴状遺構

床面には達していない。 2 層は、黒褐色の腐植土であるが、一部に地山の土が小ブロック状に入りこんでいるもので、炭化物、土器を含み、床面上に堆積しているものである。

〔壁〕 地山を壁としているもので、南壁中央に弧状の張り出し部分が存在する。 残存壁高は、15~20cmであるが、立ち上りは比較的鋭い。

(床) 平担で、固くしまっている。

〔**柱穴・カマド**〕 いずれ も認められない。



[年代決定資料] 遺構の構築及 び使用等の年代を決定する資料と しては床面出土の土師器があるが、 いずれも小破片であり、しかも出 土量が少ない。

第132図 CG12竪穴状遺構出土遺物

#### 土師器

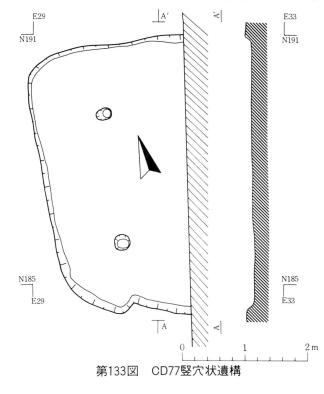
中甕 (第132 図1) 口縁部が外反し、口唇部が強く上方へつまみ出されているもので、内外面ともにロクロナデ整形されているものである。

〔**堆積土出土遺物**〕 堆積土中より出土している土師器の甕の破片は体部の小破片で摩滅の著るしいものが多いが、いずれもロクロ使用のものと推定される。須恵器の坏は、灰白色で軟質である。その他、縄文土器の体部破片、底部破片、磨石(2個)(第55図)等が出土している。

#### ②7**CD77竪穴状遺構**(第 133 図)

〔遺構の確認〕 C調査区の東側、CE68竪穴住居跡の東約5mの地点で調査区外に約1/2がかかる形で検出されたものである。

〔**重複**〕 CE77ピットの一部を切って構築されている。



〔**平面形、規模**〕 全体的には不明であるが、西壁部分は長さ約4.9m、北壁約2.6m、東壁は約2mである。

「壁」 地山をそのまま壁としているが残存状態は、西壁で約10cmであり立ち上りも丸味をもっておるもので壁高も約16cmと浅い。

〔床〕 ほぼ平坦で固い。

〔柱穴〕 西壁の内側約1mの地点に径約25cm、床面からの深さ約50cmの1対のピットが存在する。これが、それに該当する可能性が強い。

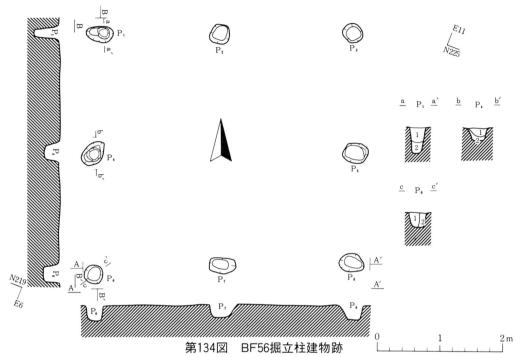
〔堆積土、カマド等〕 不明。〔年代決定資料〕 遺物の出土な

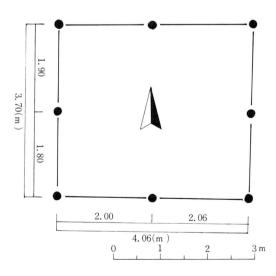
Lo

# (3) 堀立柱建物遺構

BF53堀立柱建物 (第134·135図)

〔遺構の確認〕 B調査区のほぼ中央附近、BF50竪穴住居跡、BD62竪穴住居跡、BG59竪穴住居跡に囲まれた地点で検出したものである。





第135図 BF56掘立柱建物跡模式図

〔規模〕 東西棟2間(約4.06m)×2間(約3.70m)の堀立柱建物である。柱間寸法は、桁行1.80m~1.90m、梁行2.00~2.06m、と若干の差が認められるが、桁行1.85m、桁行2.0mの等間の建物とみてよいものであろう。又、梁行は磁北とほぼ一致し、桁行がそれに直交する形である。

[堀り方] 堀り方は、円或いは楕円に近い 形状を呈しており、特に、柱痕跡は認められない。埋土は、 $1\sim2$ 層の黒色、黒褐色 土で地山のシルトがブロック状に入っているものである。

	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>
堀り方上幅径(cm)	44×28	30×32	30×32	$30 \times 34$	42×32	30×30	42×26	40×32
検出面からの深さ(cm)	42	28	20	20	6	24	16	22

[出土遺物] この遺構と関連するとみられる遺物は出土していない。

# (4) 焼土遺構、周隍状遺構とその他の遺構

# (1) 焼土遺構

BH56焼土遺構 (第136 図)

〔遺構の確認〕 B調査区のほぼ中央、その一部がBH56竪穴住居跡の西壁に切られた形で検出されたものである。

[平面形、断面形] 周辺が攪乱されており、完全な形は不明であるが、主体部は、幅広の楕円形を呈していたと推定される。断面形は、壁面の傾斜が緩く立ち上る深皿状と推定される。

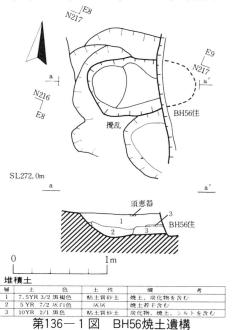
〔規模〕 東側半分はBH56竪穴住居跡に切られており不明であるが、残存部分は、長径約90 cm、短径約60~80cmで深さは、約20cmである。

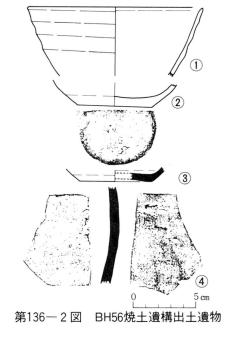
[堆積土] 底面には、灰白色の灰、及び炭化物、焼土の混ったシルトが堆積している。

〔**出土遺物**〕 土師器、須恵器の破片が出土している。完形品はないが実測したものは**坏**3点 と甕の拓影1点である。

土師器 製作に際しロクロ使用のもの。

坏 (第136 図1 ~ 2) (1)は、外傾気味の口縁部、(2)は、回転糸切り無調整の底部の破片で





-246 -

ある。内外面ともに磨滅が著しいが、内面にはヘラミガキされた形跡が残っており、二次加熱 をうけ、内黒処理のとんだものと推定される。

#### 須恵器

坏 (第136 図 3) 回転糸切り無調整の底部の破片である。器面は乳白色で比較的軟質で ある。

甕(第136 図 4) 表面にタテのヘラケズリ痕の認められる甕の破片の拓影である。

# BG50焼土遺構 (第 137 図)

[遺構の確認] B調査区のほぼ中央、BF50竪 穴住居跡の北西コーナーの西約 0.2 m の地山面で 検出したものである。

「**平面形・断面形**」 平面形の開口部は幅広の椿 円形状を呈し、底面形は、中央部分がわずかにく びれダルマ状を呈している。長軸断面形は、一方 がほぼ垂直に掘り込まれ緩かに上る舟形状を呈し ている。

[規模] 長径約1.35m、短径約80~85cm、深さ 約35cm。

[堆積土] 1層は黒色腐植土で遺構の上面に堆 積し底部には達していない。2層は底面に堆積し ている。3~5層は、2層の上にブロック状に堆 積している焼土、炭化物等である。

# (2) 周隍状遺構とその他の遺構

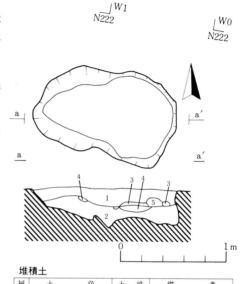
#### IC15周隍状遺構 (第 138 図)

〔遺構の確認〕 I調査区の中央よりや、北西寄り、J区竪穴住居群の北約30mの地点の地山 面で検出したものである。

#### 〔重複〕 認められない。

[**平面形・規模**] 全体として隅丸方形状の周隍であるが、北東隅が切れている。規模は、内 径(南北)約3.80m (東西)約3.80m 、外径(南北)約4.60m 、 (東西)約4.60m である。

[堆積土] 表土からの堆積状況を観察すると5層に分けられ、1・2層は、黒褐色の腐植質 土で、3層は、明褐色の砂質シルト(地山)4・5層は、周隍中の堆積土で砂質シルトの小ブロ クの混じった暗褐色の混土である。特に、周隍の堆積部分の上部は、つきかためられたように 固くなっていた。



焼土、炭化物を含む 第137図 BG50焼十潰構

黒 色

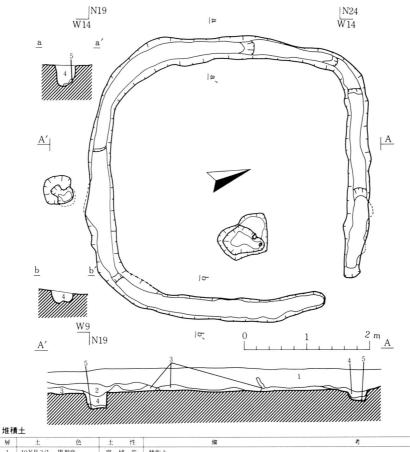
暗黄灰色

10 Y R 2/2 7.5YR 1.7/1

4 7.5YR 4/6 5 2.5Y 4/2 黒 色 腐 植 土 炭化物、焼土を含む 黒褐色 腐 植 土 炭化物、焼土を含む

炭化物

炭化物、焼土を含む



10 Y R 3/1 黑褐色 牒 'n

2 10 Y R 2/1 黑褐色 腐植質 1層に比べて草木根が少ない 7.5YR 5/6 明视色 砂質土 10 Y R 2/2 地山の土がブロックで入る 黑视色 地山の土に黒色土が混じる 10 Y R 3/3

第138図 IC15周隍状遺構

断面形はU字に近い形状を呈し、側壁は比較的凹凸が多い。底面は、一様 〔断面形・底部〕 の深さではなく、浅いところで約3 cm、深いところは約30cmと差があり、随所に段を有する形 態を呈している。

[主体部・その他の施設] 周隍の内側の主体部とみられるところには、不定形のピットが存 在するもの、、特に、意図的な掘り込み等は認められない。

これと関連する遺物は出土していない。 〔遺物〕

注2 [性格] 円形周隍が検出されている例としては白沢遺跡、長沼遺跡、五条丸古墳群、があり 白沢遺跡を除き、古墳に伴う周隍として調査されているものである。これらの形状をみると、 いずれも完全な円形をなさず、一方が開き、U字形(馬蹄形)をなしているのが特徴である。 そこで形態的により類似しているものとしてあげると湯沢遺跡における円形周溝といわれるも のがある。特に、途中1ヵ所が切られている点や、底面の状況が浅い、深いの差があり、凹凸 のあること、段差のあること等かなり共通した点が認められる。しかし、規模の上からみた場 合、前三者についてみると外径が  $8\sim12\mathrm{m}$  、湯沢遺跡においても、 1 基No.10(B C 80)が  $4.3\sim5.5$  m の規模をもつ以外 $11\sim14\mathrm{m}$  と大きいものばかりである。従って、平面的には類似しているもの、規模的には非常に小規模なものと墳丘を伴う遺構としてみるには問題がありそうであり、もし伴うものとすれば例の少い部類に入るものといえよう。

- 注 1 岩手県文化財調査報告書第49集東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 V 昭和55年3月 岩手県教育委員会、日本国有鉄道盛岡工事局
- 注2 「長沼古墳」

和賀町教育委員会(1974)

注3 「猫谷地、五条丸古墳群」

江鈴子村教育委員会(1978)

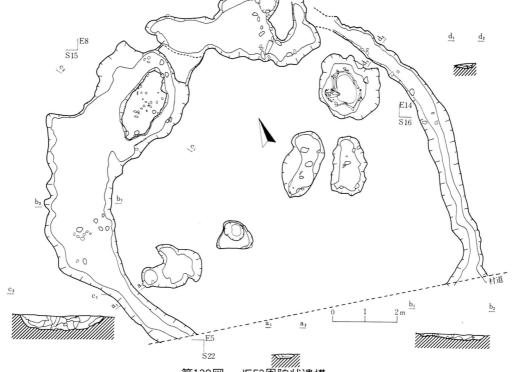
注 4 岩手県文化財調査報告書第32集東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一Ⅲ— 岩手県教育委員会、日本道路公団

# JE53周隍状遺構 (第 139 図)

〔遺構の確認〕 J調査区のほぼ中央附近、JG06竪穴住居跡と東端に位置する10号墳(県指定古墳群)との間の地山面で確認されたものである。

〔**平面形・規模**〕 南側の一部は村道下にあり調査できなかったが、全体的にみた場合、 平面形は、不整円形のものと推定される。規模は、外径で(東西)約13.5m × (南北)約(12)m である。

[断面形・底部] 断面形は、逆台形状を呈し、深さは、西側の最も深いところで約40cmを計るが、他は、20cm前後と比較的浅い。側壁は、西側が、出入りの多い幅広に対して東側は比較



第139図 JE53周隍状遺構

的出入りの少い溝状を呈している。底面は、北半に凹凸のあるところが多い。

[**堆積土**] 溝中の堆積土は、細かく観察すると8層にもなるが2層に大別される。1層は、 黒褐色土、2層は暗褐色土で、他は、いずれも地山のシルトがブロック状に混じっているもの や、ブロックそのものである。

**〔主体部・その他の施設**〕 周隍内側の主体部とみられるところには、大小5個の不整形のピットが存在する。そのうち、P.は、馬が埋葬されていたものである。

[明治27年代かき中に病死した馬を埋葬したものである。 高橋タマ氏 (当時88歳談)]

その他のピットは、いずれも皿状の浅いものであり、特に人為的な面は認めがたいものである。 「**潰物**〕 特になし。

HG06マウンド状遺構 (第 140 図)

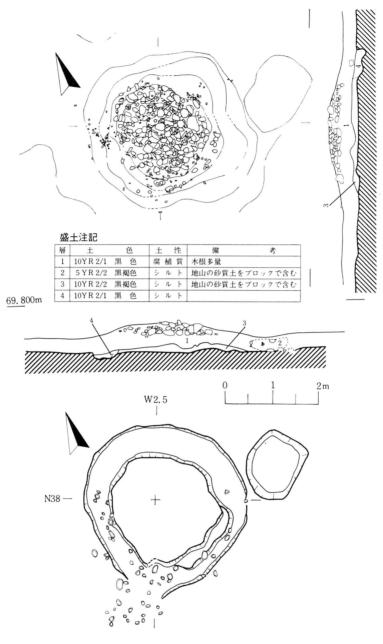
[遺構の確認] H調査区のほぼ中央、IC15周溝状遺構の北東約15mの地点に存在したもので、自然提防上で発見されたものとしては最も北に位置するものである。

〔規模・形状等〕 現状の大きさは、底部の直径が約3.2 m、高さが約0.65mで、低い土饅頭状を呈していたものである。中央部の一番高い所を中心に径約2.2 mの範囲に径35~10cmの大小の川原石が乱雑に積まれており、特に下方に比較的大きい石が多い。盛土は、地山面直上に地山の黄色砂質土をブロックで含む黒褐色土が最高10cmの高さでみられた。その上は黒色の腐植質土である。

[周溝] 幅50~60cm、深さ約15cmの南方が切れている馬蹄形状の溝が発見されている。

[遺物] 盛土とみられる上面より、土師器の破片2片と縄文土器片が出土しているがいずれ も磨滅の著しいものである。

【性格】 地山面より検出された馬蹄形状の周溝をみると、そこに何らかの人為的作為が働いていると考えることができるが、盛土を観察した場合、特に、マウンド状に盛ったものかどうか疑しい面が残る。しかし、周溝のみの形態をみた場合南方が開く馬蹄形の周溝としては、西注2 方に位置する五条丸古墳群、和賀町長沼古墳、矢巾町白沢遺跡等でもみられるものである。次に規模の面でこれらの遺跡のものと比較してみると、いずれも径が8~12m、深さが20~130cmであり、当遺跡のそれに比較して規模の大きなものばかりである。更には墳丘としてみた場合隣接する猫谷地古墳群の最も小規模な5号墳を例にとってみても直径7.5m、高さ0.83mである。それと比較しても小規模な点ではかわりがない。従って遺物や主体部と推定されるものがないこの遺構について、形態、規模の上から推定しても墳墓が存在したとするには、疑問が多すぎる。上部の積み石は、周辺に散在する川原石を単に積み上げたものとする他に、古墳の石室部分が破壊した川原石である可能性もなくはない。しかし現状においては周溝と盛り土との関係からみて古代の遺構とするには無理な点が多い。



第140図 HG06マウンド実測図

注1 「猫谷地、五条丸古墳群」

江鈴子村教育委員会 (1978)

注2 「長沼古墳」

和賀町教育委員会(1974)

注3 岩手県文化財調査報告書 第49条 東北新幹線関係埋葬文化財調査報告書-V-昭和55年3月 岩手県教育委員会、日本国有鉄道盛岡工事局

# KE15小ピット群 (第 141 図)

〔遺構の確認〕 K調査区の西側ほぼ中央附近、西から東に走るKE24溝の壁面中より発見したものである。

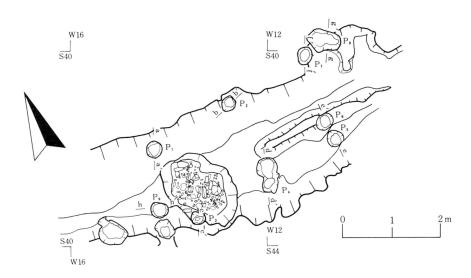
[重複] 西から東に走るKE24溝によって上面が削平されたものと推定される。

**『平面形・規模**』 平面形は、 $P_1 \sim P_s$ までの9個のピットの中 $P_s$ が楕円状を示す他ま、ほぼ円形のものである。断面形は浅い、深いの差はあるがほぼU字状を呈している。

	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P4	$P_{5}$	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>
径 (cm)	34	31	31	74×32	36	32	34	72×40	36
深さ(cm)	36	32	32	36 · 22	32	34	52	20	24

# 〔性格〕

これらのピットは、一見規則的に並列しており $P_1 \cdot P_2 \cdot P_7 \cdot P_5 \cdot P_4 \cdot P_3$ を結ぶと1間(180cm)  $\times$  2 間の掘立柱建跡とも考えることも可能であるが決めてに欠ける。





第141図 KE15小ピット群実測図

## AH18溝状遺構 (第7図)

[遺構の確認] 調査区の最北端、A区の国道107号線沿いの地山面で検出したものである。

[重複等] 西端は攪乱、南東端は調査区外に延びるため不明である。

[形状・方向] 断面形は底部がや、丸いがV字状に近いものであり、側壁、底面等にはあまり凹凸はみられない。溝は多少の出入りあるが西より東へ走っており、調査区の東端附近で緩かに南東へカーブし調査区外へ出ている。西端と南東端の比高は約60cmである。

[規模] 現存長は、約45.8mで上幅は90~50cm、下幅は70~20cm、深さは50~20cmである。

〔**堆積土**〕 溝部分の堆積土は、細かくは3層に分けられるが、黒色のシルト1層である。一部炭化物が徴量含まれるところも存在する。

〔出土遺物〕 特になし。

# KE24溝遺構 (第8図)

[遺構の確認] 調査区の最南端、K区中央附近の地山面で検出したものである。

〔重複等〕 KA06竪穴住居跡の南壁の上部を切って西から東へ走っており、その他、KE15小ピット群の一部を削平している。

[形状・方向] 断面形は、深さ20cm前後の深皿状を呈している。溝は西から東へ走っており 北南差は47cmである。側壁には、大小のピットがあり凹凸が比較的多い。底面には、西半部分 にピット、礫が入りこんで変化が多く、東半は平担である。

[規模] 現存長は約48m、上幅は約3m~1.2m、下幅は約0.20~0.50mとかなりの差がある。

**〔性格**〕 ほぼ、村道と並行して西から東へ走っており、それぞれ西、東ともに調査区外に延びており、底面には、水酸化鉄の沈澱等もみられるところから比較的新しい時期の水路と推定されるものである。

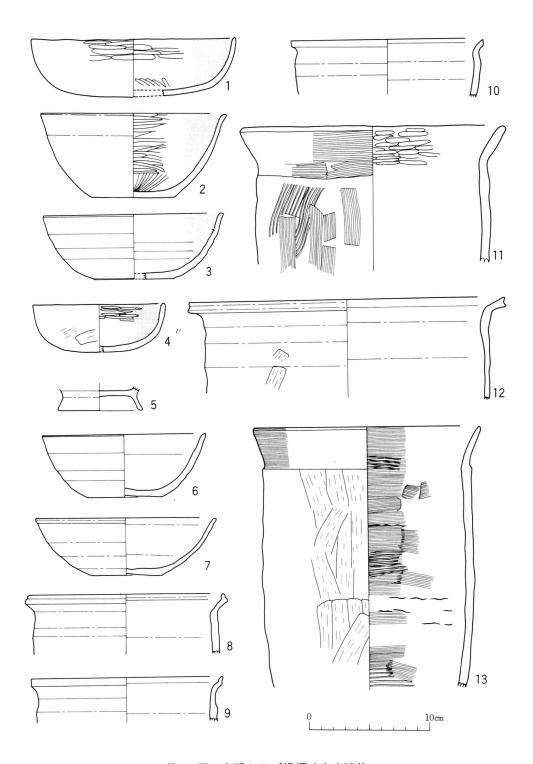
## 表採および粗掘時出土遺物 (第142図)

遺構に関連する遺物については既述の通りであるが、こ、で、遺構に直接関連のないものについて一部とりあげておく。

#### 土師器

坏(第  $142 \boxtimes 1 \sim 7$ )( $1 \cdot 4$ )は口縁部が内湾気味に立ち上る丸底のものである。外面には一部ミガキがみられるが摩滅しているところが多い。内面は、ヘラミガキされ黒色処理されている。いずれもロクロ未使用のものである( $2 \cdot 3 \cdot 6 \cdot 7$ )は口縁部が内湾気味に直立する底径に比べて器高の高いロクロ使用の坏であり(2)は内面ヘラミガキ黒色処理されている。他は、回転糸切り無調整のものである。(5)は、高台付の台部である。

**甕** (第 142 図 8 ~13) (11・13) は、口縁部の外傾するロクロ未使用のもの、他は、口縁部が短く外反し、口唇部が上部につまみ出されているロクロ使用のものである。



第142図 表採および粗掘時出土遺物

# (5) 考察とまとめ

#### 1 遺構(第7・8図)

本遺跡で検出された古代関係の遺構は、竪穴住居跡24棟、竪穴状遺構3棟、掘立柱建物跡1棟、焼土遺構2基、周溝状遺構3基、溝遺構2条、小ピット群、マウンド状遺構1基である。これらのうち竪穴住居跡、竪穴状遺構を除いてはそれぞれのところで既に大略まとめているので、ここでは前者についてのまとめと若干の考察を加えることとする。

# A. 竪穴住居跡・竪穴状遺構

〔**形態と構造**〕 完全な形或いはそれに近い形で検出された23棟と竪穴状遺構2棟を含めた25棟についてみることとする。

(a) 平面形・規模 そのほとんどが方形を基調としたものであるということがいえる。即ち住居における長辺と短辺の割合をみると長辺が短辺より20%以上長い例は2例にすぎず、これは全体の10%にもみたない。他は、ほぼ同じか10%内外の差しかみられない。このことは、平面形が正方形に近いプランを呈していることを物語っているといってよいであろう。又、住居のコーナーについてみても比較的丸味を帯びているとみられるもの(多分に感覚的なものも入るが)は、全体の約25%であり、このことからも隅丸方形というよりは正方形に近い平面形(掘り込み面)を呈していたものであるといえよう。この傾向はおおよそ時間差に関係なくいえるようである。

次に、規模の点についてみると一辺が 2.5m~12m と大きな差があるが床面積の面から比較すると以下のような 4 グループに分けることが可能である。(第143図)

- (1) 15㎡以下 (一辺2.5m~4 m以上) 10. (CE68. CF24. CJ18. CF56. DA24. BG59. DB09. CI53. CH30. CG12)
- (2)  $20\text{m}^2 \sim 30\text{m}^2$  ( $-3\cancel{D} 4\text{m} \sim 5.5\text{m}$ ) 10. (CF15. JG27. CH74. DA62. CJ50. BH56. CE12. BF50. CB03. BH12)
- (3) 35m²~40m² (一辺 6 m~ 7 m 前後) 4. (KA06. JG06. BF21. BD62)
- (4) 100m以上(一辺10m以上) 1. (JJ24)

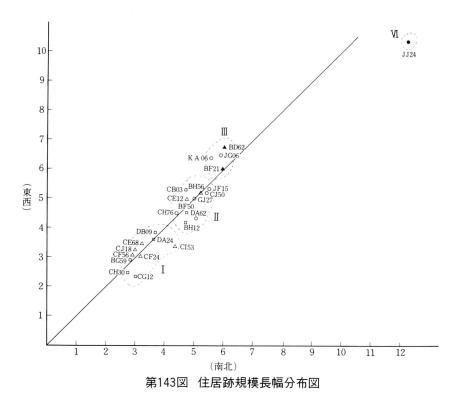
以上の結果から住居の変遷を考慮に入れて規模についてみると次のようになる。

1つはCH74、DA62、CJ50のグループで一辺が $4\sim5.5$ mの3類に属する広さの住居のみで構成され、そこにはあまり差が認められない。

次に、南の自然堤防上に立地する一群をみると一辺が10m以上の大形住居JJ24を核として、 2、3類の比較的大~中形の住居群で構成されているということがいえる。

更に段丘上の住居群をみると比較的大形の住居(BF21)を核としてそれに小形住居が付随する1群と、比較的大形の住居(BD62)を中心として中、小形住居でもって構成する1群がある。

以上絶対数としては、やや資料不足の感はまぬがれないが、全体的な傾向としては古期においては、比較的住居の広さに差が現われないのに対して、時期が下るにつれて、1棟の大形住



居を核として、中、小形住居が存在する傾向がみえる。しかも、それが時代が下るにつれて、 核になる住居及び、それらに付随する住居も小形化してくる傾向にあり、猫谷地においても、 一般的な傾向に対しては例外でないことを示しているものといえよう。

- (b) **壁** 壁は、すべて地山をそのまま壁としているもので、一部の削平、攪乱等を除けば、 比較的残存状態の良好なものが多い。又、縄文時代の土壙等の切り合い関係にある壁面におい てその部分に特に補修・強化した形跡が認められないことは、単純なことではあるが、これら の堆積土が壁を構築する際に支障のない状態であったことを意味するものであろう。
- (c) 床 床面についてみると3つのタイプに分けることが可能である。

A ········・地山 (掘り込み面) をそのまま使用 CH74. DA62. CJ50. JG06. CE68. CF24. BD62. CF56. しているもの·························CI53. BF50. DB09. CH30. CG12. CE77. DC12 (16棟)

B ··········貼床を全面に施しているもの·········JJ24(?).KA06.JG27.JF15.CJ18.BH56 (6棟)

C ··········· 貼床を部分的に施しているもの······BG59.CE12.BF21.DA24.CB03 (5棟)

以上の結果からみるとAタイプが全体の6割弱であり、掘り込み面をそのまま生活面として使用しており床面下に縄文時代の土壙が存在するものでも壁面の構築と同じく、特に、手を加えずそのまま使用しているもののようである。

次に、貼床を一部あるいは全面に施しているものがそれぞれ約2割存在する。その中でBタ

# 第13表 住居跡一覧表

通 備名   平面
進 様 名 平面形 (城市) (城市) (城市) (城市) (城市) (城市) (城市) (城市)
遺 構 名         平面形         規(東西)         構造化         カマド輪線           CH74住居跡 方 形 4.50         4.40         19.8         (N - 16 <sup>7</sup> - W)           DA62住居跡 か 8.50         4.34         5.08         22.05         (N - 43 <sup>7</sup> - W)           CJ 50住居跡 か 6.5         5.20         5.40         28.0         (N - 62 <sup>7</sup> - W)           JC06住居跡 か 6.5         5.20         5.9         38.4         (N - 17 <sup>7</sup> - W)           JF15住居跡 か 6.5         5.9         38.4         (N - 17 <sup>7</sup> - W)           JS74住居跡 か 6.5         5.0         5.0         25.0         (N - 20 <sup>7</sup> - E)           JJ24住居跡 か 7         6.42         5.56         35.7         (N - 20 <sup>7</sup> - E)           JJ24住居跡 か 8         6.05         5.95         37.0         (N - 20 <sup>7</sup> - E)           JJ24住居跡 か 8         6.05         5.95         37.0         (N - 20 <sup>7</sup> - E)           JJ24住居跡 か 8         6.05         5.95         37.0         (N - 20 <sup>7</sup> - E)           JJ24住居跡 か 8         6.05         5.95         37.0         (N - 20 <sup>7</sup> - E)           JJ24住居跡 か 8         6.05         5.95         37.0         (N - 20 <sup>7</sup> - E)           BD62住居跡 か 7         8         6.8         0.0         0.0         0.0           CJ18住居
遺構名         平面形         規         税         有         力           CH7住居跡         方 節 (南北)m         底面積m         (1)           DA62住居跡         方 形 4.50         4.40         19.8         (1)           DJA62住居跡         *         4.34         5.08         22.05         (1)           JG06住居跡         *         5.20         5.40         28.0         (1)           JG06住居跡         *         6.5         5.9         38.4         (N)           JG27住居跡         *         6.5         5.9         38.4         (N)           JG27住居跡         *         6.5         5.9         38.7         (N)           CF24住居跡         南丸方形         3.55         3.0         10.1         (N)           CF34住居跡         *         6.8         6.0         3.5         3.0         (N)           CF34住居跡         *         5.2         3.2         11.2         (N)           CF34住居跡         *         6.8         6.0         3.6         (N)           CF34住居跡         *         5.2         3.2         10.1         (N)           CF34住居跡         *         *         5.2         2.7         (M)
遺 構 名         平 面 形         規 (東西) (南北)m           CH74住居跡 方 形 4.34 5.08         4.34 5.08           CJ50住居跡 (5.20 5.40         5.20 5.40           JG06住居跡 (5.20 5.0         5.20 5.40           JG27住居跡 (6.5 5.9         5.3 5.5           J34住居跡 (6.05 5.95         5.0           J34住居跡 (7.20 5.0         5.0           BF21住居跡 (7.20 5.0         3.5           BB24住居跡 (7.20 5.0         3.5           CF34住居跡 (7.20 5.0         3.5           BB3 (4.20 5.0         3.5           CF34住居跡 (7.20 5.0         3.5           CF34住居跡 (7.20 5.0         3.5           CF34住居跡 (7.20 5.0         3.1           CF36住居跡 (7.20 5.0         3.1           CF36住居跡 (7.20 5.0         3.1           CB34住居跡 (7.20 5.0         3.1           CB34住居跡 (7.20 5.0         3.1           BC36住居跡 (7.20 5.0         3.0           BC36 4.6 <t< td=""></t<>
遺 構 名         平 面 形         規 (東西) (南北)m           CH74住居跡 方 形 4.34 5.08         4.34 5.08           CJ50住居跡 (5.20 5.40         5.20 5.40           JG06住居跡 (5.20 5.0         5.20 5.40           JG27住居跡 (6.5 5.9         5.3 5.5           J34住居跡 (6.05 5.95         5.0           J34住居跡 (7.20 5.0         5.0           BF21住居跡 (7.20 5.0         3.5           BB24住居跡 (7.20 5.0         3.5           CF34住居跡 (7.20 5.0         3.5           BB3 (4.20 5.0         3.5           CF34住居跡 (7.20 5.0         3.5           CF34住居跡 (7.20 5.0         3.5           CF34住居跡 (7.20 5.0         3.1           CF36住居跡 (7.20 5.0         3.1           CF36住居跡 (7.20 5.0         3.1           CB34住居跡 (7.20 5.0         3.1           CB34住居跡 (7.20 5.0         3.1           BC36住居跡 (7.20 5.0         3.0           BC36 4.6 <t< td=""></t<>
遺構名     平面形       (東西)       CH74住居跡     カ 形 4.34       CJ 50住居跡     5.20       JG06住居跡     5.3       JG27住居跡     6.4       JJ24住居跡     内 大形     10.4       BF21住居跡     カ 形     6.6       CJ 18住居跡     カ 元     5.0       CF24住居跡     内 力 形     3.3       BD62住居跡     カ 形     6.8       BH56住居跡     カ 形     5.2       CF36住居跡     カ 形     5.2       BC56住居跡     カ 形     5.2       BC56住居跡     カ 形     5.2       BC56住居跡     カ 形     5.2       BC56住居跡     内 形     5.2       BC56住居跡     カ 形     5.2       BC56住居跡     内 形     5.2       BH12住居跡     カ 形     2.5       BH12住居跡     カ 形     2.3       CH30壁六状     カ 形     3.9       CH30壁六状     大     3.9       CH30壁六状     大     3.9       CH30壁六状     大     3.9       CH30 野木     3.9     3.9
遺 構 名         平面形           DAG2住居跡         *           CJ50住居跡         *           JG06住居跡         *           JG27住居跡         *           JJ34住居跡         *           JJ34住居跡         *           JJ34住居跡         *           JJ34住居跡         *           BF21住居跡         *           CF34住居跡         *           BD62住居跡         *           CF56住居跡         *           BH56住居跡         *           CF34住居跡         *           BH56住居跡         *           CF34住居跡         *           CF34住居跡         *           BH56住居跡         *           CF34住居跡         *           CF34住居跡         *           CF34住居跡         *           BF50住居跡         (隔丸方形           DA24住居跡         (偏丸方形           BG59住居跡         (一部前十2           BH12住居跡         方           BH12住居跡         方           CH30整六状         長           CH30整六状         長           CH30整六状         長           CH30整六状         長           CH30整六状         長
進 株 名

イプ6棟のうちで、自然堤防上に位置する住居群は、1棟を除き貼床が認められている。これは、この時期の住居の構造の一つの傾向性としてとらえることもできる。一方、この住居の立地する地層をみると、シルト層が比較的薄かったり、場所によっては欠除しているところもあり、礫層が高い位置にあるというような地質的な面がかなり影響しているものとも思われる。

最後に、Cタイプについてみると、カマド前における貼床(CE12)、南半1/2のみの貼床(BF21)等の部分的な貼床の他に、壁沿いに長楕円状の浅い掘り込みをつくり出し、それをシルトと黒褐色土とシルトの混土で埋め戻したとみられる状態のものも存在する。このことは、時期的には比較的新しい時期に属すると思われる住居にみられるが、これが、そのまま、その時期の特色としてあげられるかは少し疑問が残る。ただ、CE12、BF21は、縄文時代のピットと関係したための貼床、礫層が上っているための地質的な面の制約があったための貼床とも考えられる。しかし、壁沿いのそれは、その様なこととは関係なく、当初よりある程度排水的な面を考慮したとも考えることは無理があろうか。これは、時期的には、本遺跡においては最も新しい時期に属するだろうと思われる住居に存在することからも、それを一つの傾向性としてあげてもよいものであろう。

(d) 柱穴 検出された27棟の竪穴住居跡、竪穴状遺構のうち、柱痕が残存したり、その形跡が明確なものはないが位置、配置等からそれと推定したものが存在するものは13棟である。そのうち、4個が明確に柱穴と推定される住居跡は8棟である。柱穴の配列状況についてみると、その位置の違いにより大きく二グループに分けられる。

A ……対角線上に位置するもの……KA06. JG06. JF15. TG27. BF21. (JJ24)

B ·······対角線上の位置より若干一方向に片寄る······BD62. CE12. DB09. (BF50). (CB03)

A タイプは、いずれも壁よりほぼ等間隔の位置に 4 本存在するが、JG06においては、建て替 , え或いは拡張が推定され、又、J J 24においては、その規模から推定して副柱の存在したことも充 分あり得ると考えられる。

一方、Bタイプは、それぞれ片寄りに特徴が認められる。即ち、BD62は南側の柱列が若干西により、菱形状の配列を示し、CE12においては、柱穴が南西に、BH56は東に、BF50は北にそれぞれ寄り、DB09においては、南壁際まで寄る。

次に、規模と柱穴との関係をみると、一辺が4m以上のものは必ず柱穴が存在し、4m以下の小規模な住居跡には認められないものが多くなる。これは、上屋構造や居住空間等の関連で考えなければならないものであろう。

時期的な面からみると最も古いと思われるCH74を中心とする3棟には柱穴が認められず、 自然堤防上のJJ24を中心とする一群には基本的に4本認められる。又、段丘上の一群で自然堤 防上のそれより新しい時期のものは、4m以下の小規模のものには認められない。 (e) カマド 検出された27棟のうち全貌が明らかにできなかった DE77を除く26棟について まとめると、およそ次のようなことがいえる。

A…カマドの存在しないもの—CH74. DA62. CJ50. CH30. CG12.

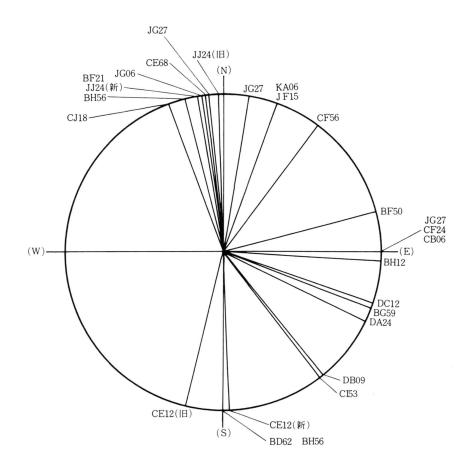
B…カマドの存在するもの一上記の住居を除く全ての住居(但し、完全な形での残存はない)

# (1) 付設場所

その付設された場所により下記のように3つのグループに分けることができる。

I類 北壁に位置するもの ( )内は磁北に対するカマドの主軸の振れ(第144図)

- 1 北(10°以内)······JG27. JJ24(旧·新). JG06. BF21. CE68.
- 2 北西(20°以内)······CJ18. BH56(旧).
- 3 北東(20°以内)······JG27(新). JF15. KA06.
- 4 北北東(30°以上)…CF56.



第144図 カマドの主軸方向分布図

## Ⅱ類 東壁に位置するもの

- 1 東北東(70°)··············BF50.
- 2 東(90°∼110°)········JG27(新). CF24. CB03. BH12.
- 3 南東(110°以上)······· DC12. BG59. DA24.

#### Ⅲ類 南壁に位置するもの

- 1 南(180°~190°)············ BD62. BH56(新). CE12(新).
- 2 南東(140°前後)······· DB09. CI53.
- 3 南南西(190°以上)……CE12(旧).

カマドが当初北壁に付設されたものが全体の約48%、東壁が33%、南壁19%であり北壁付設の住居が過半を占めている。又、西壁付設の住居が1棟もない。更にその位置関係についてみた場合、北壁の場合は、CF56を除いては北壁中央に位置しているものがほとんどである。南東壁の場合には、東壁中央というのはCF24のみで他はいずれも北に寄った位置に付設され、南壁の場合は中央に位置するものがなく東或いは西に寄っているという傾向性が認められる。又、住居内における新旧関係からみたカマドの移動状況をみると、傾向としては付設位置より右廻りの位置即ち、北→東→南というような位置移動関係が認められるようである。又、集落間のカマド位置の変化をみると、大きくは時期により北壁→南壁→東壁という変遷をたどることがみうけられる。

#### (2) カマドの構造

検出されたカマドの残存状態から推測すると3つのタイプが認められる。

- A. シルトで構築し両側壁の先端には立石が存在し、かけ口の石として長楕円の川原石をのせて門状に焚口を構築していたと推測されるもの。燃焼部内に支脚石が2個存在するが、石のかわりに土器の底部を伏せた形にした支脚が存在するものもある。…JG27.JJ24.KA06.JG06.JF15.DB09.
- B. 両側壁をシルトで構築し、芯材として川原石或いは土器を使用している。…CE68. BH56. BG59. CJ18. CI53. この場合川原石は両側壁の下の床面に埋め込み立石させて芯としている。
- C. シルトで構築されているもの…BF21. CF56. DA24. BD62. CE12. CB03. BF50. BG59. A、Bタイプのカマドは、上部削平などにより明確でないものも存在するが、煙道部はいずれも壁をくりぬきトンネル状、或いは半地下式の溝状を呈し規模は150cm前後のものが大半である。 C タイプは半地下式のものや煙道部の短いものが増加する傾向があるようである。

A タイプは DB09を除き J 区自然堤防上に位置する住居に普遍的にみられる構築方法であり その時期におけるカマド構築の 1 つのパターンを示しているものである。又、両側壁の構築に あたってはJG27のように版築状の構築が認められたり壁の保護に土器片を使用したり、かなり構築にあたり手を加えている様子が認められる。

Bタイプにおいては、いずれもAタイプを有する住居よりは新しい時期の住居に多く、特に割合からみると自然堤防上の住居に後続する時期と思われるものに比較的多いことは、カマド構築法の変化が時の変化とも一応対応していることを示すものと思われる。それがCタイプになるとより、新しい時期のものに多くみられ、燃焼部が壁外に一部張り出す形のものもみられるなど、時と共にカマド構築法が変化している様子が認められる。即ち、猫谷地遺跡においてはA—B—Cのカマド構築法の変化が大きな流れとしてとらえることができるもののようである。最後になったがカマドをもたない住居の中で特にCH74、DA62、CJ50のこれらの住居においては、床面中央近く或いは、南辺、東辺近くに人頭大の川原石が数個かたまって存在しており、その位置や周辺に小さなピットが存在する(石を据えた後とも推定できる。)こと等から床面の焼け面の存在など多少不明確な点も認められるが炉跡が存在したことも考えられる。

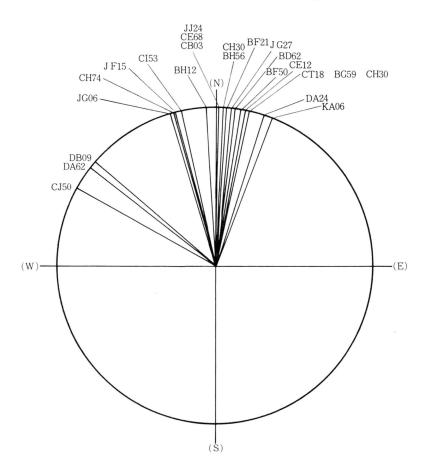
# (f) その他

住居内の施設としてその他に認められるものに一般に貯蔵穴状ピットといわれる皿状或いは深鉢状のピットが存在するが、本遺跡の住居についてみると、明確に貯蔵穴状ピットといわれ「何らかの物の貯蔵に使用された」とみられるピットはほとんどない。ただ、その位置や、形態から、それと類似のものであろうと思われるものが2、3存在する。その1つはCI 53住居跡のカマド右側の径70×60cm、最大の深さ約30cmの深鉢状ピットで、この中からは外面に他に比べてススの付着が多い甕が3個体出土している。又、CB 03住居跡のカマドの右脇に径60×34cm、深さ約20cmの深皿状のピットがある。その他には、BH 56住居跡の旧カマドの左側に存在する深皿状のピット、CE 68住居跡の旧カマドの右側に存在する袋状のピット等がそれに該当するものと思われる。これらは、一部土器片の出土はあるにしても何を貯蔵したかを証明するものは出土しておらず、貯蔵穴状ピットについての性格、位置づけは資料の増加に待つほかないと思われる。

この他に、特殊なピットとしては、ピット中央に一段低い小ピットがある「ロクロピット」といわれるピットに類似するものがDC12住居跡の床面より検出されている。この住居は削平のため全体が明確にできなかったものであるが、カマドのつくりが他に比べて特殊な面もみうけられ、あるいは、他の住居と異った性格の住居とも考えられるが推定の域をでない。

おわりになったが、カマドの位置とは関係なく南北壁の中点を通る軸線が磁北からどの程度の振れを示しているか計測しそれをまとめてみたのが第145図である。これによると本遺跡の住居は2つの方向にまとまっていることがいえる。1つは磁北を基準としてそれぞれ西、東へ約20°の偏りを示す20棟の住居群と、西へ50°~62°の偏りを示す3棟の住居群である。このこと

は、約9割にあたる住居がほぼ南↔北方向を向いているということを示しており、地形の立地 状況により違いはあるとは思われるが、日照や風向など気候条件を考慮した場合、現代におけ る家屋の配置条件と類似した面をもっていることは興味深いことであると考える。又、ほぼ北 西↔南東を向く3棟のうち2棟は最も古い時期に属する住居であることは、このことからすぐ には時期差やその時期の家屋の配置の特色としては片づけられないものとは思われるが、カマ ドをもたない住居の立地の一面を表わしているものかもしれない。



第145回 住居跡主軸方位分布図

# 2 出土遺物

#### A. 出土土器の分類

本遺跡の調査では、縄文土器をはじめとして土師器、須恵器等多量の遺物が完形あるいは復 元可能な形で多量に出土した。その中で、縄文時代に関係するものは既述してあるので、ここ では、土師器、須恵器を中心に述べることにする。

なお、分類にあたっては、器種ごとに、その成形や焼成技法、再調整技法や器形上の特徴な どから細分している。

本遺跡で出土した土器の器種には、坏、高坏、甕、壺、長頚壺、甑、鉢、土堝、片口土器、 手揑ね土器、蓋、などがある。これらのうち出土量の少ない鉢、長頚壺、土堝、蓋、片口土器、 手揑ね土器、等は特に分類を行わない。

「坏」 坏は製作の際のロクロ使用の有無及び焼成方法の違いによって大別される。

坏A類 ロクロ未使用のもので酸化炎焼成のもの

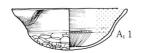
B類 ロクロ使用のもので酸化炎焼成のもの

C類 ロクロ使用のもので還元炎焼成のもの

[坏A類] 坏については、口縁部、底部の形態の違い、体部と底部との境の段の有無等いろ いろな要素の組合せによる分類(記号化)が可能であるが、ここでは、それらの諸要素の組み合 せ関係を考慮しながら特徴をまとめて分類すると次のようになる。

- A<sub>1</sub>類 口縁部が外反或いは外傾気味に立ち上り底部との境に段を有し、対応する内面にくび れの認められる丸底 (1) 丸底のもの (2) 平底風のもの
- A.類 口縁部が外傾気味に立ち上り底部との境に変換点(稜)を有し内面にくびれの認められ る丸底
- A<sub>3</sub>類 口縁部が内湾気味に立ち上り底部との境に沈線状の段を有する丸底
- A4類 口縁部が内湾気味に直立する丸底
  - a. 段を有するもの b. 無段のもの
- As類 口縁部が開き気味に外傾し、底部との境にわずかに変換点が認められ内面にくびれの ある丸底
- A<sub>6</sub>類 口縁部は外反するが体部は変化なく内湾して底部に至る丸底
- A<sub>7</sub>類 口縁部が内湾気味に立ち上る丸底
  - a. 形式的な段が認められる b. 無段のもの
- A<sub>8</sub>類 口縁部が強く内湾して立ち上る平底風の丸底
  - a. 形式的な段の認められるもの b. 無段のもの {①口径に比して器高の浅いもの ②口径に比して器高の深いもの
- A。類 口縁部が外傾気味に立ち上る平底のもの

				坏(A類)分	}類基準表	
		口縁部の形態	段の有無	内面のくびれの有無	底部形態	調整技法
	A <sub>1</sub>	外反、外傾気味	有	有。	1. 丸 底 2. 平底 風	口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリ、 は、ヘラミガキ、ヘラミガキのもの。内に はヘラミガキ、黒色処理されている。
	A <sub>2</sub>	外傾気味	変換点(稜)	有	丸 底	内外面ともにヘラミガキ、内面は黒色処理 されている。
1	A <sub>3</sub>	内湾気味	沈線状	無	丸 底	内外面ともにヘラミガキされ、内面は黒 処理されている。
7	A,	内湾気味に直立	a. 有 b. 無	無	丸 底	外面はナデ後ヘラケズリされ、内面はヘ ミガキ、黒色処理されている。
1	As	開き気味に外傾	変換点(稜)	有	丸 底	外面は、ナデー部ミガキ、又はハケメを のまま残すものもある。内面はナデ又は ラミガキ、内黒、非内黒の両者あり。
ŧ	Α,	外 反	無	無	丸 底	外面ナデ、ヘラミガキ、内面はヘラミガ され、黒色処理されている。
Ħ	Α,	内湾気味	a. 形式的b. 無 段	無	丸 底	内外面ともにヘラミガキ、内黒処理され いる。
	A <sub>8</sub>	強く内湾	a. 形式的b. 無 段	有	丸 底	内外面ともにヘラミガキ、内黒処理されいる。
	A,	外傾気味	無	無	平 底	内外面ともにヘラミガキ、内黒処理され いる。

















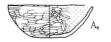












			坏(B類)分類基準	表		
		器面調整技法	底部の切り離し調整の有無	器高と底径の	関係	体部~口縁部形態
П	В	内面ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り 底部周辺及び底部手持ちへ ラケズリ	I 器高低く、度 - (5cm以下) (5.		
ク	В₂	内面ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り 底部周辺及び底部回転ヘラ ケズリ	- (3cm以下) (3. - Ⅱ 器高低く、原		a. 直線的に外傾
口使	Вз	内面へラミガキ・黒色処理	回転糸切り・無調整	(5㎝以下) (5.5		b. 下半にふくらみを持: 内湾気味に立ち上る
用	В	内面へラミガキ・黒色処理	切り離し技法不明	■ 器高高く、底		I WANTER OFF
	В	無 調 整	回転糸切り・無調整	(5㎝以上) (	6㎝以上)	(赤焼き土器)
		B <sub>1</sub> Ia	B₁ III a			$B_{t}I$
		B <sub>i</sub> Ib	B <sub>2</sub> <b>  </b> a		B <sub>3</sub> Ia	$B_1I$
		B,II	b	$B_{s}$		$B_{s}$

[坏B類] 器面の調整技法、底部の切り離し技法等の違いにより細分することができる。

- B<sub>1</sub>類 内面へラミガキ、黒色処理されており、底部の切り離しは回転糸切りのもので、底部 周辺及び底部が手持ちヘラケズリされているもの
- B₂類 内面へラミガキ、黒色処理されており、底部の切り離しは回転糸切りのもので、底部 周辺及び底部が回転へラケズリされているもの
- $B_3$ 類 内面へラミガキ、黒色処理されており、底部の切り離しは回転糸切りで再調整のない もの
- B<sub>4</sub>類 内面へラミガキ、黒色処理されているが、底部の切り離し状態が不明のもの
- B<sub>5</sub>類 内外面調整なく、黒色処理のない、底部の切り離しが回転糸切りのもの(赤焼き土器) これらは、更に、器高と底径の関係から3類に分類することができる。
- I類 器高が低く、底径が大きいもの (器高 5 cm以下のもの・底径5.5 cm以上のもの)

Ⅲ類 器高が高く、底径も大きいもの (器高5cm以上のもの・底径6cm以上のもの)

又、底部から口縁部にかけての形態から (a) 直線的に外傾するもの (b) 下半にふくらみを もち内湾気味に立ち上るものの 2 つに細分することができる。

[坏C類] 器形の特徴、底部の切り離し技法や再調整の有無等から細分することができる。 まず、底部の切り離し技法と再調整の有無から3つに分類することができる。

- C<sub>1</sub>類 回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリされているもの
- C<sub>2</sub>類 回転ヘラ切りにより切り離され再調整のないもの
- C<sub>3</sub>類 回転糸切りにより切り離され再調整のないもの

更に、底部の特徴から ① 平底のもの (Ⅱ) やや丸底風のもの、の二つに細分され、器形の特徴からは、底部から口縁部にかけて (a) 直線的に外傾するもの (b) 下半にふくらみをもち内湾的に立ち上るもの (c) 下半がわずかにふくらみ直線的に立ち上り口唇部が外反するものの3 類に分けられる。

	坏(C類)分類基準表								
類	底部の切り離し技法と再調整	底部形態	体部~口縁部形態						
С1	回転へラ切り後、手持ちヘラケズリ	工平 底	a. 直線的に外傾する						
C <sub>2</sub>	回転ヘラ切り後、再調整なし	↑ 1 十 広	b. 下半にふくらみをもち、内湾気味に立 ち上る						
C <sub>3</sub>	回転糸切り、再調整なし		c. 下半がふくらみをもち、直線的に立ち 上り口唇部が外反する						
	$C_1$ Ia	$C_2$ [a	$C_2$ Ib						
	C <sub>2</sub> [[ a	C,Ia	C <sub>3</sub> Ib						
		C³Ic	C <sub>3</sub> [[a						

[甕] 甕は製作の際のロクロ使用の有無及び焼成のちがいにより大別される。

甕 A 類 製作に際しロクロ未使用のもので酸化炎焼成のもの

甕B類 製作に際しロクロ使用のもので酸化炎焼成のもの

甕C類 製作に際しロクロ使用のもので還元炎焼成のもの

[**甕**A類] 器高からその分布をみた場合最大35cm~最小11.5cmまで広範囲に分布することから、まず器高により三大別した。その結果は次の通りである。

			甕(A類)分類基準表	
		全体的な特徴	口縁部の特徴	口唇部の形態
	$\frac{{\overleftarrow{A_1}}}{{\overleftarrow{A_1}}}$	長胴で肩部に段を有するもの □径≥体部径 長胴で肩部に段の無いもの □径≥体部径 球胴で肩部に段を有するもの	a. 大きく外反する	1. 単純にまるめ特に変化のないもの 2. 口唇部が上方へつまみ出され、内
東 用	中	口径 ≤体部径 球胴で肩部に段の無いもの 口径 ≤体部径	b. 直立気味 ゆるく外反する	側に稜のあるもの 3. 上方へつまみ出され、口唇部がう すくなっているもの
		同上		
		A, I al	A, II a 1	A <sub>1</sub> II b1
		A <sub>1</sub> IIb3		A, IV a 1
		$A_1$ $V$ $b1$	Ial A <sub>2</sub> Ibl	$A_{2}$ $A_{2}$ $A_{3}$ $A_{4}$ $A_{5}$ $A_{6}$ $A_{6$
		A <sub>2</sub> [[   b2]	A,IIal	A,Ibl

A<sub>1</sub>類 大形で器高が25cm以上のもの(大甕)

A<sub>2</sub>類 中形で器高が15~25cm以内のもの(中甕)

A<sub>3</sub>類 小形で器高が15cm以下のもの(小甕)

これらの甕について形態の上からみると口縁部≧体部最大径、口縁部<体部最大径の2種に分けることができ、前者は、おおむね長胴であり、後者は球胴のものといえる。又、これらは肩部に段を有するものと段の無いものとがあり、これらの要素を組み合せると4類に細分できる。但し、中・小甕においては絶体数が少ないことから上記の組み合せの無いものも多く、又、小甕においては c、d 類は皆無である。

Ⅰ類 長胴で肩部に段を有するもの

Ⅲ類 球胴で肩部に段を有するもの

Ⅱ類 長胴で肩部に段の無いもの

IV類 球胴で肩部に段の無いもの

更に、口唇部の形態から (a) 口縁部が大きく外反、外傾するもの (b) 口縁部が直立気味にゆるく外反、外傾するものとに分けられ、口唇部の特徴を加味すると、(1)単純にまるめて特に変化のないもの、(2)口唇部が上方へつまみ出されていて内面に稜を有するもの、(3)単に上方へ薄くつまみ出されているものに細分できる。

器面調整は、外面がヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面は、ヨコナデ、ナデ、ハケメ、ミガキと、ともに多くの手法を組み合せているものが多い。その中でもハケメの技法のものが多いのが目立つ。底部は木葉痕そのままのものが多いが、中央部がへこみ、周辺のみヘラケズリしているものや、全体をヘラケズリしているもの等も存在する。

[**甕B類**] 器高の関係から、A類と同じく3大別した。但し、A類に比べて復元資料が少なく、口径との関係から器高を類推したものもあり多少難点があることはいなめない。

B<sub>1</sub>類 大形で器高が35cm以上のもの(大甕)

B<sub>2</sub>類 中形で器高が15~25cmのもの(中**甕**)

B₃類 小形で器高が15cm以下のもの(小甕)

口縁部と体部最大径の関係からみると口縁部<体部最大径のもの、即ち、球胴スタイルのものは認められず、いずれも長胴スタイルのものだけである。そこで、口縁部や口唇部の形態から次のように細分される。

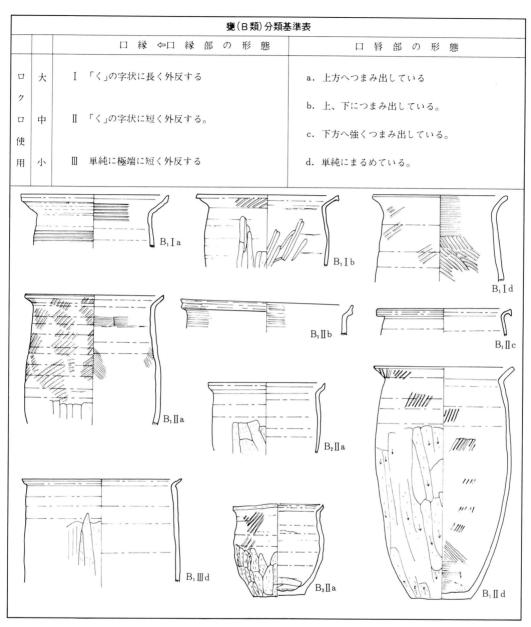
Ⅰ類 「く」の字状に長く外反する。

Ⅱ類 「く」の字状に短く外反する

Ⅲ類 単純に短く外反する

これらは、口唇部の形態から、(a)上方へつまみ出しているもの(b)上下につまみ出している もの、(c)下方へつまみ出しているもの、(d)単純にまるめているものに分けられる。

器面調整は、内外面ともにロクロナデが主体であるが、外面には、叩き目が認められるもの、



叩き後ロクロナデの認められるもの等がある。又、内外面ともに、ロクロナデより多少目の粗いハケメ状のものによるとみられるナデも認められる。底部の調整は判然としないものが多い中で、ヘラケズリにより調整されているものが目立つ程度である。

[**甕**C類] 復元資料も少なく細分するだけの点数もないので特に分類は行わない。復元できたものはそのほとんどが器高20~25cm前後のもので、それ以上大きなものと推定されるものは1点のみで、他は破片だけである。

[高坏] 高坏は脚部のみのものを含めて12点出土したが、器形の特徴から3類に分けけることができる。

- A類 坏部は、体部が強く外傾し口縁部も直線的に外傾しているもので、体部と口縁部の変 換点に角がつくものである。脚部は中空で円錘台状を呈し、坏部に比べて高い器高を 有し、裾部は更に外方に開いているものである。
- B類 坏部は、体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上るもので外面に段を有し対応する 内面にはくびれのみられるものである。脚部は、坏部に比べて低く、坏部底面より直 接そり気味に外方に開くものである。全体的器形が「X」字状のものである。
- C類 坏部は、体部から口縁にかけて内湾気味に立ち上るもので外方に軽い段を有するものと、みられないものがある。脚部は、いずれも坏部底面より外方に開くものであるが脚部の特徴より2つに細分できる。

Ⅱ 脚部がそり気味に開くもの Ⅲ 脚部が内湾気味に開くもの

〔**高坏の製作技法**〕 A類の高坏の製作技法を剝離面等から観察すると、当初、円錘台状の脚部を作成し、それに坏の体部を取付け、更に、外傾する口縁部分を付着させ成形したもののようである。

器面調整技法は、坏部外面はハケメ後にヘラミガキがなされ、内面はハケメ、ナデ後やはり ヘラミガキがなされている。脚部外面は縦方向のヘラミガキがなされ、裾部分はハケメ後ヘラ

			高坏。	分類 基 準 表	
	類	坏 部 ♂	) 特 徴	脚 部 の 特 徴	器 面 調 整
ロク	А		直線的に強く外傾 変換点に角がつく	中空で円錘台状、裾部は外方。 開く、脚高は高い	へ 朱塗あり ハケメ後ヘラミガキ ハケメ後ヘラケズリ
口未	В	.,	ト傾気味 有 段	脚高低く、坏部低面より直接 方へ開く	外 内面黒色処理 ヘラミガキ ョコナデ
使用	С		内湾直立気味 有段・無段あり	I 脚高低く、外方へそり気□ 脚高極端に低く「八の字状	処理なし
	A.		A	В	CI

ミガキが施されている。又、内面は棒状のものでおさえたシボリメのような痕がみられる。 坏部と脚部の接合部分はハケメ後ヘラケズリがなされている。1点は坏部内面に朱塗りが施されていたものと思われるものである。

B、C類についてみると底部を高台状に引き出した坏部と、脚部とを別個に作成し、それらを接合し内外面よりナデて成形している。時として脚部内面に粘土塊を加え押圧して接合している場合もみられる。なお、極端に脚部の低いものは直接坏部より引き出しているもののようである。器面調整技法は、坏部は内外面ともにていねいなヘラミガキがなされ黒色処理しているのが一般的である。又、坏部と脚部の接合点は縦方向のヘラミガキやヨコナデが認められる。脚部はヨコナデでととのえられているものが多く、中にはヘラミガキがなされているものも認められる。

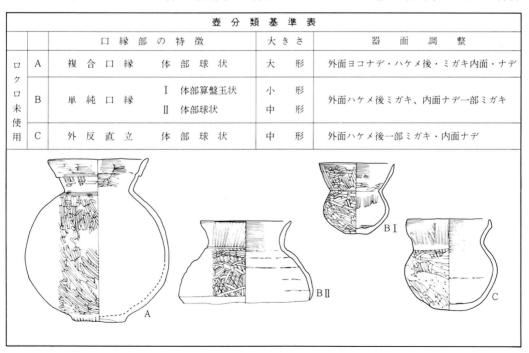
〔壺〕 11点出土している。完形或いは復元可能なものは3点と非常に少ない。ロクロ未使用のものとロクロ使用のものがあるが、ロクロ使用の長頚壺は完形もなく個体数も少ないので特に分類は行わない。ロクロ未使用のものは、口縁部や体部の特徴から3類に分けられる。

A類 複合口縁を有するもので体部が球状のもの

B類 単純口縁を有するもの

C類 外反直立するもので体部が球状のもの

これらの中でB類は、口縁部が外傾気味で体部が算盤球状のもの(I)と外反気味のもので体部



が球状に近いもの([[)とに分けられる。

器面調整は、外面はハケメ後ヘラミガキが主体をなし、内面はナデが主体的である。底部は 上げ底状のもの、丸底状のものとがある。

〔**甑**〕 8点出土しているが、底部の破片のみで器形の不明なものが3点存在する。底部の特徴から2類に分けることができる。

A類 底部に6~7穴の孔を穿っている多孔式のものである。器形は、口縁部が外傾し体部 もほぼ直線的に外傾している逆台形に近い器形のものと、口縁部が外反し体部から底 部にかけて丸味を持つものがありいずれも最大径が口縁部にあるものである。

B類 無底式のものである。底部の特徴から2類に細分することができる。

【類 底部横に細孔を有するもので、口縁部が外反し体部がわずかに膨む長胴形である。

■類 底部に細孔等のないもので、口縁部が緩かに外反し体部に段を有する深坏形、同じく口縁部が外反し体部から底部にかけて直線状に底部に至る甕形のものがある。

**〔甑の技法**〕 A 類の底部は外部より棒状のもので内面に向けて穿孔したもので、底部は後で接合した可能性がある。一方、B 類のものは器形が特殊で当初より甑としてつくられたものではなく再利用されたと考えた方がよさそうなものである。

器面調整は、それぞれ多少の差はあるが外面はハケメ後ミガキ或はヘラミガキ、内面はナデ ヘラミガキが一般的である。

			甑 分 類 基 準 表	
		底 部 の 特 徴	口縁部~体部の特徴	調 整 技 法
ロクロ	A	多孔式	外 傾     直線的       外 反     内湾的	ヨコナデ・ヘラケズリ ヨコナデ・ハケメ
未使用	В	無底式 I 横に細孔あり Ⅲ 細孔なし	外 反	ヨコナデ・ケズリ ハケメ後ケズリ
		A A	G BI	BII

〔**手捏ね土器**〕 4点出土している。小量の粘土塊を指で圧して丸底の小形の坏状につくった もので部分的に指によるナデがみられる。

[片口土器] 2点出土している。ロクロ未使用のもので体部から口縁部にかけて内湾する最大径が体部上半に位置する鉢形で、口縁部の一部を両側から内側に圧して注口部をつくり出しているものと、小形の坏形の口縁の一部にやはり注口部をつくり出しているものとがある。器面調整は、前者はハケメ後ヘラミガキが主であり、後者はナデである。

〔筒形土器〕 1点出土している。口縁部を指で圧した痕のある平縁の円筒状のもので、巻き上げ痕が明瞭に残っている。外面に、わずかにケズリ痕が、内面にナデが認められる。焼成つくりともに粗雑である。

〔**鉢**〕 6点出土している。製作に際し、ロクロ未使用のものとロクロ使用のものとがある。ロクロ未使用のものは、体部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上り口縁部がわずかに外傾する小形甕類似のものと、甕の下半部と同じ器形で椀形に近いもので、ロクロ使用のものは、口縁部が短く外反し、口唇部が上下に引き出されており最大径が体部中半~上半にある口径に比べて器高の低いものである。いずれも完全なものはない。

〔土堝〕 2点出土している。ロクロ使用のもので口唇部が上下に引き出され、口縁部が短く 外反する口径の大きい堝状のもので器形の判明する1点は、底部が上げ底状になっている。

器面調整は外面下半を雑なケズリ、内面はナデで仕上げている。

[高台付坏] 2点出土している。製作に際しロクロ使用のもので、1点は、内面をヘラミガキ、黒色処理しており、底部を回転糸切り後、高台付着の際菊花状に底部をナデッケている。高台部の一部が欠失している。器形は内湾気味に口縁に立ち上り、口縁部がわずかに外反する。他は、須恵器で高台部の剝離痕を有する底部である。

[長頚壺] ほぼ器形の判明するもの2点である。口縁部が頚部に比べてやや開き、肩部の張りが強く底部にかけてややすぼまる器形と推定される。底部のある1点は、完全な上げ底のものであり、外面に自然釉がみられる。いずれも須恵器である。

[蓋] 1点出土している。皿状につくり口唇部を内側に曲げのばして縁辺部をつくり出した もので、回転糸切り痕がつまみ部分になるところに認められる。つまみ部は不明である。調整 技法はつまみ部にあたる周辺にわずかにケズリが施されているのみである。須恵器である。

#### B. 土器以外の出土遺物

[和銅開珎] 4枚出土している。完全なもの、完全に近いものが各1枚、他は破片で、いずれも銅銭である。これは、奈良時代に政府が鋳造したわが国最初の貨幣で、銀銭、銅銭の2種類存在する。初鋳年代は一般的には和銅元年(708年)とされ、当初銀銭が鋳造され、少しおいて銅銭が鋳造された。養老4年(720年)に鋳造技術の改良をはかり、新しい型の和銅開珎が造ら

れるようになった。その中で、銀銭は、鋳造後1年余りで鋳造廃止となり、そのために期間としても、量的にも少ないといわれる。それに比べて銅銭は、万年通宝、開基勝宝、大平元宝等の鋳造される天平宝字4年(760年)まで50数年間にわたって造られ、その鋳造量も多いものである。奈良時代の銭貨は、その後延暦15年(796年)に平安時代の通貨隆平永宝の鋳造まで他には加わるものはなかった。そして、これらの通貨の流通は延暦19年(800年)とし、それ以後廃止された。しかし、実際には、それ以後も通用したものとみられる。

次に、和銅開珎の流通面からみると、政府は銭貨の流通を盛んにするために、銭貨に有利な交換価値を与えたり、官人の季禄の大半を銭貨に切りかえたり、蓄銭により官位の昇任を行うなど、その価値を認めさせるための諸政策を実施した。しかし、これが奈良時代になると、官吏の蓄銭という悪幣につながり流通が妨げられることになった。これらは、当時の主として中央における様相であり、地方においては、一部の中央からの官吏や地方の有力者が叙位の目的で蓄財したり、授位、賜物とし中央より銭貨を得ていることなども考えられ、およそ、流通とは程遠いものであったと思われる。

〔土鍾〕 37点出土している。いずれも、中央部に最大径を有する紡錘形を呈するもので長さ5.2  $cm\sim4.1cm$ 、孔径は $0.3\sim0.4cm$ 、最大径 $1.8\sim2.2cm$ のものである。重量は $12.9g\sim17.9g$ である。

[砥石] 9点出土している。平面形は、短形、バチ形、棒状、板状と数の割には多様である。 多くは、断面形が長方形を呈しているが、2点だけ円形のものが存在する。これらは、面の両 端あるいは一端のみが使用されている10cm内外の小形のものである。

〔**紡錘車**〕 9点出土しており、内2点は石製品であり他は土製品である。断面形は、台形、 又は半円形状を呈しているものである。

〔**鉄製品**〕 鉄斧1点、刀子の一部と推定されるもの4点、鎌の一部と推定されるもの2点、他は釘の一部とみられるもの1点である。

## C. 堆積土中の粉状パミス (火山灰)

検出された住居跡の堆積土中には部分的ではあるが粉状パミスの堆積が認められたものが存在する。この場合、上部の削平状況によって同じ1層とした場合でも堆積水準が異なることになるが、ここでは、住居の堆積状況をそのまま記すこととする。

CH74住居跡……1層上部に小ブロック状 KA06住居跡……1層の中央付近

CE12住居跡……2層中にサンドイッチ状 BD62住居跡……1層、2層の間に小ブロック状

DC12住居跡……1層中に小ブロック状 BH12住居跡……1層中に小ブロック状

CI53住居跡……住居の中央やや西よりにレンズ状に床面近くまで堆積

以上のうち、DC 12住居跡の粉状パミスについては、後章の「東北地方における奈良~平安時代遺跡埋土中の粉状パミスについて」(井上克弘、山田一郎)を参照されたい。

## B 遺構出土土器の共伴関係 (第14~16表)

前項においては本遺跡出土土器を中心に分類し、あわせて堆積土出土土器についても可能なかぎり分類した。第16表は、図示遺物の個体数を表わしたものであり、分類の結果から各住居跡の共伴関係と遺構間の組み合わせについて表わしたのが第14表である。この場合少し繁雑になったが堆積土出土遺物の様子についても表わしている。

以上の結果をもとにして、各遺構間の土器の共伴関係や遺構内における土器の類似性等についてみていくこととする。この場合、より遺構の構築時期や使用時期の下限を示すものと考えられる床面およびカマド内、ピット内等遺構に密着した形で出土したものを中心に考え、堆積土出土遺物については、補足的なものとして考えることにする。

そこで、共伴関係組み合わせ表より住居跡間の出土土器の組み合せを比較検討してみると、 次のようないくつかのグループに分けることが可能である。

[第Ⅰ群] ロクロ未使用土器の坏が全く見られず、このグループのみに見られる高坏A類、壺A類や甕A、IV類、壺BI類よりなる一群で、住居によっては鉢が加わるもので、全体として器種、数量ともに少ない。これらに該当するのはCH74、DA62、CJ50の各住居跡である。

[第Ⅱ群] ロクロ未使用土器だけで構成され、勿論須恵器も共伴しないもので、坏Ai、A₂類、甕AiIa、AiIb類、AiIIb類、AiIIa類、甑A・B類を主体とし、坏A₃、A4、A6、A6類や甕AiIIa、AiIIIa、AiIIIa、AiIIIa、AiIIIa、AiIIIa、AiIIIa、AiIIa、AiIIa、AiIIa、AiIIa、AiIIa、AiIIa、AiIIa、AiIIa、AiIIa、AiIIa、Ai

「第Ⅲ群」 ロクロ未使用土器を中心とし、まだロクロ使用土器 B 類の共伴のないことは II 群と同じである。しかし坏や甕の構成の面で II 群とは大きく異なる。即ち、坏A<sub>7</sub>類、甕A<sub>1</sub> I a 類を主体に構成され、住居によっては坏A<sub>8</sub>類、甕A<sub>2</sub> II a、A<sub>3</sub> III b 類の他、高坏C 類、甑 B II 類や手捏ね土器を含み、まれに須恵器の大甕が共伴する一群である。特に甕の場合は口唇部の成形に II 群と比較して異なりが認められ、2・3 群のものが多くなるのが特徴である。

これらに該当する住居跡としては、BF21、CE68、CF24住居跡があり、遺構出土土器としては小甕(A₃類)の他、甕の底部だけの出土であるが、堆積土中より坏A₁、A₄、A₅類、甕A₁ Ia、A₁ IIa、A₁ IIa 類等の出土しているCJ18住居跡も、遺構内よりロクロ使用土器の出土していないことや堆積土中の出土土器の型式等を考慮に入れると、このグループに該当するものと考えてよさそうである。

[第Ⅳ群] ロクロ未使用土器A類の共伴が少なくなり、ロクロ使用土器B類および須恵器C類が主体をなす一群である。主として坏B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>類、甕B<sub>1</sub>I、B<sub>1</sub>II類、坏C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>類等で構成され

ており、それに少ないながらも甕 $A_1$  Ia、 $A_1$  IIa、b、 $A_2$   $IIb_1$ 、 $A_3$  IIa 類等のロクロ未使用の甕や、住居によっては坏 $A_7$  類が含まれ、又、坏 $B_5$  類等もみられる一群である。これらは坏の構成関係に多少異なりが認められるので 2 群に分けた。

 $\mathbb{N}-\mathbf{a}$  群  $\cdot$   $\mathsf{F}$   $\mathsf$ 

〔第Ⅴ群〕 遺構出土土器としては、ロクロ未使用のA類土器が全く含まれない一群である。即ち坏B₃類、甕B₁Ⅲ類が主体をなし、住居によっては坏B₂類や鉢、土堝、須恵器の甕が僅かに共伴し、坏C₃類は堆積土中より出土しているが、遺構関連の遺物としては出土していない。

これらに該当する住居は、BF50、BG59、CB03、DA24、DC12、BH12の各住居跡であり、BH12住居跡には坏B₅類が共伴している。なおCG12竪穴状からは甕B₂類のみの出土であるが、堆積土中の遺物等の関係から一応このグループに入れてもよいものであろう。

以上、共伴関係を中心として本遺跡の出土土器を5群に分類し、その結果をまとめたものが 第15表である。

# C 出土土器の問題点と位置づけ

#### 〔第 [ 群土器〕

この群の土器は、ロクロ未使用のA類のみで、器種は球胴甕、壺(坩)、高坏、鉢の4種である。坏が共伴していないこと(堆積土中からはそれらしい破片の出土はあるが)と器種、出土量ともに少ないことなど共通する点が多く、これは土器セット関係云々というよりは、遺構の遺存状況の悪さに起因するところが大であり、本来的には坏をも含めて一つのセット関係を構成する一群であろう。

土器の特徴をみると甕の場合、口縁部の直立する下膨れ気味の球胴、壺は複合口縁の球胴の もの、口縁部が体部に比べて長く外傾し、体部が算盤玉状を呈するもの等がある。高坏は坏部 口縁部と底部との境に角がつき、口縁部が強く外傾している。脚部は坏部に比べて高く、下方 に円錐台状に開き、裾部が外反気味に開くものである。

このような特徴をもった土器の一群としては、東北南半における土師器の第 Ⅱ 型式 (南小泉式)をあげることができるが、南小泉式の一括資料を出土した岩切鴻巣遺跡第 Ⅲ 群土器と強い類似性を有しているものが多い。その中でも壺E Ⅱ 類、高坏C 類等に共通する面が認められ、球胴の甕としたものは壺C 類に類似しているといえる。又、清水遺跡における第 Ⅲ 群土器高坏

# 第14表 出 十 遺 物 組 み 今 サ

Δ

								第14	4表	出	土	· 道	量物	勿言	組	み	合	せ										馬出 <u>:</u> 1土出:				遺構堆 遺構			破片)													
分 類			坏		Α																	变						A													Ī	高坏	$\top$	古	<u>\$</u>	Т	飯	鉢片口
	A <sub>6</sub> A <sub>5</sub>	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub> A	, A	4	A,	A <sub>8</sub>	A,		A <sub>1</sub> I	[			A <sub>1</sub>	П		A <sub>1</sub>	Ш			A <sub>1</sub> IV				A <sub>2</sub> I				A <sub>2</sub> [[			A₂ [[		A	, I			A	, II			В С	A	В		C A		PF/11-
住居跡									a		b		a		b		а			a		b		a		b		a		b		b		a		b	ž.	a		b		I	_	I			I II	
1) OHRAGE		1 2	2	a	b a	b	a b	_	1 2	3 1	1 2	3	1 2	3	1 2	3	1 2	2 3	1	2 3	3 1	2	3 1	2	3 1	2 3	1	2 3	3 1	2	3 1	2 3	1 2	2 3	1	2 3	1 2	2 3	1	2 3								
<ol> <li>CH74住居跡</li> <li>DA62住居跡</li> </ol>		-					-	-				-											_																					0	Δ			0
③ CJ 50住居跡								_				_									0	)	+				+				-		_								0		1					0
④ J G06住居跡	0	•	0							(	0				0		0						+		0		-				+		-		0						0	Δ	0	10		-		
5 J F15住居跡				0				(	0						Ö				0		Δ		0				1				+		+				_		0		-	Δ	+				С	-
6 J G27住居跡		0	0						0																0						$\top$												+			0	0	
<ul><li>7 KA06住居跡</li><li>8 JJ24住居跡</li></ul>		0	0 0	0	_				0		2		<u></u>				0		0										0										0			Δ				0 2		C
9 BF21住居跡	0	0		0		0	0 0	_	0		<u>)</u>				0		0		-				_				-								Δ							0 0			0 (	0	0	С
① CE68住居跡						0	0 0	0		0	<u> </u>	-							-	•	<u> </u>						0				+				0								0					
D CF24住居跡						Ö						$\neg$					_			_	_		+				+				+	-	-						-			0	+			+	C	
② CJ 18住居跡		•		•											•	•	•								0		1				+	•	)		0								+			+-		-
3 BD62住居跡																																					0						_			+		
BH56住居跡										0						0													0						7				777				$\top$			1		
⑤ CF56住居跡 ⑥ CI 53住居跡								-				_											_						•	0																		
7 CE12住居跡						0	-	-		0		-	0			-							-				-				_																	
BF50住居跡								_				$\rightarrow$				-							_				+				-		-										+			-		
CB03住居跡																_							_				+				_												+	_		+-		
DA24住居跡																											_				_											-	+			+		
DC12住居跡										11111																																	+		-	1		
BG59住居跡 BH12住居跡								_			12.1																																					
DB09住居跡								-				-											_				_																					
5 CH30竪穴状								_				-				-		-					-				-				_								Δ									
® CG12竪穴状																							+				1																+			-		
			坏		В						whe																																					
分 類	В,		В,			В,	B <sub>4</sub>	D			变 B <sub>i</sub>		В		D.	I D		-			t T	坏		С			大	要畫	長 頸	新錘	土砌	鉄 古製品 銭																
		шь т	a Ib IIs	шь				_	. T1	тэп		п т	T ) III)	m )	В,		鉢 場	-	C,		-	C,	_		C,		奨		蛮	車 貧	雖 石	品线																
主居跡	та ша	шот	а то ша	шь.	alu	поп	Пр Тр	1	ать	Iq II	а Пр	ПС	ја Шр	Ща	Id IIa	a II a	7111	1	_	II	+-	II	_	I		П	-						4															
CH74住居跡		_		-			-							-				a	a	b с	a	ь	c a	ь с	c a	b c		-					1															
DA62住居跡		_		-			+	+						-		+	-	+			-		+				-						-															
CJ 50住居跡														-				+			+		+				-						+															
JG06住居跡								•													+		_										+															
JF15住居跡																																	1															
J G27住居跡				_			$\perp$																									0																
KA06住居跡 JJ24住居跡		-		-			++	-						_				-						_							0																	
BF21住居跡		+		-			++	+						-		-		-			-		-	•			<u>A</u>			0	0		4															
CE68住居跡				$\rightarrow$			+							-				-			+-		+-,	A A			0			0_		0	-															
CF24住居跡							$\top$							$\neg$		+		+			+		+-									0	4															
CJ 18住居跡																					T																											
BD62住居跡	00	0	00					•					)	1	0	0		0	(	)	0		0	0			<b>A</b>	0	•	•			1															
BH56住居跡		_		_			-	0	_		•					Δ							0				<b>A</b>	<b>A</b>	0	(		•																
) CF56住居跡 ) CI 53住居跡		-		-			++		0						_			-			-		_																									
CE12住居跡			)	-			++	_		• 0	)	-	)	-			^	-	0	0	-		0										-															
BF50住居跡					•					•				-		_	Δ ()	+	0		-		-				•				0		-															
CB03住居跡						•		-					-100	_		_	<u> </u>	+			+		+			<u> </u>	<b>A</b>			0		0	-															
DA24住居跡		1	5		•	_				C	)	Δ		0	•	_	0				+		+				_	0		•		•	1															
DC12住居跡		•											Δ	-													_						1															
BG59住居跡				•	0	(	C	0																			_	0			)	0																
BH12住居跡				- 1			1 13				^												-					_					1															

0 A 0

00

•

② BH12住居跡

② DB09住居跡 ② CH30竪穴状 ② CG12竪穴状

〈出土土器の組合せ〉 第15表 环

赤焼き土器 B 5 B5 퐲 • 長額壺 雞 器 雞 大獲 4 惠 C, Ia · C, Ia C, Ila · C, Ib C, Ilb · (C, Ic) C, Ilc 浜  $(C, Ia \cdot b)$ な (C, Ia) (C, Ib) (C, Ic) (C, Ib) 出疆 林 4  $\widehat{\mathbb{H}}$ B, Ia · (B, Id)
B, Ib · (B, Ilb)
B, Ila
B, Ild
B, Ild
B, Ild
B, Ild 便 麗 B, ∏a B, ∏b B, ∏c B, ∭b B, ∭d (B, ∭d 1 B, Ia · (B, Ib)
B, Ib
B, IB
B, IIb
R, IIb
(B, IIb)
(B, IIb)
(B, IIb) 0) )内は堆積土出土 环 B, Ia B, IIa B, IIa B, Ia B, IIb 器 手捏ね 上口 禁 A-BI-II 題 ВП 部 BII·C  $A \cdot BI$ 骿 田  $CI \cdot II$  $B \cdot CI$ 高环 A 庚  $\begin{matrix} (A_1 \parallel A_3) \\ (A_2 \quad b3) \\ (A_1 \parallel a1) \end{matrix}$ He +A, ∭al A, Nal 举 甕 1 A, Ial
A, Ia2
A, Ia2
A, Ia3
A, Ib1
(A, Ib1)
(A, Ib3)
(A, Ib3)
(A, Ib3)
(A, Ib3)
A, Ib1
A, Ib1
A, Ib3 H A, Ia3 A, Ila2 A, Ilb3 A, Ilb1 A, Ilb2 A, Ial A, Ibl 政  $A_11 \cdot A_2 \cdot A_4$   $A_5 \cdot A_6$   $(A_12)(A_3)$ A<sub>7</sub>a A<sub>7</sub>b A<sub>8</sub>a A<sub>8</sub>b A<sub>9</sub> (A<sub>1</sub>1) (A<sub>4</sub>a) 环 A,b第Ⅴ群 第Ⅳ群 排 I 排I 排Ⅲ 無 無 無

	<del></del>	9	3	3	16	10	11	13	33	19	12	2	15	23	21	7	7	20	12	14	16	2	∞	6	∞	7	-
数	領惠器								Θ	1	2			8	4 ©		3	2	3	9	$\Theta$		1 ②	9	4	3	Ī
*	土師路													6	<b>4</b> ⊖	2	_	@ &		•	5	2	3	2	-	(9)	-
围		3	33	3	13	9	8	11 ②	28 •	17 ①	10	2	3	_	3	9	3	9 2	9	_					33		
· · · ·	74							_						1 (2)	-				Θ	1	-		1	Θ			
	長頭帝														Θ					1							
EXE	糊																		高坏1		$\Theta$						
丧	ス								$\Theta$		2			8	3		8	2	2	(2)			(2)	4	4	3	
須	数														⊛			$\Theta$		•			1	3			
***	大 寒	(							•	-					•			$\Theta$		•		•					
	垣																				2						
(H	高台环																						1				
クロ使用)	*																	1	•	$\Theta$							
0)	***													4	1			1	4	1 3	8 4	-	2	-		$\Theta$	
師器	長間難い													1	1												
+1	長間繁田													1 ②		1								-		3	
	長脂麴田	3													2	1	-	9	-		3 (2)	Т			1		
	手捏ね上咒小				(2)					4																	
	井口 土民							-	1																		
(H)	**	-	-																								
口不使用	(1)						1	-	1																		
(0)	題(正明)	(1)			2		2		1		1																
878	恒	<del>-</del> ⊖	-	-	2		2 2	Т	2	1	1																
	, <b>½</b>				3	- 0		1 2	9	∞	2	1	(6)														
距	報	2		2				-	8																		
	松 胆 紫	€ 🕣	-		-	2		-	3		-		(6)												-		L
+1	長脂類。	5				-		-		2		-	1 8	-											2		L
	長間独出	È		×		2	-	-							Θ	- Θ				-							
	<b>東</b> 東 野 王	3			23	8	m	8	& 	- 0	ıs		2		8	8	3	- 0									
	#  記   <b>注</b>	CH74住居跡	DA62往居跡	CJ 50住居跡	JG06住居跡	JF15住居跡	JG27住居跡	KA06往居跡	JJ24住居跡	BF21住居跡	CE68住居跡	CF24住居跡	CJ 18住居跡	BD62住居跡	BH56住居跡	CF56住居跡	CI 53住居跡	CE12住居跡	BF50住居跡	CB03住居跡	DA24住居跡	DC12住居跡	BG59住居跡	BH12住居跡	DB09住居跡	CH30竪穴状	
	往田縣	1	2	8	4	2	9	7	∞	6	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	

Ⅱの中にも一部類似性の認められるものが存在する。ただいずれの場合にも、本遺跡で鉢とした小型の土師器が存在していない点で多少の異なりがみられる。しかし大勢としては、器種、器形、技法等の点からみて、これらは南小泉式併行のものとみてよいものであり、編年表における第Ⅱ群に位置するものである。

### 〔第Ⅱ群土器〕

この群の土器もロクロ未使用A類の土器群で、器種としては坏、高坏、甕、壺(坩)、甑、 片口土器からなるものである。特徴をまとめると、坏は20cm前後の比較的大型である。丸底で 底部との境に段を有するものが主体で、ほかに、これより多少小型の口縁部が外傾、外反する 丸底等がある。調整技法は段から上がヨコナデ、底部ケズリ、同じくヨコナデとミガキ、ミガ キとミガキ等のものが存在する。

要は、長胴で大~小の各種存在するが比較的中型が少ないのが目につく。器形的には大型ほど肩部有段のものが多い。体部最大径は口縁部にあるものが多いが、中位、下位にあり下ぶくれのものも二・三見うけられる。調整技法は口縁部はヨコナデ、体部はハケメのものが最も多く、ハケメ後ケズリや雑なミガキのもの等も散見され一様ではない。球胴のものは口縁部が外反する大型のみで、中・小型はみられない。肩部に段を有するものが多い。調整技法は口縁部はヨコナデ、体部はハケメ後ミガキのものが多い。

高坏は、坏部が外傾し、比較的浅く底部との境に明瞭な段を有し、脚部は低く外方に広がり全体的に「X」字状を呈すものと、坏部が椀状でやはり低い脚部のものとがある。いずれも口径が20cm前後と大型であり口径に比べて器高の低いのが特徴である。

壺は、口縁部が外反直立し、体部が球胴を呈するもので頸部のすぼまりが弱いものである。 器面調整は口縁部ヨコナデハケメ、体部はヘラミガキ、内面はナデである。甑は多孔、無底の もので外面有段、無段のものが共伴する。

以上のような特徴をもった第 $\blacksquare$ 群土器と類似した内容を有するものとして、県内においては水沢市今泉遺跡、膳性遺跡、金ケ崎町上餅田遺跡、のそれをあげることができる。第 $\blacksquare$ 群土器とこれらの遺跡出土の土器と比較すると次のようなことがいえる。まず今泉遺跡の土器と比較すると、坏は、 $A_1$ 、 $A_2$ 類が「 $A_1$ 1、 $A_2$ 11 類」に、 $A_3$ 類は「 $A_4$ 1 類」に類似しているが、体部の調整技法の点で本遺跡においては、ヘラケズリも多少認められるがヘラミガキが主体的なのに対して、ヘラケズリが主体である点で異なっている。又、器形の上で $A_5$ 、 $A_5$ 類に類似するものが今泉遺跡では認められない。高坏は、B、 $C_4$ 1 類と「 $B_5$ 1  $B_5$ 1

甕は、器種、器形ともにいずれも類似性が認められる。

又、上餅田遺跡におけるそれについても、土器組成の点で多少異なりは認められるものの、 器種、技法等の点で共通した特徴をもっているということがいえる。

以上、土器組成や技法等の上で多少の異なりは認められるとしても、大筋としてはほぼ共通 した内容を有する一群ということができると思う。これらの特徴をもった一群は東北南半にお ける栗囲式に最も類似した内容を有するもので編年表ではIV群土器に該当するものである。

ただ、本遺跡における坏A。、A。類についてみた場合、口縁部との境に稜を有し、外傾気味に開くことや、口縁部が強く外反し無段であること等栗囲式の前の時期に位置づけられている住 (注9) 社遺跡出土の坏に類似した要素を強くもっているようにみうけられる。又、壺等の場合も比較 的古い要素が残っている面もみられ、これらを考慮に入れると、この第Ⅲ群土器は少なくとも 2つに細分できる可能性もあり得る。

## 〔第Ⅲ群土器〕

ロクロ未使用土師器A類を中心として構成され、まれに須恵器C類が共伴する程度である。器種としては坏、甕(長胴、球胴)、高坏、甑、手捏ね土器等で構成されている。特徴としては、坏の場合小型化(口径10~15cm)の傾向がみられ、丸底の他平底風のものもあり、段についても一般に形式的になり、無段のものも出てくる。又、技法的にはミガキが主体をなす。次に甕は、全般的に体部の膨みが大きく、口径に比べて底径の大きいことが特徴である。又、頸部の段も形式的になり、不明瞭なものが増えてくる。口唇部も単にまるめているものでなく、上方へ引き出されて内面に稜を形成したり、薄くなっているものが多い。球胴のものは大型のものが認められない。更に壺(坩)、高坏、甑等小型化、あるいは消滅(?)する傾向がみられるのもこの群の特徴である。

以上のような土器と共通する内容をもつ遺跡としては、水沢市石田遺跡、北上市尻引遺跡、藤沢 I c・I d遺跡、江釣子村鳩岡崎遺跡等をあげることができる。ここでは石田遺跡を比較の対象にしてみることとする。石田遺跡では遺構区分における II ー(2)期に該当するD d03住やB e 50住、B i 53住等を中心とする住居群出土の土器で国分寺下層式に相当するものが存在する。これらは、坏の小型化、段の形式化、平底風のものの出現にあわせて、技法的にはヘラミガキが盛行しているものである。甕についてみると頸部の段の形式化や底部の大型化、等の特徴がみられ、これらは第IV群土器のそれと非常に類似しているものである。ただ、本遺跡の坏が、口径に比べて浅いものが多いのに対して、深かめのものが多いとか、朱塗りの球胴の甕がみられない点など多少の異なりは認められる。しかし、大筋としては、特徴的に類似のものとみてよいものだろう。以上のようなことからこのような内容をもつ土器群は、東北南半における国分寺下層式といわれるものと併行するもので編年表の第 III b群に相当する。

#### 〔第Ⅳ群土器〕

ロクロ使用の土師器(B類)及び須恵器(C類)が主体を占め、ロクロ未使用の甕(A<sub>1</sub>類)がわず かに共伴し、坏類は全く認められなくなり、器種、量ともに乏しいものになってきており、ロ クロ未使用土器の末期的段階であると共にロクロ技術導入の初期的段階であるといえよう。器 種としては土師器坏、甕(長胴、大、中)、鉢、須恵器坏、甕、長頸壺、赤焼き坏である。こ れらの特徴をまとめてみると、Wa群のB、C類の坏は手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリのも のが中心をなしているのに対してb群のそれは、回転糸切り無調整のものが多いことがいえる。 甕は、A₁類のものは頸部の段が形式化され器形においてもⅢ群のそれとほとんど変化のないも のがわずかに共伴し、甕B₁~B₂類においてはまだ口唇部を上方へ引き出し、ロクロ未使用の甕 の口唇部のつくりの形態をそのまま残しているものもある。又、技法的にはタタキメ技法やロ クロナデの技法を用いたものが主体をなしている。須恵器では、口唇部を上下に引き出し、体 部上半に最大径のある甕や口唇部を上方に引き出している長頸壺などが存在する。このような 土器内容を有する遺跡としては、江刺市宮地遺跡、水沢市石田遺跡、北上市尻引遺跡等がある。 第Ⅳ群と同じような特徴をもつ土器群としては、宮地遺跡の第Ⅱ群土器の内容が最も類似し たものといえる。ここで少し微視的にみるとロクロ未使用土器及びロクロ使用土器の坏、甕、 特にその中でも須恵器の再調整のある坏の占める割合に相違が認められる。即ち本遺跡のそれ はロクロ未使用土師器とロクロ使用土師器の占める割合の点からみると、ロクロ使用土器の占 める割合の増加してきたⅡ−a₂群と類似する。しかし須恵器坏は無調整のもの及び再調整のも のが混在しているのに対して、無調整のものだけに限られているという点で異っており、この ことは、逆に本遺跡の特徴ともいえる。そして再調整の須恵器が混在しているという点では石 田遺跡におけるⅢ期の土器群により近いものともいえる。このような内容の土器群は編年表に

#### 〔第Ⅴ群土器〕

おける第₩群に相当するものである。

ロクロ使用土器B、C類のみで構成されているもので、器種としては土師器坏、甕(長胴) 鉢、土堝、須恵器坏、甕、蓋、赤焼き坏がある。土師器は回転糸切り無調整のものが主体をなし 再調整のあるものがわずかに共伴する。器形的には口径に比較して底径の小さいものが増加す る。又、甕は口縁部が短く外反し、口唇部を上方あるいは下方へ引き出しているものが多く、 技法的には雑なヘラケズリが目立つ。特殊なものとしては土堝が存在する。須恵器は、体部が 内湾的にゆるく立ち上る回転糸切り無調整のものが主体である。甕は体部上半に最大径を有す る器形のもので、前群と器形的にはかわりないが調整は雑である。その他、口径に比較して底 径の極端に小さく器高の割合高い赤焼き坏がある。

このような土器群は、ロクロ技術の本格化した時期における一群として把えることができる

もので、同じような内容をもった遺跡としては宮地遺跡、石田遺跡、相去遺跡等があげられる。 編年表における第IX群に相当するものである。

- (注1) 猫谷地遺跡における出土土器のうち、第Ⅲ群~第V群にあたる部分については既に佐久間が各器種の型式分類と変遷に関する仮設のもとに第1様式~第3様式に分けており本稿においても大筋としてそれにそったものである。「奈良平安期土器の型式分折一岩手県猫谷地遺跡出土土器の分折を通して」佐久間豊 考古学研究25−4 1978, 9
- (注2) 「東北土師器の型式分類とその編年」氏家和典 歴史-14 1957, 3
- (注3) 「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集 東北新幹線関係遺跡調査報告書ー1ー 宮城県教育委員会 日本国有鉄道仙台新幹線工事局 昭和49年3月
- (注4) 「清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集 東北新幹線関係遺跡調査報告書 V ー 宮城県教育委員会 日本国有鉄道仙台新幹線工事局 昭和56年3月
- (注5) 「岩手県南部における古代土器群の編年試案」岩手県文化財調査報告書第59集~61集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一X~M一〈参考資料〉 岩手県教育委員会 日本道路公団 昭和56年3月
- (注6)「今泉遺跡」岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋藏文化財調査報告書ーXI- 岩手県教育委員会 日本道路公団 昭和56年3月
- (注7) 膳性遺跡現地説明会資料(昭和54年5日)及び高橋与 門氏(県立埋分センター)の教示による。
- (注8)「上餅田遺跡」岩手県文化財調査報告書第59集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一X一 岩手県教育委員会 日本道路公団 昭和56年3月
- (注9) 「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」考古学雑誌43-4日本考古学会1958,3
- (注10)「石田遺跡」岩手県文化財調査報告書第61集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一XII一 岩手県教育委員会 日本道路公団 昭和56年3月
- (注11) 「尻引遺跡調査報告書」文化財報告書第17集 北上市教育委員会 昭和52年3月
- (注12) 「藤沢 I c · I d 遺跡」 現地説明会資料 岩手県埋蔵文化財センター 岩手開発 昭和52年6月3日
- (注13) 「鳩岡崎遺跡」岩手県文化財調査報告書第70集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一XII— 岩手県教育委員会 日本道路公団 昭和56年3月
- (注14) (注2) と同じ、及び「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」柏倉亮吉教授 還歴記念 論文集P77~氏家和典「観音沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第72集 東北新幹線関係遺 跡調査報告書→Ⅳ 宮城県教育委員会 日本国有鉄道仙台工事局 昭和55年9月
- (注15)「宮地遺跡」岩手県文化財調査報告書第48集 東北新幹線関係遺跡調査報告書一Ⅳ— 岩手県教育委員会 日本国有鉄道盛岡工事局 昭和55年3月
- (注16) 現地説明会資料 岩手県教育委員会 北上市教育委員会 1973年 1974年

# 3 遺構の構成と年代 (第146図1・2)

とにして住居の構成と年代について検討することとする。

前項では土器の特徴などを中心に土器群を5群に分類し、合せてその土器群の時期的な位置づけをした。こ、では、その土器群とそれを伴う住居の前後関係や住居群の構成状況についてふれてみたい。住居の新旧関係を知るための一つの手がかりとして、重複関係とそれに伴う土器等から検討するのが一般的であるが、本遺跡においては、「BG59住居跡がBD62住居跡の東壁の一部を切って構築している。」という一例のみであり、これらの新旧関係は知りうるが、他の住居についてはそれができない。従って、ここでは、土器群との関係から検討することにする。前項で分類した土器群は、そのまま、第Ⅰ期→第1群、第Ⅲ期→第2群、第Ⅲ期−第3群、というように以下第Ⅴ期、第5群までそのまま時間差におきかえることができる。それらをも

#### 〔第1期〕

第1期を構成する住居は、CH74、DA62、CJ5003棟で、北側段丘の南縁部にほぼかたまって位置する。規模はいずれも一辺が $4\sim5.5$  m の 3 類に属する住居群で差があまり認められない。カマドを有していないこと、柱穴の認められないこと、鉄器、砥石が出土していないこと等が特色である。構築年代は第I群(南小泉式期)、古墳時代中期頃と推定される。

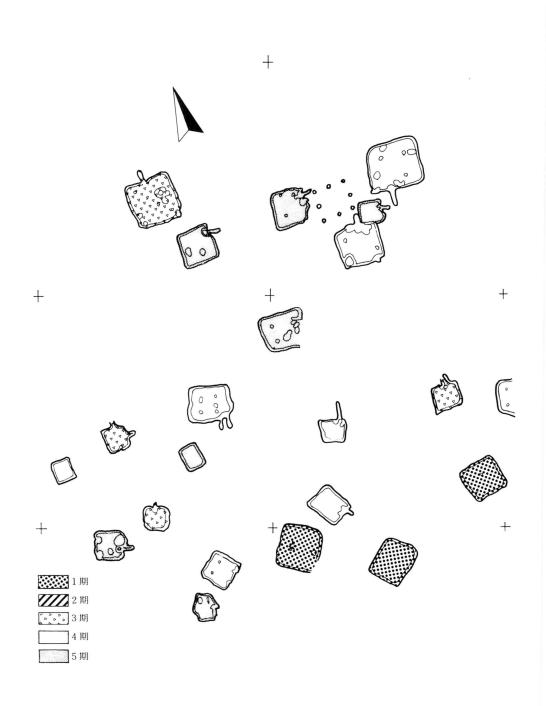
### 〔第2期〕

第2期を構成する住居は、JJ24、KA06、JG06、JG27、JF15の5棟で、最も規模の大きいJJ24を核として、その周辺にその他の大中規模(3・4類)の住居がとりまくような形で南側の自然提防上に立地する。基本的にはシルト、川原石を使ったカマドが北壁に付設され床面は貼床され柱穴が対角線上に4個配列されていること等が特徴である。鉄製品、鉄滓(分析結果参照)はJG27、砥石はKA06、JJ24の各住居跡から出土している。

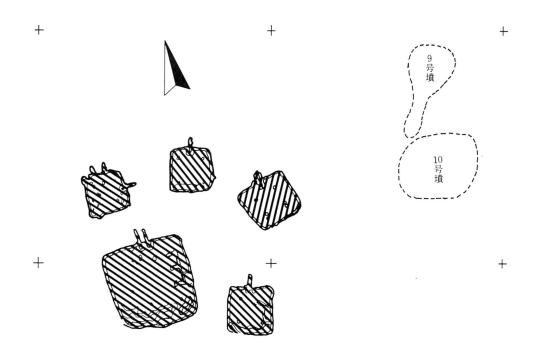
両者を合せた所有率は 6 割である。これらの構築年代は第II群(栗囲式期)古墳時代後期後半頃と推定される。ただ、既述したようにその中でも、J J 24住居跡は古い要素を有しており時間的に周辺の住居群の中で最も長期にわたって存在していたということも考えられる。その他、位置的にみて J J 24住居跡の南に位置する K A15ピット群の中に住居跡の存在した可能性も考えられ、この一群は 6 棟で構成されていた可能性もありうるだろう。

#### [第3期]

第3期を構成する住居はBF21、CE68、CJ18、CF24の4棟であり、南側の段丘上に4類の規模のBF21住居跡を北端に、南側に広い空間地帯を構成し、一見、円状に、1・2類の小規模住居が点在している一群である。カマドはシルトと芯材を使用したもの、シルトのみのもの等、多少構築法に差が認められる。付設位置は北壁が一般的であるが一部東壁に付設されるものもでてくる。柱穴は、大規模のBF21住居跡のみで他には認められない。床面の構築に



第146図-1 遺構時期区分



第146図-2 遺構時期区分

もそのままのもの、貼床のもの等変化がでてくる。鉄器はBF21・CF24、堆積土からではあるが鉄滓がBF21の住居跡から出土している。所有率は4割である。なお、この住居群で特筆されるのは「和銅開珎」を出土した、CE68住居跡の存在である。この銭貨が古墳から出土している例は数例あるが床面から出土したのは県内では最初であり遺構の性格や年代を考える上で貴重な資料である。「和銅開珎」を使用して遺構の年代を決定しようと試みた論考には伊藤(1970)がある。又、佐久間(1978)は本遺跡のそれについて下限を限定するための危険性を除去するために胆沢城の設置年代等の他の要素を組み入れる必要性を述べ、その中において8世紀中頃の年代観を与えている。

以上のような結果を考慮に入れて土器群との共伴関係から第Ⅲ期の遺構の構築は第Ⅲ群(国 分寺下層式期)奈良時代後半期と推定される。

#### 〔第4期〕

第4期を構成する住居はBD62・BH56・CE12・CF56・CI53・CB09の6棟とCH30竪穴状遺構である。これらの住居群の中ではBD62住居跡が規模が大きく(4類)、他は、中小規模(1・2類)で、これらは北側段丘上にⅢ期の住居群をさけて点在する。カマドは、北壁に位置するものが減少し、東壁及び南壁に付設されるものが多くなるが、特に、南壁に付設されるものが増加する。カマドの側壁の構築はⅢ期のそれとあまり変らないがカマドの断面形

態からみると焚口部で一端煙道が上に上がり、次は次第に下降して煙出部に接続するものが多い。柱穴は1辺4m以上の規模のものにのみ認められ、それが対角線上より一方向の壁面に寄るという特徴をもつ。鉄製品はBH56住居跡のみで出土数が少ない。

これらの住居群の構築年代は第IV群に併行するものである。しかし、年代については、明確な根拠になる資料という点では不足しており、県内における類似土器群出土の他遺跡の例などを参考にするならば、平安時代前半期頃ということが考えられる。

### 〔第5期〕

第5期を構成する住居はBF50・BG59・CB03・DA24・DC12・BH12の6棟の住居群とDC12竪穴状遺構である。この期の住居は、小形化が目立ち、1・2類に属する小規模のものになる。これらのうち、BG59住居跡は、4期のBH56住居跡と南壁が一部重複して構築されているが、他は、いずれの住居跡もさけて点在している。カマドは東壁に付設され中でも中央より北に寄った位置に存在するものが多い。又、側壁は、シルトのみで構築されるようになる。柱穴は一辺4m以上のものには認められるのは第4期のものと同じであるが、あまりはっきりしない例が多い。

鉄製品の出土はBF50・CB03・BG59、砥石はBF50・CB03の各住居から出土しており 所有率は約5割である。これらの構築年代は、第V群に併行する時期と考えられるが、4期と 同じように県内の類似の土器群出土の遺跡の例などから平安時代後半期頃と推定される。

- (注1・2)「未期古墳の年代について一東北地方未期古墳出土遺物を通して一」伊藤亥三「古代学」14の3・4 1968年。岩手県内からは「花巻市熊堂古墳」「金ケ崎町西根縦街道南15」の古墳関連の遺構からの出土例が述べられている。又「陸奥北半における未期群集墳の性格」沼山源喜治「北奥古代文化」第8号 昭和51年5月の中に「岩手郡上太田蝦夷森古墳群」から出土していることが述べられている。
- (注3) 「奈良、平安期土期の型式学的分析」 ―岩手県猫谷地遺跡出土器の分析を通して一佐久間 豊「考古学研究」 25-2 1978, 9

### 4 まとめ

以上、本遺跡における古代の集落跡についてまとめると次のようになる。

- 1. 集落は古墳時代後半期に低位段丘縁辺に最初に形成され途中多少の断続はあるが奈良~ 平安時代にわたってその消長がくりかえされてきた。
  - 2. 立地は、低位段丘上から自然堤防上へ、そして、又、低位段丘上へと変化が認められた。
- 3. 集落の構成は調査範囲という規制はあるが、3~6棟が一つの集落を形成し、各期における差異が比較的少ない。規模は、古墳時代中期頃においては差がほとんどないのに対して、後期後半~奈良時代にかけては、中核となる大形住居を中心として集落を形成する傾向にあり、これらの集落の形態は当地域における一つのパターンとも考えられる。

- 4. 住居の形態をみると、棟方向はほぼ南北指向であり、それが古期に属するものほど強い傾向がある。カマドについても北壁中心から南壁、東壁への移動やカマドの構築上の変化がみられ、柱穴の位置の変化や有無などそれぞれ時期的な傾向性が認められた。
- 5. 出土遺物についてみると、大形住居における出土量が特に多く器種的にも豊富である。 このことは、その集落間における有力者の存在をも考えられ、人々の間に何等かの差の表われ てきていることを示唆しているものであろう。又、各期における日常汁器を中心としたセット 関係がある程度把握された。
- 6. CE68住居跡より出土した「和銅開珎」は、遺跡の年代、性格等を考える上での貴重な 資料である。

おわりに、本遺跡の東隣及び西方に位置する猫谷地古墳群、五条丸古墳群等の関係についてはふれなかったが今後両古墳群の出土遺物の検討や未期古墳の性格、当時の集落と墓域との関係及び、当遺跡や周辺の遺跡における出土資料等をも合わせて多方面から検討することがこれからの課題である。

## 〔参考文献〕

- 江釣子村史 江釣子村教育委員会
- 「江釣子遺跡群一昭和54年度発掘調査報告一」 江釣子村教育委員会 昭和55年3月
- •「江釣子遺跡群一昭和55年度発掘調査報告一」 江釣子村教育委員会 昭和56年3月
- 「五条丸古墳群一和賀郡江釣子村所在一」 伊東信雄 板橋源 岩手県教育委員会 昭和38年
- 「猫谷地・五条丸古墳群(増補再刊)

江釣子村教育委員会 昭和53年

- 「五条丸古墳群の被葬者たち」 林 謙作
- 考古学研究25-3 昭和53年12月
- ・「竪穴住居の分類と系譜」 橋本 正
  - 考古学研究23-3 昭和51年12月
- 「七世紀初頭における集落構成の変質」 山田 猛 考古学研究28-3 昭和56年12月
- 「胆沢城と古代村落ー自然村落と計画村落ー」 伊藤博幸 日本史研究215 昭和55年7月
- 日本の考古学―古墳時代―

河出書房新社

昭和53年 昭和39年

- 「和銅開珎をめぐる諸問題」 佐藤虎雄
  - **左**雄 古代学11-4
- ・「出土資料によるわが国貨幣の考察」 矢島恭介 古代学11-4 昭和39年
- 「五輪C遺跡」 宮城県文化財調査報告書第61集

宮城県教育委員会 東北地方建設局仙台工事局 昭和54年8月

- •「観音沢遺跡」 宮城県文化財調査報告書第72集 東北新幹線関係遺跡調査報告書-IV-宮城県教育委員会 日本国有鉄道仙台新幹線工事局
- 「糠塚遺跡」 宮城県文化財調査報告書第53集 東北自動車道関係発掘調査略報(昭和52年度分) 宮城県教育委員会 日本道路公団
- 「舞台」 ー福島県天栄村における古墳時代の集落ー 福島県天栄村教育委員会 昭和56年
- 「玉貫遺跡・西根遺跡」金ケ崎バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書18集 (財) 岩手県埋蔵文化財センター 建設省岩手工事局
- 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一Ⅲ一 岩手県文化財調査報告書第59集 岩手県教育委員会 日本道路公団 昭和56年3月
- 一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書- I -
- 一戸町教育委員会 建設省岩手工事事務所 昭和56年

第17表 破 片 集 計 表

+		294	342	100	296	3382	3 173			19	147	917	45	9	155	7	1	2	9	121	173	75	28	467	16	=	20		(2) 6853	6874
	堆積土	231	① (1)	00 92 0		2337 3	120			15	117	763	37	4	140	3	-	2	9	119	191	69	82	380	16	=	20		(6) (5) 5172 6	5188
十		8 ⊕	⊕ <sub>2</sub>	8	122 1	5 23				4	30 1	154 7	∞	2	15 1	4				2 ]	12 1	9		87					(S) (LE	1686 5
Ш	想 難	9	9	8	12	1045	33				63	15			_						_			~					168	168
885 1585 1585 1585	遺標					_				_				_																-
C H 30 聯次採	堆積土	-			7	130	33				6	2	2											16					163	23
C C C C C C C C C C C C C C C C C C C	遺 撰																							52					46	46
C G 12 竪穴状	遺標	-				19					-	-												2					1 4	4
71 (E	堆镇土																													
E CD	遺 標					0														-									χ <sub>Θ</sub>	36
DC12f£ CD71f£	遺標			1 3		43 30	4								-					_									48	86
19€	堆積土				ю	14																		-					18	18
BH12(£ DB09(£	连 横					5 4	1				- 8	4	_											75	r.c				2 (3)	137 4
BH12(	遺標	_	2	(2)	2 1	13 35	_				ω.	4	4		2	_		_						7					20 11	20 1
BC59f£ F	堆積土			-	-	ıs									12														19	19
	堆積土 遺 燘	8	14 1	ın	2							-		-	8	-				27	∞	27	-	∞					135	8
DA24(£	造構	1 24	à	1 15	34	44	1					_		_	,	-				1 2	~	2	-	~					82	82
CB03{∄	堆積土	Ξ	16	6	Ξ	23	11			12	r.	7	4	3	21					10	21	-							× 6	æ
E CB	堆積土 億	2	7 4	2	8	56 75	4				23	1	3 1	1	9	-					∞	m		23					89 108	89 108
BF50(£	造構	13 2		2 2	т	35 5	®				,	8			-					_	4	2							67 8	72 8
	维铸士					œ	-				-													-					Ξ	Ξ
CE12(£ CI 53(£	遺 慣				-	3 16	-						-		m	_			_	-		-		_	_				186 17	17 981
CE12(	遺標推模士	_	_	2	4 2	74 163	9 10				6 2	2	_		(4)									299					154	154
CF56(£	推構士	Θ			4	88																	27	143	6				17 (1)	212
	遺 撰	-			9	32	-								_	_			_	-	_		_	_					6 39	6 39
BH56(£	堆積土	101	152	57	25	<b>9</b> 8	27				22		6		62	2				55	68	56		22					1036	1036
	连 横	16 12	∞	12 3	10 13	191	14 7				7 5	2	6 2		25 7	-	_	2	9	52	41	12							348 221	348 221
BD62(∄	造構出	-	12 8	-	2	58 16	8				63		-		2					2	4	_				-			89	89
CJ 18(£	推慎士	4			15	187	13																						219	219
3	推 镇 土					56									-					-		_	-	32		-			59	59
CE68(£ CF24(£	造構		8		_	10 2	_									-				$\vdash$		$\vdash$		. m		$\vdash$			14 5	14 5
₹189	推慎土	2	S		2	52	-															2							29	22
ECE	推積土造模	2			61	49 39	ro				2				-	-	_			-						-	-		52 50	52 50
BF21(∄	造標	9 2	2		17	9	4								2	-								27					71 5	71 5
J J 24(E	推構士	17	15							2	293	338	œ		-														837	758
3	堆積土 遺 標	9 6	6 12		12	145	r.c			-	15	143	m		-					-						-			178 180	178 180
KA06f£	造構	1	9		9	71 14	-																	3					1 16	91
:27(E	推積土	-	17		14	011	т																						3 152	3 152
SIE JGZ7IE	堆積土 遺 憐	2 2	5 4		9	85	2 1			-					-					-				-		-			100 18	100 18
三	遺 撰	-	-		т	95	-			-																			163	163
J G06f£	堆積土	-	58		18	280	14																						333	12g
Œ JG	推積土 遺 概	-	12		16	166	9			-	-					-	-			-		-			-	-			308	308
CJ 50Œ	遺 憐	-																												
162(E	堆積土	-			2	9 130	12				2													72					2 207	2 207
CH74(£ DA62(£	堆積土 遺 構	-	21	2	8	106 29	m				-	_			-					-	2	-			2	=	70		32 32	306 32
CH74	遺 標	-				_																					-			54
		Ξ	*	斑	Ξ	*	展	□	*	炭		*	湖	П	*	湖	П	*	近	п	*	湖	П	*	展	П	*	展	÷.	±-
			*			數		W	8	型		*			数		4	6	和		*		1	₹ :	*					
				+1		£			Ž.			1	<del>.</del>		₽į			Ž.		华	#3	40	慧	₩+	1 10	松	#1 +	110	÷	₹¤
																				-										

### I BD62住居址出土の籾(計測表、図版57)

猫谷地BD62住居址南壁のカマド煙道部内に在った広口の甕から検出されたものである。発掘時甕には土壌がぎっしり充填されていたということである。バラバラの粒は表面白く灰におおわれているが、心の籾は黒炭化していた。ほとんどの粒の身は空洞化し、よほど留意して計測しないとつぶれてしまう。この状態は、籾が甕の中で蒸し焼きされ黒炭化したのち更に再び強い熱気を浴びて外部組織が灰化したことを示している。白い灰粉は、籾殻の灰化した組織細粉である。破砕しやすく、少しの振動で粉化する状況で、総数約千粒、大半が不完全粒である。完形 530 粒の中30%、160粒を計測した。計測は米粒とした後行った。

### 1 粒形の変異(計測表、第1・2図)

粒長の最大5.40mm (No.1)、最小3.30mm (No.160未熟粒)、平均4.18mm、±0.38mm、粒幅の最大3.50mm (No.35・67、焼け太り粒)、最小2.40mm (No.130・137・149、不稔、未熟粒)、平均2.95mm、(注1) ±0.24mm、粒厚の最大2.70mm (No.24、焼け太り)、最小1.40mm (No.147、未熟粒)、平均(m)2.06mm、±0.20mm、粒型の最大1.74mm (No.1)、最小1.12mm (No.157、未熟粒)、平均1.42、±0.13、粒の大きさの最大14.74mm (No.1)、最小8.25mm (No.160、未熟粒)、平均(m)12.40mm、±1.70mm。

# 2 粒型とその大きさ (第1表-1・2)

粒型をあらわすために original data から計算した粒長 1 粒幅比を、また粒長  $\times$  粒幅積を求めて粒の大きさを表わす分類基準とした表に該当する計測値をプロット(実際には第 1 表のように番号で入れていく)して集計すると、計測した160 粒中、粒型では短粒84(52.50%)、円粒76(47.50%)であり、粒の大きさの点では、中粒 1(0.62%)、小つぶ粒 101(63.13%)、極小つぶ58(36.25%)で、短粒と円粒の小つぶ粒が圧倒的に多い。

粒型とその大きさから判断される範囲では、BD62住居址出土粒、DA24住居址出土粒ともに短粒と円粒の小つぶ粒が圧倒的多数の構成をもつ粒群であるということができる。従ってこれら米粒群についての粒型とその大きさの構成比率は、第1表-2にみられるように、主として短粒から構成され、それに、それらよりも小量の円粒を混えるという、東北地方で古くから栽培されていた稲の基本的パターン S. R. を示し、東北地方のプロトタイプに属するものであるといえる。

#### ■ DA24住居址出土の籾(計測表、図版58)

黒炭化した約4グラムの籾塊(70mm×60mm×35mm)で、現に二片に割れているが、もとは一個体に属していたものであろう。各面に自然面を残していて極めて狭い空間の中で蒸し焼きされたという状態である。二側面にところどころ平滑面がみられる、その幅1cm未満、長さも最

も長いところで3cm、少々湾曲している。幅せまい長辺の一側面は平らで、焼け砂が未だ残っているところをみると、この側で住居の床面へ接していたものかもしれない。計測には脱粒の米粒によった。

### 1 **粒形**(計測表、第1·2図)

粒長の最大5.30mm (No.1)、最小4.00mm (No.22・23)、平均4.51mm、±0.35mm、粒幅の最大3.30 mm (No.18・22)、平均2.88mm、±0.23mm、粒厚の最大2.30mm (No.14、焼けぶくれ粒)、最小1.60mm (No.19、未熟粒)、平均1.97mm、±0.17mm、粒型の最大1.96mm (No.1)、最小1.21mm (No.22、未熟粒)、平均1.57、±0.18、又、粒の大きさの点では最大15.50mm (No.3)、最小10.32mm (No.17)、平均12.99mm、±1.33mmである。

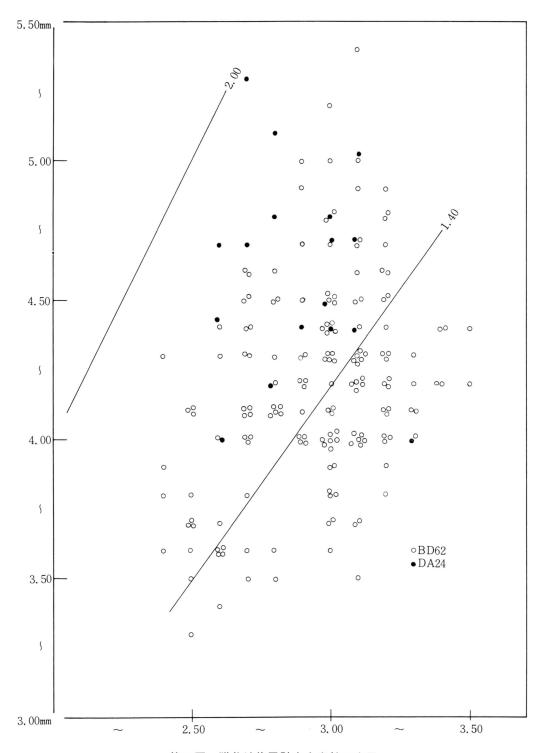
### 2 粒型とその大きさ (第1表-1・2)

粒型についていえば、23粒中20粒 (86.96%) が短粒、3粒 (13.04%) が円粒であり、その大きさでは、18粒 (78.26%) が小つぶ粒、5粒 (21.74%) が極く小つぶの粒である。これらの粒の構成のパターンは S.R. である。

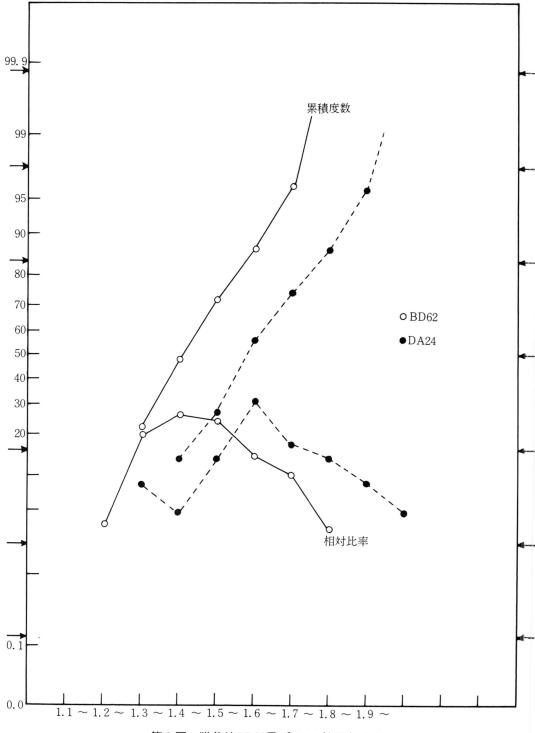
### Ⅲ 要 約

- 1. BD62、DA24両住居址出土粒は短粒小つぶが主体である。
- 2. 粒構成のパターンは、S.R. で東北地方のプロトタイプに属する。
- 3. 粒型は円く有芒であり日本型を示す在来稲である。
- 4. BD62の粒型を示す平均値1.42±0.13、その母集団における95%信頼限界1.40< $\mu$ <1.44 と、DA24の粒型を示す平均値1.57±0.18ならびにその母集団における信頼限界1.49< $\mu$ <1.65 ではあまりに隔絶しているので、その差を比較検定した結果、それらの間に有意差を認められなかったので、肉眼的所見とも矛盾なく、同一品種群に属するものと解される。
  - (注1) 平均 $\overline{X}$ と平均値 $\overline{x}$ とは多くの場合一致したが、違った場合は $\overline{x}$ を採用し(m)と表示した。
  - (注2) 分類基準については「東北縦貫自動車道文化財調査報告書」▼ (1981) P.310
  - (注3) 東北地方の粒の構成パターンとしては、(1) S. R.; (2) L. S. R.; および(3) L. S.;の三つのパターンがある。大瀬川 C 遺跡、柳田館および花巻古館遺跡の出土粒にみられる。 (「東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書」▼(1981) P.310)
  - (注4) 平均値相互検定については下式によった。

to=
$$\frac{|\overline{x_1} + \overline{x_2}|}{\sqrt{\frac{Sx_1 + Sx_2}{n_1 + n_2 - 2} \left(\frac{1}{n_1} + \frac{1}{n_2}\right)}}$$



第1図 猫谷地住居跡出土米粒の変異



第2図 猫谷地BD62及びDA24粒型(L/B)

第1表-1 猫谷地遺跡出土籾の粒型とその大きさ

		Size	IT. I a	land in			
Sha	ре		~極々小~ 8	:00 ~ 極 小 ~ 12   <sup>mm</sup>	:00 ~ 小 ~ 16:  mm	00 ~ 中 ~  mm	合 計
長	粒	2.00以上	_	_	_	_	_
		1.80 ~ 2.00 以上 未満	_	_	1.2.9	_	
<i>4</i> =:	ملط	1.60 ~ 1.80以上 未満	_	44. 45. 46. 99. 100. 101 16.17	2. 3. 5. 8. 11. 12. 16. 20. 22. 23. 31. 32. 33 3.4.5.8.11	1	84 (52. 50 %)
短	粒	1.40 ~ 1.60 以上 未満	_	65. 66. 82. 90. 91. 92. 93 94. 95. 96. 97. 98. 123. 124. 125. 126. 130. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 145. 147. 149. 155 19.20.23	6. 7. 9. 10. 13. 14. 15. 17 18. 19. 21. 24. 25. 26. 27 28. 29. 30. 38. 39. 40. 41 42. 43. 57. 58. 59. 60. 61 62. 63. 64. 78. 79. 80. 81 6.7.10.12.13.14.15	_	20 (86.95%)
円	粒	~ 1.40 未満	_	119. 120. 121. 122. 128. 129. 132. 133. 134. 141. 142. 143. 144. 146. 148. 150. 151. 152. 153. 154. 156. 157. 158. 159. 160	34. 35. 36. 37. 47. 48. 49 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73 74. 75. 76. 77. 83. 84. 85 86. 87. 88. 89. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 127. 131 18.21.22	_	76 (47.50%) 3 (13.04%)
	合	計	_	58 (36. 25 %) 5 (21.74)	101 (63. 13%) 18 (78.26%)	(0.62%)	160 (100%) 23 (100%)

※ゴジックは DA24出土粒の番号

第1表-2 粒型の構成

粒	長 粒	Ť.	豆    *	立(Short	)		円	粒 (Rou	nd)	合 計
出土区	(Long)	中	小	極小	小計	中	小	極小	小計	合 計
BD62	_	1	50	33	84 (52.50)	_	51	25	76 (47.50)	160 (100)
BD62 (1978年)	_	2	52	7	61 (61.00)	1	24	14	39 (39.00)	100 (100)
DA24	_	_	15	5	20 (86.96)	_	3	_	3 (13.04)	23 (100)

表1 猫谷地BD62住居址出土籾

			74 4 5			
No.	L	В	Th	L/B	L×B	remarks
1	5. 40	3.10	2.10	1.74	16.74	着粒部残る
2	5. 20	3.00	2. 20	1.73	15. 60	計測中破損
3	5.00	3.10	2.00	1.61	15.50	
4	5.00	3.00	2. 30 (2. 80)	1.66	15.00	厚さ焼けぶくれ
5	5.00	2.90	2.10	1.72	14.50	
6	4.90	3. 20	2.30	1.53	15. 68	
7	4.90	3. 10	2.30	1.58	15. 19	
8	4.90	2.90	2.20	1.68	14. 21	
9	4.80	3. 20	2.00	1.50	15.36	
10	4.80	3. 20	2.40	1.50	15.36	
小 計	49.90	30.70	21.90	16. 25	153. 14	
11	4.80	3.00	2.00	1.60	14.40	
12	4.80	3.00	2.20	1.60	14.40	
13	4.70	3. 20	2.40	1.46	15.04	破損
14	4.70	3.10	2.00	1.51	14.57	
15	4.70	3.10	2.00	1.51	14. 57	
16	4.70	2. 90	2.00	1.62	13.63	
17	4.70	3.00	2. 20	1.56	14. 10	
18	4.60	3. 20	2.00	1. 43	14.72	Ø
19	4.60	3. 20	2.10	1. 43	14.72	
20	4.60	2.70	1.90	1.70	12.42	٥
小 計	46. 90	30.40	20.80	15. 42	142.57	
21	4.60	3.10	2. 10	1. 48	14. 26	
22	4.60	2. 80	2. 20	1.64	12.88	
23	4.60	2.70	2.00	1.70	12.42	
24	4.50	3.20	2.70	1.40	14. 40	
25	4.50	3. 10	2.30	1. 45	13. 95	
26	4.50	3.10	2.10	1. 45	13. 95	
27	4.50	3.00	2.00	1.50	13.50	
28	4.50	3.00	2.10	1.50	13.50	
29	4.50	3.00	1.70	1.50	13.50	
30	4.50	3.00	2.10	1.50	13.50	
小 計	45. 30	30.00	21.30	15. 12	135. 86	-
31	4.50	2.80	1.70	1.60	12.60	未熟粒
32	4.50	2.80	2.30	1.60	12.60	7. X.3.1.V.
33	4.50	2.70	2.00	1.66	12. 15	
34	4.40	3.40	2.20	1. 29	14. 96	焼け太り
35	4.40	3. 50	2. 10	1. 25	15. 40	焼け太り
36	4.40	3. 40	2. 10	1. 29	14. 96	焼け太り
37	4.40	3. 20	2.40	1. 37	14. 98	焼け太り
38	4.40	3. 10	2. 40	1. 41	13.64	焼け太り
39	4.40	3. 10	2.30	1. 46	13. 20	焼け太り
40	4.40	3.00	1.60	1. 46	13. 20	NOT A 7
	4.40	3.00	1.00	1.40	13. 20	

表 2 猫谷地BD62住居址出土籾

No.	L	В	Th	L/B	L×B	remarks
41	4.40	3.00	2.30	1.40	13. 20	焼け太り
42	4.40	3.00	2.10	1.40	13. 20	焼け太り
43	4.40	3.00	2.30	1.40	13. 20	焼け太り
44	4.40	2.70	2.10	1.60	11.88	
45	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88	焼けぶくれ (0
46	4.40	2.60	1.90	1.62	11. 44	•
47	4. 30	3.30	2.30	1.69	14. 19	
48	4.30	3. 20	2.10	1.39	13.79	胴切れ ♪ 焼けぶくれ
49	4.30	3. 20	2.40	1.34	13. 76	厚さ焼けぶくれ
50	4.30	3. 20	1.90	1.34	13.76	
小 計	43.60	29. 90	21.40	14. 45	130. 27	
51	4.30	3.10	2.00	1.38	13. 33	
52	4.30	3.10	2. 20	1.38	13. 33	
53	4.30	3. 10	2. 20	1.38	13. 33	
54	4.30	3. 10	2.40	1.38	13.33	焼け太り
55	4. 30	3. 10	1.90	1.38	13. 33	.,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
56	4.30	3. 10	1.90	1.38	13. 33	
57	4.30	3.00	2. 10	1.43	12.90	幅焼けぶくれ 🛭
58	4.30	3.00	2. 20	1.43	12. 90	,
59	4.30	3.00	2. 10	1.43	12.90	
60	4.30	3.00	1. 90	1.43	12.90	
小 計	43.00	30.60	20.90	14.00	131.58	
61	4.30	3.00	2. 10	1.43	12.90	
62	4.30	2.90	2. 20	1.48	12.47	
63	4.30	2.90	2. 50	1.48	12.47	厚さ焼け太り
64	4.30	2.80	2.00	1.53	12.04	., -,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
65	4.30	2.70	1. 90	1.59	11.61	
66	4.30	2.70	1. 90	1.59	11.61	
67	4.20	3.50	2. 20	1.20	14.70	
68	4. 20	3.40	2.20	1. 23	14. 28	
69	4.20	3.40	2.50	1. 23	14. 28	焼け太り
70	4. 20	3. 20	2.30	1. 31	13. 44	77C-17AC 7
小計	42.60	30.50	21.80	14. 07	129. 80	
71	4. 20	3. 20	2. 20	1.31	13. 44	
72	4. 20	3. 20	2.00	1.31	13. 44	
73	4. 20	3. 10	2. 10	1.35	13. 02	
74	4. 20	3. 10	1.80	1.35	13. 02	
75	4. 20	3. 10	2.00	1.35	13. 02	
76	4. 20	3. 10	2. 10	1.35	13. 02	
77	4. 20	3. 10	2. 10	1.35	13. 02	
78	4. 20	3. 00	2. 10	1.40	12.60	
79	4. 20	2. 90	2. 30	1.44	12. 18	厚さ焼け太り
80	4. 20	2. 90	2.00	1.44	12. 18	THE MUTACI
		JU	2.00	1. 11	12.10	